

長崎大学熱帯医学研究所

年報

平成29年度
(2017)



長崎大学熱帯医学研究所



国立大学法人

長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

長崎大学熱帯医学研究所

総 合 目 標

熱帯地域に存在する複雑多様な自然・社会環境が、熱帯病をはじめとする錯綜した健康問題を引き起こし続けている。国際交流の進展が著しい今日、これらの問題は世界的視野に立って解決されなければならない。

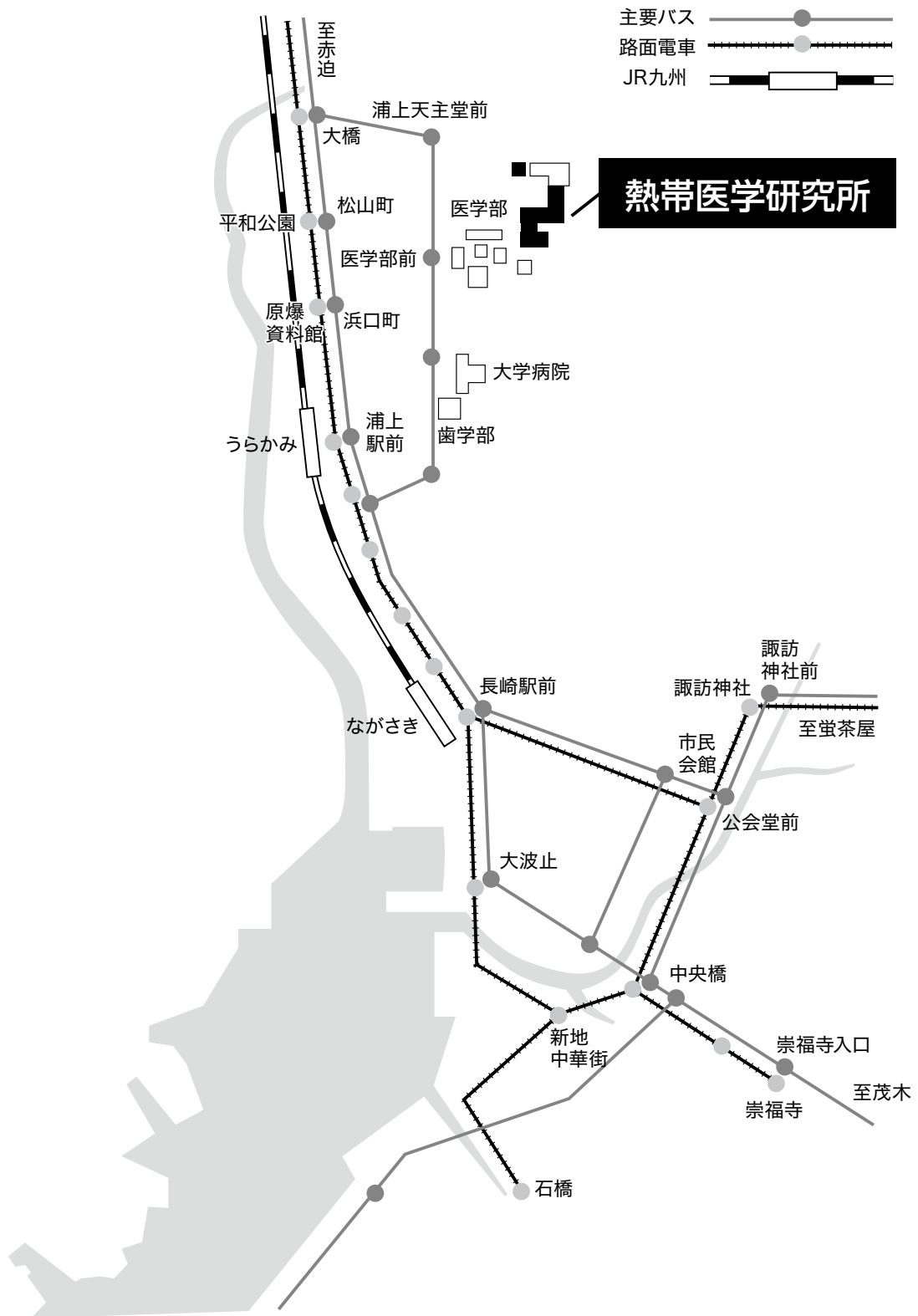
長崎大学熱帯医学研究所は、上述の認識に基づき、熱帯病の中でも最も重要な領域を占める感染症を主とした疾病と、これに随伴する健康に関する諸問題を克服することを目指し、関連機関と協力して以下の項目の達成を図るものである。

1. 熱帯医学及び国際保健における先導的研究
2. 研究成果の応用による熱帯病の防圧ならびに健康増進への国際貢献
3. 上記に係る研究者と専門家の育成



研 究 所 全 景

長崎大学熱帯医学研究所位置図



所在地 長崎市坂本1丁目12-4(852-8523)
電話 095-819-7800 (総合案内)

はじめに

長崎大学熱帯医学研究所
所 長 平 山 謙 二

長崎大学熱帯医学研究所は、昭和17年（1942）に長崎医科大学附属東亜風土病研究所として開設され、昭和42年（1967）に長崎大学附置熱帯医学研究所となり、熱帯医学研究を目的とする国内唯一の公的機関として活動しています。本研究所は平成元年（1989）に全国共同利用研究所となり、平成5年（1993）には世界保健機関（WHO）からWHO協力センター（熱帯性ウイルス病に関する資料と研究）に指定され現在に至っております。また、平成21年度（2009）には全国共同利用「熱帯医学研究拠点」の認定を受け、新たな運営制度のもと全国の研究者コミュニティに開かれた研究所として活動を強化してすでに10年が経過しました。また、平成15年（2003）の国立大学法人化以来、医歯薬学総合研究科や熱帯医学グローバルヘルス研究科と共同して、文部科学省「21世紀COEプログラム」「グローバルCOEプログラム」「博士課程教育リーディングプログラム」を獲得し、研究教育の改革を進め、昨年平成30年度は「卓越大学院プログラム」にも採択されました。平成29年度（2017）の研究所の組織は4大部門（15研究分野、1客員分野、1外国人客員分野を含む）、2附属施設、1診療科で構成されています。

さて、熱帯地域を中心とする開発途上国はマラリアなどの古典的熱帯病の高度流行地を抱えるだけでなく、グローバル化する新興再興感染症や薬剤耐性菌などの発生源としても重要な地域となっています。当研究所は、下記に掲げる総合目標（Mission Statement, 平成11年5月策定）を掲げてこの分野での研究、国際貢献、教育の各領域で関連機関と協力した活動を展開しているところです。

（熱帯医学研究所 総合目標）

1. 熱帯医学及び国際保健における先導的研究
2. 研究成果の応用による熱帯病の防圧ならびに健康増進への国際貢献
3. 研究者と専門家の育成

この年次要覧は総合目標の達成を目指して、平成29年（2017年）度に熱帯医学研究所が共同利用研究所として実施した共同研究、研究所各分野と附属施設での主に科研費による学術研究、AMED-JICAのSATREPS事業、GHIT Fund, BILL & MELINDA GATES foundation等の外部資金による大型応用研究の実施状況、海外からの研究者や学生の受け入れ状況、研究所が実施した人材育成活動、研究所の財務状況、研究成果出版物等を網羅的に記録したものです。国際感染症の脅威は続いており、平成29年（2017年）にはコンゴ民主共和国東北部でのエボラ出血熱の多発が国際的な問題となり熱研からも専門家の派遣が行われました。BSL4研究施設の学内設置も含め、本研究所への期待もますます大きくなっています。

今後の熱帯医学研究所のさらなる発展の為、皆様のご意見とご協力をお願いする次第です。

長崎大学熱帯医学研究所年報 平成29年度（2017）

目 次

総合目標

長崎大学熱帯医学研究所位置図

はじめに

1	沿革	1
	歴代所長	2
2	組織及び規模	
2. 1	組織	3
2. 2	職員	4
2. 3	経費	12
2. 4	敷地と建物	12
3	熱帯医学研究拠点共同研究	
3. 1	一般共同研究	13
3. 2	研究集会	19
3. 3	海外拠点連携共同研究	21
4	研究活動	
4. 1	ウイルス学分野	22
4. 2	新興感染症学分野	24
4. 3	細菌学分野	26
4. 4	原虫学分野	27
4. 5	寄生虫学分野	32
4. 6	分子疫学分野	34
4. 7	免疫遺伝学分野	35
4. 8	病理学分野	
4. 8. 1	病理学	38
4. 8. 2	マラリア学	41
4. 9	生態疫学分野	42
4. 10	国際保健学分野	43
4. 11	病害動物学分野	47
4. 12	臨床感染症学分野	48
4. 13	小児感染症学分野	50
4. 14	臨床開発学分野	53

5	附属施設	
5. 1	アジア・アフリカ感染症研究施設	
5. 1. 1	ケニアプロジェクト拠点	58
5. 1. 2	ベトナムプロジェクト拠点	60
5. 2	熱帯医学ミュージアム	66
5. 3	共同研究室	
5. 3. 1	分子細胞生物学ユニット	67
5. 3. 2	光学顕微鏡ユニット	68
5. 3. 3	電子顕微鏡ユニット	69
5. 4	熱研生物資源室	70
5. 5	顧みられない熱帯病イノベーションセンター	71
5. 6	フィラリアNTD室	72
5. 7	人道支援調整室	75
6	特別事業費による事業	
6. 1	熱帯医学研修課程	77
7	外部資金による研究	
7. 1	文部科学省科学研究費補助金（平成29年度）	79
7. 2	受託研究費等（平成29年度）	83
7. 2. 1	受託研究	83
7. 2. 2	受託事業費	85
7. 2. 3	その他の補助金	85
7. 2. 4	民間等の共同研究	86
8	海外活動	87
9	外国人研究者の受け入れ	
9. 1	平成29年度に受け入れた外国人研究者	104
10	研究成果の発表状況	
10. 1	研究業績	106
10. 2	学会発表演題	122
10. 3	国際会議における研究発表	133
10. 4	報告書等印刷物	142
11	講演会	
11. 1	熱帯医学研究所における所外講師による講演	144
11. 2	熱帯医学研究所教員による講演	145
11. 3	熱帯医学研究所主催・共催の市民公開講座（平成29年度）	151
12	主要な研究設備	152
13	刊行物	153

1 沿革

昭和17年 3 月	長崎医科大学附属東亜風土病研究所設立	平成 3 年 4 月	感染生化学部門の増設
昭和20年 8 月	原爆投下により研究所建物及び研究資料消失	平成 6 年 3 月	本館の第四次増築竣工
昭和21年 4 月	長崎医科大学風土病研究所に改称	平成 6 年 4 月	大部門制に改組(3大部門12研究分野)
昭和21年 5 月	諫早市に移転し, 研究活動再開	平成 7 年 4 月	世界の最先端の学術研究を推進する卓越した研究拠点(COE)の研究所に指定
昭和24年 5 月	新制長崎大学に附置され, 長崎大学附置風土病研究所に改称	平成 8 年 4 月	病原体解析部門に分子疫学分野(外国人客員分野)の新設
昭和32年 7 月	諫早大水害により, 施設, 機器, 研究資料等に壊滅的な被害	平成 9 年 4 月	附属熱帯医学資料室の廃止・転換に伴い, 附属熱帯病資料情報センターの新設
昭和34年 3 月	長崎市興善町の元長崎大学医学部附属病院外来患者診療所跡に移転	平成13年 4 月	附属熱帯病資料情報センターの廃止・転換に伴い, 附属熱帯感染症研究センターの新設
昭和36年 3 月	長崎市坂本町に新庁舎竣工	平成15年 3 月	本館の第五次増築(熱帯性病原体集中研究管理棟)竣工
昭和36年 4 月	新庁舎に移転	平成17年 9 月	ナイロビ研究拠点 設置
昭和39年 4 月	疫学部門の増設	平成18年 3 月	本館の改修工事竣工
昭和40年 4 月	寄生虫学部門の増設	平成20年 4 月	附属熱帯感染症研究センターの廃止・転換に伴い, 附属アジア・アフリカ感染症研究施設及び熱帯医学ミュージアムの新設
昭和41年 4 月	ウイルス学部門の増設	平成21年 6 月	共同利用・共同研究拠点「熱帯医学研究拠点」に認定
昭和42年 2 月	本館の第一次増築竣工	平成23年 4 月	臨床研究部門(3研究分野)の増設
昭和42年 6 月	風土病研究所が熱帯医学研究所に改称		マラリアユニット新設
昭和42年 6 月	熱帯医学研究所内科として, 医学部附属病院に設置	平成24年 3 月	「熱帯医学研究コース」終了
昭和49年 4 月	附属熱帯医学資料室設置	平成25年 6 月	熱帯性病原体感染動物実験施設廃止
昭和49年 4 月	病原細菌学部門の増設	平成26年 4 月	附属熱帯医学ミュージアムの移設
昭和53年 3 月	感染動物隔離実験棟竣工	平成27年 4 月	熱研生物資源室, フィラリアNTD室開設
昭和53年 4 月	防疫部門(客員部門)の新設	平成28年 4 月	人道支援調整室, 顧みられない熱帯病イノベーションセンターの新設
昭和53年 4 月	熱帯医学研修課程の新設		
昭和54年 4 月	感染動物隔離実験棟が熱帯性病原体感染動物実験施設に昇格		
昭和55年 3 月	本館の第二次増築竣工		
昭和58年 4 月	国際協力事業団(JICA)の集団研修コース「熱帯医学研究コース」開設		
昭和59年 4 月	原虫学部門の増設		
昭和60年 8 月	本館の第三次増築竣工		
昭和62年 4 月	病害動物学部門の増設		
平成元年 4 月	熱帯医学研究所は共同利用研究所に改組		

歴代所長

(長崎医科大学附属東亜風土病研究所)

角	尾	晋	自至	昭和17年 (1942) 昭和20年 (1945)	5月4日 8月22日
古	屋	宏	自至	昭和20年 (1945) 昭和23年 (1948)	12月22日 1月23日
高	瀬	清	自至	昭和23年 (1948) 昭和23年 (1948)	1月24日 8月31日
登	倉	登	自至	昭和23年 (1948) 昭和24年 (1949)	9月1日 5月30日

(長崎大学風土病研究所)

登	倉	登	自至	昭和24年 (1949) 昭和33年 (1958)	5月31日 8月31日
大	森	南三郎	自至	昭和33年 (1958) 昭和38年 (1963)	9月1日 11月30日
福	見	秀雄	自至	昭和38年 (1963) 昭和42年 (1967)	12月1日 5月31日

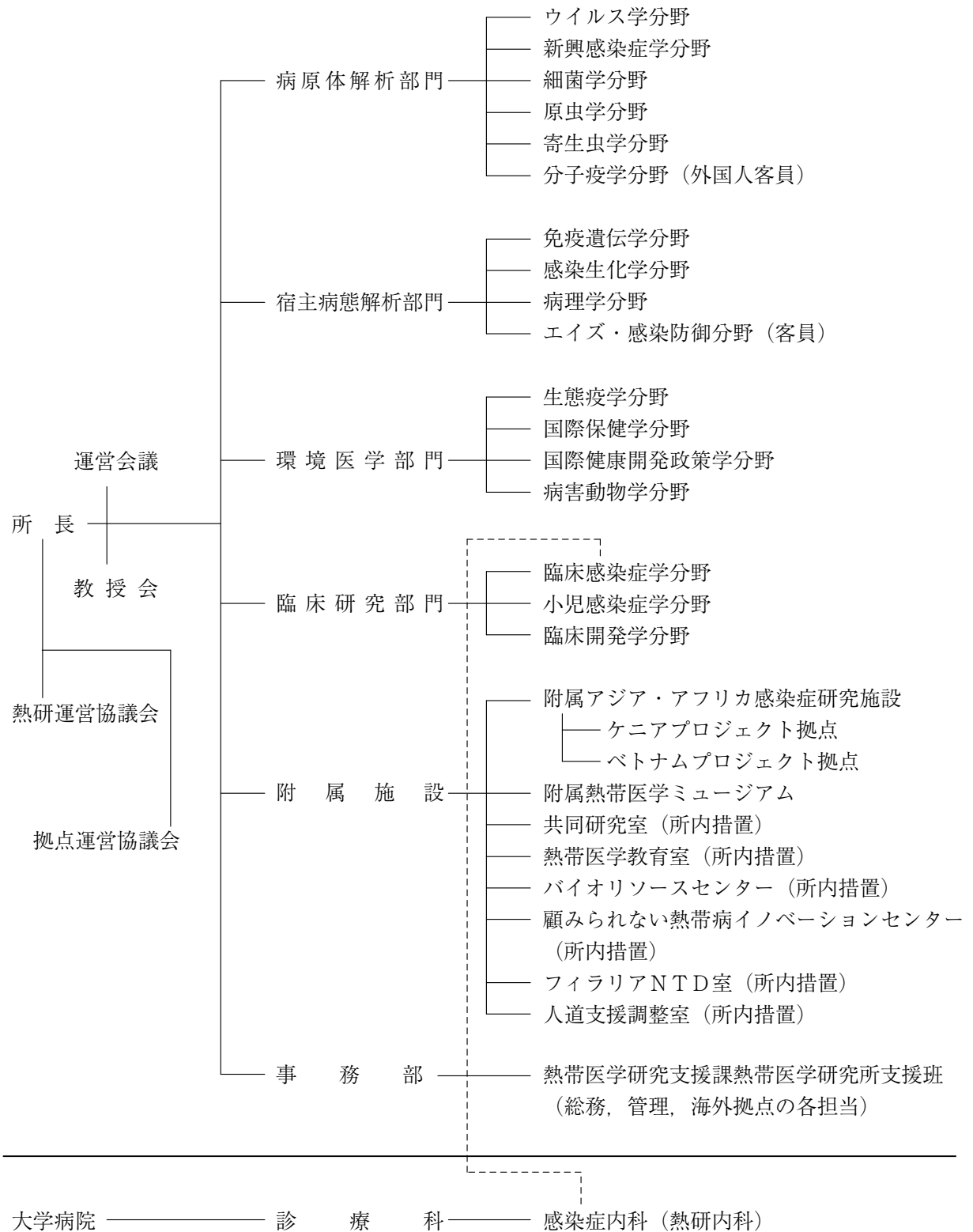
(長崎大学熱帯医学研究所)

福	見	秀雄	自至	昭和42年 (1967) 昭和44年 (1969)	6月1日 11月30日
片	峰	大助	自至	昭和44年 (1969) 昭和48年 (1973)	12月1日 11月30日
林		薫	自至	昭和48年 (1973) 昭和52年 (1977)	12月1日 11月30日
内	藤	達郎	自至	昭和52年 (1977) 昭和54年 (1979)	12月1日 11月30日
片	峰	大助	自至	昭和54年 (1979) 昭和56年 (1981)	12月1日 4月1日
松	本	慶藏	自至	昭和56年 (1981) 平成3年 (1991)	4月2日 4月1日
板	倉	英吉	自至	平成3年 (1991) 平成5年 (1993)	4月2日 4月1日
小	坂	光男	自至	平成5年 (1993) 平成9年 (1997)	4月2日 4月1日
五十嵐		章	自至	平成9年 (1997) 平成13年 (2001)	4月2日 3月31日
青	木	克己	自至	平成13年 (2001) 平成19年 (2007)	4月1日 3月31日
平	山	謙二	自至	平成19年 (2007) 平成23年 (2011)	4月1日 3月31日
竹	内	勤	自至	平成23年 (2011) 平成25年 (2013)	4月1日 3月31日
森	田	公一	自至	平成25年 (2013) 平成29年 (2017)	4月1日 3月31日
平	山	謙二	自至	平成29年 (2017) 現在	4月1日

2 組織及び規模

2.1 組織

平成29年4月1日



2. 2 職 員

平成29年 5 月 1 日

1) 定員内職員

区 分	教 員					その 他 の 職 員	合 計
	教 授	准 教 授	講 師	助 教	計		
現 員	15	6(3)	3	17(19)	41(22)	7(7)	48(29)

※ () は有期雇用職員で外数

2) その他の職員

非常勤講師 3 名 客員教授 21 名 外国人研究員 (客員准教授) 1 名

特任研究員 10 名 研究機関研究員 1 名 研究支援推進員 7 名

事務補佐員及び技能補佐員 33 名

3) 教職員・大学院学生等氏名

平成29年 5 月 1 日現在

所 長	(命)教 授	博 士 (医 学)	平 山 謙 二
副 所 長	(命)教 授	博 士 (医 学)	濱 野 真 二 郎
	(命)教 授	博 士 (医 学)	金 子 修
ウ イ ル ス 学 分 野	教 授	博 士 (医 学)	森 田 公 一
	准 教 授	博 士 (医 学)	モ イ メ ン リ ン
	准 教 授	博 士 (獣 医 学)	井 上 真 吾
	准 教 授 (兼)	博 士 (獣 医 学)	早 坂 大 輔
	助教 (有期雇用)	博 士 (農 学)	鍋 島 武
	助教 (有期雇用)	博 士 (医 学)	ミ ャ ミ ャ ッ ヌ ゲ ャ ト ン
	客 員 教 授		マ チ ル ム ア ウ
	客 員 教 授		ブ エ ラ ノ コ ラ ソ ン セ リ ラ
	客 員 教 授		吾 郷 昌 信
	客 員 教 授		山 城 哲
	客 員 研 究 員		バ ス デ ヴ パ ン デ ィ
	客 員 研 究 員		久 保 亨
	客 員 研 究 員		高 松 由 基
	客 員 研 究 員		内 田 玲 麻
	客 員 研 究 員		吉 川 亮
	技 能 補 佐 員		城 臺 和 美
	事 務 補 佐 員		谷 口 貴 美 子
	大 学 院 生		ア ウ ン キ ョ ウ キ ョ ウ
	大 学 院 生		嶋 田 聡
	大 学 院 生		フ リ ミ ン フ ォ ン
	大 学 院 生		ブ イ ト ウ ト ウ イ

	大 学 院 生		マ ー ク ア ン ソ ニ ー
	大 学 院 生		グ エ ン コ タ ッ ク
	大 学 院 生		安 藤 豪
新 興 感 染 症 学 分 野	教 授	博 士 (理 学)	安 田 二 朗
	助教(有期雇用)	博 士 (薬 学)	黒 崎 陽 平
	助 教	博 士 (薬 学)	浦 田 秀 造
	助教(有期雇用)	博 士 (生 命 科 学)	阿 部 遥
	学振特別研究員	博 士 (人 間 ・ 環 境 学)	吉 川 禄 助
	特 任 研 究 員	博 士 (医 学)	牛 島 由 理
	特 任 研 究 員		岡 田 紗 弥 香
	特 任 研 究 員		木 村 繭 子
	特 任 研 究 員		末 吉 真 季
	事務補佐員		高 野 未 来
	技能補佐員		宮 崎 彩 希
	大 学 院 生		オラミデ コラウオレ オロニニイ
	大 学 院 生		クリステル マウオンガ ペムバ
	大 学 院 生		パトリック イルンガ ムピンガボ
	大 学 院 生		バビッド ラジャバリ ザデ
	大 学 院 生		山 城 良 介
細 菌 学 分 野	講 師	博 士 (理 学)	和 田 昭 裕
	助 教 (T T)	博 士 (医 学)	中 野 政 之
	研究支援推進員		薦 田 善 毅
原 虫 学 分 野	教 授	博 士 (医 学)	金 子 修
	講 師	博 士 (薬 学)	上 村 春 樹
	助 教	博 士 (薬 学)	矢 幡 一 英
	助教(有期雇用)	博 士 (獣 医 学)	麻 田 正 仁
	特 任 研 究 員		竹 田 美 香
	研究機関研究員		アムザ ビヤルハンガ ラッキ
	外国人客員研究員(学振)		ハ キ ミ ハ ッ サ ン
	研究支援推進員		田 中 玲 子
	技能補佐員		木 下 美 紀
	技能補佐員		高 濱 幸 絵
	大 学 院 生		外 川 裕 人
	大 学 院 生		クワメ クミ アサレ
	大 学 院 生		ベン イエディ アベル チタマ
	大 学 院 生		石 崎 隆 弘
寄 生 虫 学 分 野	教 授	博 士 (医 学)	濱 野 真 二 郎

助 教	博 士 (薬 学)	三 井 義 則
助教(有期雇用)	博 士 (医 学)	中 村 梨 沙
技術職員(有期雇用)		濱 崎 め ぐ み
研究支援推進員		小 田 裕 美
技 能 補 佐 員		原 史 絵
技 能 補 佐 員		川 端 泰 子
技 能 補 佐 員		久 田 千 晃
大 学 院 生		神 戸 俊 平
大 学 院 生		延 末 謙 一
大 学 院 生		森 保 妙 子
大 学 院 生		シャルミナ デロアール
大 学 院 生		エバンス アセナ チャデカ
大 学 院 生		モハマド アブ ムサ
大 学 院 生		カンジャダ シャンネワジ マンナン
大 学 院 生		長 谷 川 光 子
大 学 院 生		ムケンディ カソワ ジーン ピエレ
大 学 院 生		田 中 美 緒
大 学 院 生		タラーム ケイス キブランガット
分 子 疫 学 分 野	客 員 准 教 授	チ ョ ン ヨ ン セ ン
免 疫 遺 伝 学 分 野	教 授	平 山 謙 二
准教授(有期雇用)	博 士 (医 学)	グエン フイ ティエン
助 教 (T T)	博 士 (医 学)	マハムド サマ シェリフ
助教(有期雇用)	博 士 (医 学)	ドウムレ シヤム プラカシ
特 任 研 究 員		檜 原 知 里
技 能 補 佐 員		福 田 路 子
事 務 補 佐 員		細 井 陽 子
客 員 研 究 員		片 上 幸 美
大 学 院 生		ヴァスケス ヴェラケスクアラレインドラ
大 学 院 生		ダ オ フ イ マ ン
大 学 院 生		ファルハナ モサデック
大 学 院 生		マテンゲ ピターソン ギトンガ
大 学 院 生		明 石 麻 衣 子
大 学 院 生		井 ノ 口 美 穂
大 学 院 生		望 月 恒 太
大 学 院 生		テクレミカエル アウト アレム
大 学 院 生		ペンビ エマニュエル
大 学 院 生		田 山 雄 基
病 理 学 分 野	准 教 授	P h D カレトン リチャード レイトン

	助 教	博 士 (医 学)	千 馬 正 敬
	研究支援推進員	博 士 (理 学)	外 間 沙 里 奈
生 態 疫 学 分 野	教 授	博 士 (医 学)	金 子 聰
	准 教 授	博 士 (医 学)	藤 井 仁 人
	助 教	博 士 (薬 学)	加 藤 健 太 郎
	客 員 教 授	博 士 (医 学)	川 原 尚 行
	特 任 研 究 員		ヨンボ ダン ジャスティン カレンダ
	特 任 研 究 員		尾 崎 里 恵
	特 任 研 究 員	博 士 (医 学)	星 友 矩
	特 任 研 究 員		ダニエル トシオ ハーレル
	客 員 研 究 員	博 士 (医 学)	駒 形 朋 子
	客 員 研 究 員	博 士 (医 学)	サムソン ムウオ ンゾウ
	協 力 研 究 員		小 川 一 弥
	協 力 研 究 員		新 杉 知 沙
	協 力 研 究 員 (J S P S)		ジョブ アイザック ワソング
	技 能 補 佐 員		中 山 栄 美
	技 能 補 佐 員		下 田 邦 子
	技 能 補 佐 員		近 俊 志 穂
	技 能 補 佐 員		三 浦 光 政
	大 学 院 生		田 中 準 一
	大 学 院 生		内 田 真 美
国 際 保 健 学 分 野	教 授	博 士 (保 健 学)	山 本 太 郎
	准 教 授	博 士 (医 学)	和 田 崇 之
	助教(有期雇用)	博 士 (学 術)	市 川 智 生
	助 教 (T T) 兼 任	博 士 (医 学)	中 野 政 之
	客 員 教 授		菅 波 茂
	客 員 教 授		クエイチエン ジェン
	客 員 教 授		石 井 正 三
	客 員 教 授		清 田 明 宏
	客 員 研 究 員		伊 東 啓 人
	客 員 研 究 員		角 泰 亮
	客 員 研 究 員		秦 国 喜
	客 員 研 究 員		蔡 高 橋 宗 康
	客 員 研 究 員		高 前 田 香 義 代
	事 務 補 佐 員		高 山 志 緒
	大 学 院 生		吉 田 浩 美
	大 学 院 生		

	大 学 院 生		ン ゴ ク オ ン チ
	大 学 院 生		藤 井 宏
	大 学 院 生		加 藤 隼 悟
	大 学 院 生		伊 藤 博 之
	大 学 院 生		林 健 太 郎
	大 学 院 生		山 藤 栄 一 郎
	大 学 院 生		平 岡 知 子
	大 学 院 生		安 田 一 行
小 児 感 染 症 学 分 野	教 授	博 士 (医 学)	橋 爪 真 弘
	教 授	博 士 (医 学)	吉 田 レ イ ミ ン ト
	助教(有期雇用)		ウ ン ク リ ス フ ッ ク シ ェ ン
	助教(有期雇用)		キ ム ユ ニ
	助教(有期雇用)		樋 泉 道 子
	助教(有期雇用)		北 村 則 子
	助教(有期雇用)		竹 形 み ず き
	助教(有期雇用)		岩 崎 千 尋
	助教(有期雇用)		レ ニ ャ ッ ト ミ ン
	事 務 補 佐 員		岡 希 望
	事 務 補 佐 員		吉 田 薫
	事 務 補 佐 員		神 廣 佳 代 子
	研究支援推進員		平 倉 説 子
	大 学 院 生		吉 原 圭 亮
	大 学 院 生		池 田 恵 理 子
	大 学 院 生		松 下 直 彦
	大 学 院 生		田 中 沙 紀
	大 学 院 生		藤 岡 充 史
臨 床 開 発 学 分 野	教 授	P h D	ローサポーシ チャントラ
	准教授(有期雇用)	博 士 (学 術)	グエン フィ ティエン
	助教(有期雇用)	博 士 (医 学)	水 上 修 作
	客 員 教 授		ナーバンチャン ケセラ
	客 員 研 究 員		トゥンラヤコン プレンスリヤガン
	技 能 補 佐 員		ディラーニー さゆり
ア ジ ア ・ ア フ リ カ 感 染 症 研 究 施 設 (ケ ニ ア 拠 点)	大 学 院 生		サエヘン ティラチャツ
	教 授	博 士 (医 学)	一 瀬 休 生
	助 教	博 士 (医 学 , 薬 学)	Mohammad Shah
	助 教	P h D	竹 内 理 恵
	事 務 職 員		風 間 春 樹
	事 務 職 員		齊 藤 幸 枝

	事務職員		八木志津子
	事務職員		森 かおり
アジア・アフリカ 感染症研究施設 (ベトナム拠点)	拠点リーダー代理(命) 教授(兼)	博士(医学)	長谷部 太
	助 教	博士(学術)	角 田 隆
	助 教	博士(人間・環境学)	竹 村 太地郎
	事務職員		齋 藤 圭
	技能補佐員(熱研内)		中 野 真由美
	秘 書		ブイ・ティ・チャ
	研究アシスタント		ドアン・ティ・ハン
	研究アシスタント		レ・ティ・キムアイン
	研究アシスタント		グエン・ティ・ハン
	研究アシスタント		ファン・ホン・クイン・アイン
	研究アシスタント		ファン・ハ・チョウ
熱帯医学ミュージアム	館 長	博士(理学)	皆川 昇(4～7月)
	教 授	博士(保健学)	奥村順子(8月～)
	戦略職員	博士(保健学)	奥 村 順 子
	技術職員		橋 口 昌 平
	技能補佐員		荒 木 一 生
	技能補佐員		須 田 清 美
	技能補佐員		谷 山 沙 也 加
共同研究室	室長(命)教授	博士(医学)	金 子 修
	講 師	博士(医学)	菊 池 三穂子
	助 教	博士(理学)	坂 口 美 亜 子
	研究支援推進員		増 本 雅 恵
バイオリソースセンター	室 長	博士(医学)	金 子 修
	事業協力	博士(医学)	濱 野 真二郎
	事業協力	博士(薬学)	北 潔
	事業協力	P h D	カレトン リチャード レイトン
NTDイノベーションセンター	センター長(兼)	博士(医学)	金 子 聡
フィラリアNTD室	室 長	P h D	一 盛 和 世
	教 授(兼)	博士(医学)	濱 野 真二郎
	事務補佐員		馬 場 由 妃 子
人道支援調整室	室 長	博士(保健学) 博士(医学)	山 本 太 郎

診	療	科	科長(命)教授	博 士 (医 学)	有	吉	紅	也
(熱 研 内 科)			副科長(命)准教授	博 士 (医 学)	森	本	浩 之	輔
			講 師	博 士 (医 学)	田	中	健	之
			助 教 (T T)	博 士 (医 学)	山	下	嘉	郎
			助 教	博 士 (医 学)	高	木	理	博
			助 教		高	橋	健	介
			非常勤講師		古	本	朗	嗣
			医 員		泉	田	真	生
			医 員		大	澤	令	奈
			医 員		北 庄	司	絵	美
			医 員		柿	内	聡	志
			医 員		松	井	昂	介
			医 員		佐	野	正	浩
			医 員		安	田	一	行
			修 練 医		津	山	頌	章
			修 練 医		島	守	佳	子
			修 練 医		池	田	恵	子
			事務補助員		松	尾	亜 矢	子

2. 3 経 費

年度別決算額：交付金・自己収入（平成21年～平成29年度）

年度	区分	人 件 費	物 件 費	合 計
平成21年		605,260,738 円	271,544,815 円	876,805,553 円
平成22年		532,702,260	471,523,873	1,004,226,133
平成23年		607,943,166	483,626,501	1,091,569,667
平成24年		598,138,424	420,465,416	1,018,603,840
平成25年		489,567,605	476,723,671	966,291,276
平成26年		561,606,263	443,315,439	1,004,921,702
平成27年		564,158,673	373,766,173	937,924,846
平成28年		520,784,939	413,299,044	934,083,983
平成29年		568,805,600	262,438,491	831,244,091

年度別決算額：外部資金等（平成21年～平成29年度）

年度	区分	人 件 費	物 件 費	合 計
平成21年		326,227,542 円	746,606,269 円	1,072,833,811 円
平成22年		296,164,175	850,841,443	1,147,005,618
平成23年		156,919,028	925,992,376	1,082,911,404
平成24年		208,595,480	608,765,460	817,360,940
平成25年		131,139,405	479,535,519	610,674,924
平成26年		169,608,636	439,383,221	608,991,857
平成27年		169,110,494	720,810,061	889,920,555
平成28年		243,201,650	866,201,245	1,100,402,895
平成29年		246,057,372	805,599,761	1,051,657,133

2. 4 敷地と建物

所在地 長崎市坂本1丁目12-4

敷地 長崎大学医学部構内（坂本1団地 92,176㎡）

建物延面積

平成30年5月現在

建 物 名 称	構 造	建面積(㎡)	延面積(㎡)	備 考
本 館	鉄筋コンクリート 3階，一部4階建	1,881	6,456	昭和36. 3 建築 昭和42. 2 増築 昭和55. 3 増築 昭和60. 8 増築 平成6. 3 増築 平成18. 3 改修
熱帯性病原体 集中研究管理棟	鉄筋コンクリート 4階建	352	1,469	平成15. 3 建築
薬 品 庫	ブ ロ ッ ク 建	20	20	昭和47. 3 建築
教育研究棟	プレハブハウス	94	156	平成23. 5 建築 平成25. 8 移築
計		2,347	8,101	

3 熱帯医学研究拠点共同研究

3. 1 一般共同研究 (◎は研究代表者)

1. 小児渗出性中耳炎の罹患率に与える肺炎球菌ワクチンの効果

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科耳鼻咽喉頭頸部外科学分野・准教授

◎金子 賢一

長崎大学医学部医学科医学部研究高度化支援室・助教 原 稔

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科耳鼻咽喉頭頸部外科学分野・大学院生

佐藤 智生

長崎大学熱帯医学研究所小児感染症学分野・教授 吉田 レイミント

長崎大学熱帯医学研究所小児感染症学分野・助教 樋泉 道子

長崎大学熱帯医学研究所寄生虫学分野・技能補佐員 原 史絵

長崎県立大学国際社会学部国際社会学科・非常勤講師 金子 亜衣子

2. アルテミシニン耐性熱帯熱マラリア原虫の検出とその伝播に関する研究

藤田保健衛生大学医学部ウイルス寄生虫学・准教授 ◎前野 芳正

愛知医科大学医学部感染免疫学・講師 高木 秀和

ベトナム NIMPE 分子生物学部門・部長 Nguyen Thi Huong Binh

ベトナム NIMPE 昆虫学部門・部長 Vu Duc CHINH

順天堂大学国際教養学部・特任研究員 益田 岳

長崎大学熱帯医学研究所病理学分野・准教授 Culleton Richard Leighton

3. 臨床試験に向けての新規マラリアワクチン BDES-NPV の製造プロセスと品質管理に関する研究

金沢大学医薬保健研究域薬学系ワクチン免疫科学研究室・准教授

◎伊従 光洋

金沢大学医薬保健研究域薬学系ワクチン免疫科学研究室・教授

吉田 栄人

金沢大学大学院医歯薬保健学総合研究科医科学専攻・大学院生

吉田 邦嵩

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科創薬科学専攻・大学院生

Fitri Ameria

長崎大学熱帯医学研究所共同研究室・助教

坂口 美亜子

4. インドを旅行する日本人旅行者における疾患発生要因に関する研究

岡山大学大学院環境生命科学研究科・教授

◎津田 敏秀

岡山大学地域総合研究センター・助教

山川 路代

岡山大学大学院環境生命科学研究科・助教

時信 亜希子

岡山大学大学院環境生命科学研究科・大学院生

佐才 めぐみ

長崎大学熱帯医学研究所小児感染症学分野・教授

橋爪 真弘

長崎大学熱帯医学研究所小児感染症学分野・大学院生

松下 直彦

5. ベトナムにおける不明熱性疾患病因同定に関する研究

東京大学大学院農学生命科学研究科・准教授

◎三浦 こずえ

ベトナム衛生疫学研究所ウイルス部・室長

Nguyen Le Khanh Hang

長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点・教授

長谷部 太

長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点・助教

竹村 太地郎

6. 北海道の野生動物におけるマダニ媒介性ウイルスの血清・分子疫学調査

酪農学園大学獣医学群獣医学類人獣共通感染症学ユニット・講師

◎内田 玲麻

長崎大学熱帯医学研究所ウイルス学分野・助教

Mya Myat Ngwe Tun

長崎大学熱帯医学研究所ウイルス学分野・教授

森田 公一

7. ベトナムにおける眼感染症の病因

(肺炎球菌コンジュゲートワクチン (PCV) 導入前の評価)

長崎大学病院眼科・講師

上松 聖典

長崎大学病院眼科・助教

Mohamed Yasser Helmy

長崎大学病院眼科・医員

植木 亮太郎

長崎大学病院眼科・医員

井上 大輔

長崎大学熱帯医学研究所小児感染症学分野・教授

吉田 レイミント

長崎大学熱帯医学研究所小児感染症学分野・助教

樋泉 道子

8. FRET プローブを活用した抗ラッサウイルス薬の創出

京都大学ウイルス再生医科学研究所・助教	◎水谷 龍明
北海道大学大学院医学研究院・教授	大場 雄介
長崎大学熱帯医学研究所新興感染症学分野・助教	浦田 秀造

9. うなづき症候群患者を対象とした地域見まもりケアの検討

総合地球環境学研究所研究部・上級研究員	◎西 真如
大阪産業大学人間環境学部・准教授	佐藤 靖明
長崎大学多文化社会学部・准教授	波佐間 逸博
京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・特任助教	坂井 紀公子
上智大学総合人間科学部・准教授	武井 弥生
長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・講師	菊池 三穂子
長崎大学熱帯医学研究所寄生虫学分野・教授	濱野 真二郎

10. メタ個体群動態に基づいたネットワーク上の感染症流行の定量的解析

九州大学大学院理学研究院生物科学部門・准教授	◎岩見 真吾
首都大学東京理工学研究科・日本学術振興会特別研究員 PD	
	山口 諒
九州大学大学院システム生命科学府・博士前期課程	布野 孝明
静岡大学大学院総合科学技術研究科工学専攻・教授	守田 智
東京工業大学科学技術創成研究院・特任助教	Marko Jusup
東北大学大学院環境科学研究科・教授	中谷 友樹
長崎大学熱帯医学研究所病害動物学分野・教授	皆川 昇

11. 原生生物カプサスポラによる Schistosoma の中間宿主への寄生抑制

県立広島大学生命環境学部・准教授	◎菅 裕
長崎大学熱帯医学研究所生態疫学分野・助教	加藤 健太郎

12. 赤痢アメーバ“シスト形成”の制御機構の解明

佐賀大学医学部分子生命科学講座免疫学分野・助教	見市(三田村)文香
佐賀大学医学部分子生命科学講座免疫学分野・教授	吉田 裕樹
長崎大学熱帯医学研究所寄生虫学分野・助教	中村 梨沙
長崎大学熱帯医学研究所寄生虫学分野・教授	濱野 真二郎

13. タイ・ランパンエイズコホートにおける日和見感染症と MBL 遺伝子多型の検証

群馬大学医学部附属病院血液内科・助教	◎柳澤 邦雄
群馬大学医学部附属病院血液内科・診療教授	半田 寛
群馬大学大学院医学系研究科生体統御内科学・助教	小川 孔幸
東北大学東北メディカルメガバンク機構・助教	土屋 菜歩
タイ保健省生命医科学研究所・Medical Technologist	Nuanjun Wichukuchinda
タイ保健省生命医科学研究所・Medical Physician	Archawin Rojanawiwat
タイ国ランパン病院・Dr. of Day Care Center	Panita Pathipvanich
タイ保健省・Medical Physician	Pathom Sawanpanyalert
佐賀県医療センター好生館ライフサイエンス研究所・部長	安波 道郎
長崎大学熱帯医学研究所臨床感染症学分野・教授	有吉 紅也

14. ベトナム自然環境に由来する薬剤耐性コレラ菌のゲノム特性

京都大学大学院医学研究科・准教授	◎丸山 史人
獨協医科大学・助教	野中 里佐
長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点・助教	竹村 太地郎

15. Entamoeba nuttalli における表面レクチンサブユニット (Igl) の解析

東海大学医学部医学科基礎医学系・教授	◎橘 裕司
東海大学医学部医学科基礎医学系・助教	牧内 貴志
長崎大学熱帯医学研究所生態疫学分野・助教	加藤 健太郎

16. 生薬由来新規抗マラリア薬の探索

富山大学和漢医薬学総合研究所資源開発部門生薬資源科学分野・教授	◎小松 かつ子
富山大学和漢医薬学総合研究所資源開発部門生薬資源科学分野・准教授	當銘 一文
富山大学和漢医薬学総合研究所資源開発部門生薬資源科学分野・研究員	葛 躍偉
富山大学和漢医薬学総合研究所資源開発部門生薬資源科学分野・助教	朱 姝
長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・教授	平山 謙二

長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・助教	水上 修作
長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・准教授	Nguyen Tien Huy
長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・助教	Cherif Mahamoud Sama

17. 漢方方剤・和漢薬由来新規抗トリパノソーマ薬の探索

富山大学和漢医薬学総合研究所資源開発部門生薬資源科学分野・准教授	◎當銘 一文
富山大学和漢医薬学総合研究所資源開発部門生薬資源科学分野・教授	小松 かつ子
富山大学和漢医薬学総合研究所資源開発部門生薬資源科学分野・助教	朱 姝
長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・助教	水上 修作
長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・教授	平山 謙二
長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・准教授	Nguyen Tien Huy
長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・助教	Cherif Mahamoud Sama
長崎大学熱帯医学研究所免疫遺伝学分野・大学院生	田山 雄基

18. ケニアにおけるロタウイルスゲノム多様性の解析

藤田保健衛生大学医学部ウイルス寄生虫学講座・講師	◎河本 聡志
藤田保健衛生大学医学部ウイルス寄生虫学講座・教授	谷口 孝喜
藤田保健衛生大学医学部ウイルス寄生虫学講座・准教授	前野 芳正
藤田保健衛生大学共同利用研究施設・助教	井手 富彦
長崎大学・熱帯医学研究所ケニア拠点・教授	一瀬 休生

19. ジカウイルス感染関連ギラン・バレー症候群の発症メカニズム

会津大学短期大学部食物栄養学科・教授	◎左 一八
長崎大学熱帯医学研究所ウイルス学分野・教授	森田 公一

20. 都市化がもたらす高地集団の新たな健康リスク因子の評価

長崎大学医歯薬学総合研究科公衆衛生学分野・助教	◎西村 貴孝
長崎大学医歯薬学総合研究科公衆衛生学分野・教授	青柳 潔
長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野・助教	市川 智生

21. ケニアにおける結核感染新規モニタリング技術の実用性評価研究

長浜バイオ大学バイオサイエンス学部・教授	◎長谷川 慎
長崎大学熱帯医学研究所ケニア拠点・教授	一瀬 休生
長崎大学熱帯医学研究所細菌学分野・講師	和田 昭裕

22. ワンヘルス・アプローチに基づくベトナムにおける薬剤耐性菌の解析

国立感染症研究所薬剤耐性研究センター・主任研究官	◎鈴木 仁人
国立感染症研究所細菌第二部・部長	柴山 恵吾
国立感染症研究所薬剤耐性研究センター・主任研究官	矢原 耕史
Hospital103, Military Medical University, Vietnam・Associate Professor, Head of Microbiology Department	Nguyen Thai Son
長崎大学熱帯医学研究所ベトナム拠点・助教	竹村 太地郎

23. マラリア原虫肝内休眠体を標的としたin vitro 実験系の確立と分子メカニズムの解明

国立感染症研究所寄生動物部・主任研究官	◎案浦 健
獨協医科大学熱帯病寄生虫病講座・教授	川合 覚
長崎大学熱帯医学研究所原虫学分野・教授	金子 修
長崎大学熱帯医学研究所原虫学分野・助教	矢幡 一英

24. Linkage Group Selection法の培養熱帯熱マラリア原虫への適用

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター国際協力教育部門・助教	Axel Martinelli
長崎大学熱帯医学研究所病理学分野・准教授	Culleton Richard Leighton

25. マーモセットモデル動物を用いたデング熱の感染防御のメカニズム解明に関する研究

国立感染症研究所ウイルス第一部・部長	◎西條 政幸
国立感染症研究所ウイルス第一部・協力研究員	Nor Azila Muhammad Azami
長崎大学熱帯医学研究所ウイルス学分野・准教授	Moi Meng Ling

26. 内臓リーシュマニア症制圧後の再燃監視機構の構築

愛知医科大学医学部医学科感染免疫学講座・客員教授	◎伊藤 誠
愛知医科大学医学部医学科感染免疫学講座・講師	高木 秀和
Icddr,b Bangladesh・Scientist	Dinesh Mondal
長崎大学熱帯医学研究所寄生虫学分野・教授	濱野 真二郎

27. アフリカ睡眠病を起こすトリパノソーマ原虫の Tb14-3-3 -

ヒートショック蛋白のシグナル系を標的にした抗原虫薬スクリーニングの基礎研究

久留米大学医学部感染医学講座真核微生物学部門・教授	◎井上 雅広
久留米大学医学部感染医学講座真核微生物学部門・研究補助員	
	安田 幸一
長崎大学熱帯医学研究所原虫学分野・講師	上村 春樹

3. 2 研究集会

1. All Japan Mosquito Symposium

開催日：平成29年 6 月10日(土)

場 所：東京都内 日本科学未来館，国立科学博物館など

代表者：一盛 和世（James Cook University，長崎大学・客員教授）

参加者：13名

内 容：日本の蚊媒介感染症研究ネットワーク（「All Japan Mosquito network」）の構築を目的とし産官民学から参加。

まずは次の2点を目的とし「All Japan ぶ〜ん蚊祭 - もっと知ろう蚊の世界-」を開催することで今後のネットワーク構築へとつなげていくことを検討した。

目 的：① PPPを超えたステークホルダー（熱帯医学・昆虫学分野の研究者，民俗学，歴史学，作家，アート，企業）のネットワーキングの場の提供。

② 啓蒙および教育活動として，蚊の認知向上，一般向けの啓蒙活動，蚊に対する捉え方の違いを超えて蚊を generalなものにする。

さらに，「All Japan Mosquito network」構築に向けて，以下の構想を共有した。

・このネットワークは蚊に関する各分野を超えた情報交換の場とする。具体的なアクションを進める組織ではない。

・各自がすでに有するネットワークや上記「ぶ〜ん蚊祭」から派生したネット

- ワークをつなげ、蚊に関わる緩やかな All Japan 一大ネットワークを構築する。
- ・ネットワークの対象は国内・海外を問わない。海外にも発信して All Japan のネットワークを世界のネットワークにつなげる。
 - ・組織体制を整えてアクセスしやすいコアをつくりネットワークの構築，継続を目指す。

2. 医学研究のための倫理に関する国際セミナー

開催日：平成29年 5 月22日(月)～平成29年 5 月24日(水)

場 所：長崎大学グローバルヘルス総合研究棟（坂本キャンパス）

代表者：長崎大学・病院・薬剤部・教授 佐々木 均

参加者：43名

内 容：本集会は、「医学研究のための倫理に関する国際研修コース」との共催として、長崎大学グローバルヘルス総合研究棟にて平成29年 5 月22日～5 月24日の3日間、講師 9 名（うち外国から 3 名，国内から 6 名）と参加者34名（うち外国から21名，国内から13名）を集め開催された。FERCAP-Philippines（フィリピン国）の Cristina Torres, Mahidol University,Thailand（タイ国）の Jarupim Soongswang, Khon Kaen University（タイ国）の Kwanchanok Yimtae のほか，日本国内の倫理関係の研究者を多数講師として招聘し，質の高い研修コースを運営することができた。取り上げた内容としては，倫理委員会の構成，役割，機能，インフォームド・コンセント（同意書），利益不利益の評価，誘導，発展途上国での倫理問題である。参加者は今日の医学研究倫理に関して何がコンセンサスで，何が論議の的なのかについて理解し，その対処の仕方について討論した。

3. 3 海外拠点連携共同研究

1. アフリカで発生している真菌症・放線菌症の原因菌の収集と形態学的，生理学的，分子生物学的解析

千葉大学真菌医学研究センター・センター長	◎笹川 千尋
千葉大学真菌医学研究センター・准教授	矢口 貴志
千葉大学真菌医学研究センター・教授	亀井 克彦
千葉大学真菌医学研究センター・准教授	渡邊 哲
千葉大学真菌医学研究センター・准教授	高橋 弘喜
千葉大学真菌医学研究センター・非常勤講師	五ノ井 透
長崎大学熱帯医学研究所ケニア拠点・教授	一瀬 休生

2. ハノイコホートを用いた HIV-1 subtype A/E ウイルス感染症の疫学およびワクチン開発と治療のための基盤研究

熊本大学エイズ学研究センター・教授	◎滝口 雅文
熊本大学生命科学研究部・准教授	前田 洋助
熊本大学エイズ学研究センター・助教	阪井 恵子
熊本大学エイズ学研究センター・特任講師	村越 勇人
長崎大学熱帯医学研究所・ベトナム拠点・教授	長谷部 太

4 研究活動

4. 1 ウイルス学分野

1. 熱帯ウイルス病の疫学研究

1) 日本脳炎ウイルスの分子疫学解析

日本脳炎ウイルスの生態をより詳細に明らかにするため、前年度に引き続き日本において蚊からのウイルス分離を行い、分子疫学解析を実施した。その結果、日本に飛来しているウイルスは遺伝子型 I 型の A 群ウイルスのみであり平成29年度もこの状況が続いている。近年、中国や韓国では V 型の流行が確認されており、日本への侵入も予想されるため、来年度も本研究を継続する。

2) デングウイルス、ジカウイルス、チクングニアウイルスの分子疫学、血清疫学解析

前年度に引き続き、アジア各国でウイルスを分離して分子疫学解析を実施した。デングウイルスについては、ベトナム、フィリピン、ミャンマーの患者血清から分離して遺伝子解析を実施した。また、ベトナムではジカウイルス感染によると示唆される小頭症の発生に対応して WHO およびベトナム国立衛生疫学研究所 (NIHE) と協力し、ベトナム中央高地 Dak Lak 省地域における発生地域一帯のウイルス学的および血清学的調査を実施し、その浸潤状況を明らかにした。ミャンマーにおいても血清疫学的にジカウイルス感染症が存在することを示した。ネパールにおけるチクングニアウイルスの活動状況を平成26年から平成27年にかけての不明熱患者血清を用いて血清学的疫学解析で明らかにした。ケニアにおいても引き続きデングウイルス、チクングニアウイルス、黄熱ウイルス、リフトバレー熱ウイルスの活動状況についての血清疫学調査を実施している。

3) 重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) ウイルスの調査

平成29年度も長崎を中心に、ヒト、野生動物、ペット、マダニの調査を継続し、患者および患畜の検体から I 型インターフェロンレセプターノックアウトマウスを用いて SFTS ウイルスが分離されている。血清学的調査も実施しており、ヒトだけでなく野生動物 (イノシシ)、ネコおよびイヌからも抗体陽性例が確認された。地域の感染リスクを明らかにするため現在も調査を継続している。

4) 携帯電話網を活用した感染症サーベイランスシステムの開発 (SATREPS 事業)

JICA と AMED が共同して実施する国際研究事業である地球規模課題対応国際科学技術協力事業 (SATREPS) 「ケニアにおける黄熱病およびリフトバレー熱に対する迅速診断法の開発とそのアウトブレイク警戒システムの構築」は平成29年 1 月に完了した。この事業は熱帯医学研究所とケニア国立中央医学研究所とが共同して黄熱病とリフトバ

レー熱のイムノクロマト法を用いたPoint of Care (POC) Testや携帯電話網を用いた早期警戒システムの構築のための研究開発を行いmSOSと命名してその有用性をフィールド試験により確認し、今年度その評価結果を論文にて発表した。

Ⅱ. ウイルス病原性の解析

1) デングウイルス患者における発症メカニズムの解明

デングウイルスの病原性を明らかにするため、アジアで流行しているウイルスの特性およびその多様性について解析を進めた。ウイルス遺伝子解析から非構造タンパクNS4Bのアミノ酸変異によりヒト細胞に対する病原性が増強することを見出した。

また、デング熱の防御メカニズムおよび中和抗体活性のレベルを明らかにするため、Fc γ R発現細胞を用いた中和試験の研究を進めた。Fc γ R発現細胞を用いた新規中和アッセイを確立し、デング熱を発症した患者ではFc γ Rの存在下で中和能がないまたは低いことが明らかとなり、感染増強能は中和能を低下させることを見出した。

Ⅲ. ワクチン、抗ウイルス薬の開発

1) デングウイルス治療薬の開発

デングウイルスや日本脳炎ウイルスの治療薬開発を目指して、ウイルス粒子表面の細胞接着に関与する糖鎖構造類似物質による感染防御の研究を中部大学鈴木博士と会津大学短期大学部の左博士らと共同で開発している。さらに平成28年度からは北里研究所との共同で糸状菌、放線菌の産物から抗デングウイルス活性をしめす複数の抗ウイルス薬候補物質を確認し、同定作業を進めている。

2) デングウイルスワクチン評価のためのモデル構築

デング熱ワクチンの評価には適切なモデル動物が不可欠と考えられている。国立感染症研究所など国内、国外の研究協力者とともに開発を行っている。デング熱の霊長類マーマセツモデルを確立し、感染による誘導された免疫はヒトと似ていることから、ワクチンの有効性評価モデルとして有用であることを証明した。また、本モデルにより中和抗体活性はゲノタイプに対するレベルが異なることを明らかにした。さらにこのシステムを用いて、米国のベンチャー企業との共同で進めているデングVLPワクチンの評価も実施した。

Ⅳ. WHO 研究協力センターとしての活動

アジアの開発途上国からフラビウイルスの診断に関する研修生を受け入れた。又、WHOの新興感染症の対策会議へ専門家を派遣した。

4. 2 新興感染症学分野

当分野では、エボラウイルス、マールブルグウイルス、南米出血熱ウイルスなどアフリカや南米でアウトブレイクを繰り返す出血熱ウイルスや西アフリカで常在化しているラッサウイルス、世界的な流行を引き起こすインフルエンザウイルス、そして最近我が国でも発症者が報告されて問題となっているSFTS（重症熱性血小板減少症候群）ウイルスなど重篤な疾患を引き起こす高病原性ウイルスに注目し、これらのウイルスに対する抗ウイルス戦略の確立に資する研究を進めている。

1. ウイルス感染症の迅速検査法の開発

(1) エボラウイルスの迅速検出法の開発

2013-2016年の西アフリカにおけるエボラウイルス病のアウトブレイクの際に開発し、2015年に日本政府から緊急無償支援としてギニア共和国にも供与されたザイールエボラウイルスの迅速検出システムに加えて、ザイール以外の4種のエボラウイルス（スーダン、タイフォレスト、ブンディブギョ、レストン）についても、それぞれのウイルスを迅速・高感度に検出することができるRT-LAMP法を開発した（Oloniniyi et al., J Virol Meth, 2017）。

(2) ジカウイルスの迅速検出法の開発

2015-16年にブラジルを中心に中南米で大流行したジカウイルス感染症の迅速検査法を開発した。本検査法はRT-LAMP法を検出原理としており、これまで分離されているアジア型、アフリカ型双方のウイルス株を検出することができる。ブラジル連邦共和国ペルナンブコ連邦大学ケイゾウ・アサミ免疫病理学研究所（LIKA）において、臨床検体を用いた評価試験も行い、迅速検査法としての有効性を確認した（Kurosaki et al., Sci Rep, 2017）。

2. ウイルス増殖の分子メカニズムの解明

(1) エボラウイルスVP40タンパク質の機能解析

エボラウイルスの主要マトリクスタンパク質であるVP40はウイルス粒子形成やウイルス遺伝子の転写・複製調節など複数の機能を有することが知られている。我々は以前にVP40に存在するPPxY配列が宿主因子Nedd4と相互作用することによりウイルス出芽に重要な役割を果たすことを明らかにしているが、新たにVP40の機能に重要なモチーフ配列としてYIGL配列を同定した。この配列はVP40の機能のうちウイルス粒子産生の正の制御およびウイルス遺伝子の転写・複製の負の制御に重要であることがわかった

(Urata et al., 論文投稿中)。

(2) SFTS ウイルスの増殖機構の解析

宿主細胞における SFTS ウイルスの増殖に宿主のプロテアーゼである S1P が関わっており、S1P によって制御されるコレステロール・脂肪酸・トリグリセリド合成系が SFTS ウイルス増殖に重要であることを明らかにした。この結果は、S1P あるいは上記の合成系を制御することにより SFTSV 増殖を抑え、SFTS 治療に応用できる可能性を示唆した (Urata et al., 論文投稿中)。

3. ウイルス感染病態に関する研究

SFTS ウイルスはヒトでは重篤な症状を引き起こすが、マウスでは一過性に増殖するものの顕著な病態は示さない。一方、I 型インターフェロンレセプター遺伝子を欠損したマウス (IFNAR-KO マウス) は SFTS ウイルス感染に対して致死性の症状を呈する。IFN の下流のシグナルについてさらに詳細な解析を進めるために、STAT1, STAT2 の遺伝子欠損マウス (STAT1-KO, STAT2-KO マウス) でも感染実験を行った結果、STAT2-KO マウスは IFNAR-KO マウスと同様に SFTS ウイルス感染に対して致死的な症状を呈することがわかった。現在、更に詳細な解析を進めている。

4. 抗ウイルス薬の開発

ラッサウイルスやエボラウイルスに対する抗ウイルス剤の候補となり得る化合物の探索を進めており、スーパーコンピュータを用いた *in silico* スクリーニングや独自に開発したハイスループットスクリーニング (HTS) 系を用いて化合物ライブラリーからの抗ウイルス活性物質の同定を行っている。

5. ガボン共和国におけるウイルス感染症の調査研究

ガボン共和国は大西洋に面し赤道を跨ぐ形で国土を有する中央アフリカの国である。この国は、国土の80%が森林という自然豊かな土地であるが、これまでに4回エボラウイルス病のアウトブレイクを経験している。デング熱やチクングニア熱などのウイルス感染症のアウトブレイクもこれまでに報告されているが、現地ではウイルス感染症の診断システムが確立されておらず、多くのウイルス感染症は未同定のままでウイルス感染症の実態把握には至っていない。当研究室では、2016年度より JICA・AMED 共同プログラムである地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) の研究課題として同国において「公衆衛生上問題となっているウイルス感染症の把握と実験室診断法の確立プロジェクト」を進めている。このプロジェクトでは、アフリカの現地医療に生涯を捧げたことでノーベル平和賞を受賞し

たアルベルト・シュバイツァー博士ゆかりの地であるランバレネにおいて、ランバレネ医療研究センターとの国際共同研究として現地のウイルス感染症の実態調査とそれらウイルス感染症の診断法の開発と導入を目指して活動している。

6. ナイジェリアにおけるラッサ熱研究

毎年乾季になるとラッサ熱疑い患者が多数報告されるナイジェリア南東部において疫学調査を行っている。また、疫学調査に基づいた新規診断法の開発やラッサウイルス株の詳細な遺伝学的解析も進めている。ラッサウイルス株は遺伝系統学的に6つの系統に分けられるが、南東部でラッサ熱患者の検体から検出されたラッサウイルス遺伝子はすべて系統Ⅱに属するもので、これらのウイルス株は長い年月この地域で保存されており、およそ195年前にこの地域の系統Ⅱのラッサウイルスは2つの亜系統に分岐したことも示唆された（Oloniniyi et al., 論文投稿中）。

4. 3 細菌学分野

細菌学分野は熱帯地に蔓延する細菌感染症、特に腸管系細菌感染症の疫学的研究、さらに細菌感染成立に関与する種々の病原因子の研究を展開している。また、細菌感染からの防御機構の一つとして自然免疫反応として働く抗菌性ペプチドの研究を遂行している。

1. 下痢原性病原細菌に関する研究

途上国においては、下痢原性大腸菌による下痢症は乳幼児下痢症の重要な死亡原因の一つであり、重要な公衆衛生学的課題のひとつである。また、先進国の人々が途上国へ旅行する場合に罹る旅行者下痢症の原因となる。下痢原性大腸菌は、現在、少なくとも腸管出血性大腸菌（EHEC）、腸管病原性大腸菌（EPEC）、腸管侵入性大腸菌（EIEC）、毒素原性大腸菌（ETEC）、腸管凝集性大腸菌（EAEC）などに分けられている。

ケニアにおける下痢原性大腸菌は、先進国と比較してEHECがほとんど認められないという特徴がある。ケニアにおいては、下痢原性大腸菌としては、EAECが一番多く検出され、ETECおよびEPECがその後に続いて検出される。これらの下痢原性大腸菌が持つ下痢毒素（STh, STp, LT, EAST1, VT1, VT2など）および病原因子の遺伝子の分布状況の調査、これらの感染成立における役割、下痢発症における作用機序の解析をおこなっている。

なお、本研究はケニア拠点との共同研究として行われている。

Ⅱ. ヘリコバクター・ピロリに関する研究

ピロリ菌（正式名称：*Helicobacter pylori*）は慢性胃炎や消化性潰瘍、MALTリンパ腫、胃癌などの重篤な疾患を引き起こす原因菌であるとWHOにより認定されている。また、近年では胃を中心とした消化管疾患のみならず、血小板減少性紫斑病や鉄欠乏性貧血、さらにはアルツハイマー病やパーキンソン症候群などとの関連が示唆されている。ピロリ菌による疾患は日本を含めた東アジア地域で特に重要であり、また熱帯地域を含む発展途上国ではその感染率が50-80%と非常に高率になっていることが知られている。

これまでの研究により、本菌の病原性には空胞化毒素VacAと発ガン因子であるCagAの2つの因子が重要な役割を担っていると認識されており、本研究ではこれらの因子のピロリ菌感染時における役割について解析している。本研究では特にVacAとその宿主受容体の中心としたピロリ菌感染時における役割について焦点を当てることで、ピロリ菌の持続感染が引き起こす多様な疾患を説明するための新たな知見の取得を目指す。さらにピロリ菌が産生する病原因子に関する研究に加えて、ピロリ菌が感染することによって引き起こされる宿主細胞内の変化や影響を理解することを目指し、ピロリ菌による疾患形成に至るまでの作用機序を明らかにする検証を行っている。

なお、本研究は国際保健学分野との共同研究として行われている。

Ⅲ. ヒトの抗菌性ペプチドに関する研究

抗菌性ペプチドは自然免疫反応の1種として、ヒトが産生するだけではなく、あらゆる種類の生命体で認められる防御機構である。ヒトにおいては、ディフェンシン、LL-37などが良く知られている。

こうしたヒト抗菌性ペプチドの発現機構および作用機序に関して研究をおこなっている。

4. 4 原虫学分野

ラッキ・アムザは平成29年5月から熱研研究機関研究員として研究に従事した後、8月に米国ペンシルベニア州立大学へ博士研究員として転出した。10月にはトーマス・テンプレートンが熱研分子疫学分野の外国人客員教授に再度着任し、キショール・パンディーが博士研究員として分野に参画（平成30年3月まで）した。11月には高浜幸絵が退職した。平成30年1月に佐倉桃子と荘准が技能補佐員として分野に参画した。

I. マラリア原虫に関する研究

1) マラリア原虫の赤血球侵入の分子機構

助教の麻田正仁と大学院生の外川裕人らは、ネズミマラリア原虫 *Plasmodium yoelii* で Tet-OFF による遺伝子発現抑制系や本原虫の赤血球侵入イベントを短時間に大量に観察できるタイムラプスイメージング解析を確立し、赤血球結合分子 EBL を欠損させた原虫が赤血球と不可逆的な結合を形成できないことを可視化することに成功した。外川は本研究成果を第87回日本寄生虫学会大会（東京，2018年3月）にて口頭発表し、Best Presentation Award を受賞した。大学院生の石崎隆弘は *P. yoelii* の赤血球侵入関連分子分泌調節を担うキナーゼの同定に向けた研究および赤血球侵入関連分子分泌動態の解析を進めた。助教の矢幡一英は熱帯熱マラリア原虫のメロゾイト放出を阻害する評価法の確立を進め、第86回日本寄生虫学会大会（札幌市，2017年5月）にて発表した。矢幡と金子は Culleton 研究室との共同研究により、*P. yoelii* EBL の細胞接着領域の変異により、細胞侵入能力が増強されることを見出し論文報告した（PLoS Pathog, 2017）。大学院生のナッタワット・チャイヤウォンは赤血球侵入および病原性に係る新規分子を見出すために、*P. yoelii* を用いた連鎖解析研究を開始した。金子修は第73回日本寄生虫学会西日本支部大会（大阪市，2017年10月）にて「マラリア原虫の赤血球侵入」の演題で教育講演を行った。矢幡は国際共同研究加速基金の助成金により、英国のフランシス・クリック研究所のモーリッツ・トレーク博士の研究室に長期滞在し、熱帯熱マラリア原虫メロゾイトの共同研究を推進した。その間、外川も同研究所のアンソニー・ホルダー博士の研究室を3か月間訪れ、原虫の赤血球侵入に関する研究に携わった。

2) マラリア原虫寄生赤血球の改変機構

元特任研究員の宮崎真也が熱帯熱マラリア原虫 SURFIN の赤血球内への輸送に関わる分子の同定に関する研究成果を、BioMalPar XIII（ドイツ，2017年5月）にて発表した。大学院生のベン-イエディ・アベル・チタマは SURFIN の輸送シグナルの解析をさらに進めた研究成果を第16回あわじしま感染症・免疫フォーラム（淡路市，2017年9月）にて発表した。矢幡と金子は東海大学の木村啓志博士らと、マラリア原虫寄生赤血球の細胞膜変形能を定量解析できるマイクロデバイスの開発を継続し、研究成果を東海大学マイクロ・ナノ研究開発センター国際シンポジウム2017（平塚市，2017年8月）にて発表した。

3) マラリア原虫のカルシウム調節機構

矢幡らは長崎大学医歯薬学総合研究科の石川岳志博士との共同研究として、マラリア

原虫のカルシウム調節機構を標的とした創薬研究を継続した。また、関連する総説を発表した（細胞，2017）。

4）三日熱マラリア原虫の研究

金子は実用的な培養系が確立していない三日熱マラリア原虫の培養系の確立と肝細胞でレポーター分子を発現する組換え三日熱マラリア原虫の作製を目的に研究を継続し、その一環として、米国国立アレルギー・感染症研究所のトーマス・ウェレムズ博士らと二日熱マラリア原虫レポーター株の作製を継続した。また、研究成果の一部を元特任研究員のキッティサク・タナションが第16回あわじしま感染症・免疫フォーラム（淡路市，2017年9月）にて発表した。金子とチャイヤウォンはタイのマヒドン大学熱帯医学部のジェットサモン・サタボンコット博士や慶應義塾大学の久保亜紀子博士らとの共同研究として、ヒト肝細胞を有するキメラマウスを用いて三日熱マラリア原虫の肝細胞ステージから質量分析イメージング法を用いた植物ホルモンの検出研究を継続した。また、マヒドン大学熱帯医学部のラパボーン・パトラブビッチ博士と米国ワシントン大学医学部のプラディップシン・ラソド博士との共同研究として、培養肝細胞を用いた三日熱マラリア原虫の休眠体の解析を行い、研究成果を日米医学協力研究会・寄生虫疾患部会会議（長崎市，2018年2月）にて口頭発表した。金子は韓国の江原大学校ハン・ウンタク博士との共同研究として、三日熱マラリア原虫のメロゾイト先端部に発現する分子AARPに対する抗体が二日熱マラリア原虫のAARPにも強く反応し、本原虫の赤血球侵入を阻害する事を見出し、論文発表した（Sci Rep, 2018）。9月にはニュージーランドのオタゴ大学のブルース・ラッセル博士が大学院生と共に来崎し、カニクイザル・マラリア原虫の共同研究を開始した。10月にはオランダの霊長類医学研究センターのクレメンス・コッケン博士と熊本高等専門学校の木原久美子博士と共同でGHITに申請していたマラリア原虫の休眠体のメタボローム解析によるバイオマーカーの探索研究の計画が採択され、研究を開始した。また、獨協医科大学の川合覚博士と、三日熱マラリア原虫のモデルとしてカニクイザル・マラリア原虫 *P. cynomolgi* を使う共同研究を開始し、第87回日本寄生虫学会大会（東京，2018年3月）にて報告した。

5）二日熱マラリア原虫によるヒト感染の分子基盤

大学院生のクワメ・クミ・アサレは二日熱マラリア原虫 *Plasmodium knowlesi* が寄生赤血球内に形成する膜構造のマーカー分子を同定するとともに、形態学的解析を行い、熱帯熱マラリア原虫と二日熱マラリア原虫では、形成する膜構造の大きさや形状が異なるものの、機能的には似ている可能性を見出し、論文発表した（Parasitol Int, 2018）。ラッ

キは熱研共同研究室助教の坂口美亜子らと二日熱マラリア原虫が寄生した赤血球が血管内皮細胞に接着することを見出し、成果を第87回日本寄生虫学会大会（東京、2018年3月）等にて報告した。中澤秀介元助教のベトナムにおける二日熱マラリア原虫の生殖母体形成等に関する研究成果（Parasitology, 2016）と蚊から検出された熱帯熱マラリア原虫のK13変異に関する研究成果（Parasit Vectors, 2017）が論文報告された。アサレはロンドン大学衛生熱帯医学大学院のロバート・ムーン博士の研究室にて3か月間、二日熱マラリア原虫のエピジェネティックな転写制御に関する研究に携わった。

6) マラリアに対する創薬と薬剤耐性の研究

金子と麻田は西安交通＝リバプール大学のルディ・マルケス博士との共同研究として、大学院生を6月から約5週間受け入れ、熱帯熱マラリア原虫とバベシア原虫に対する創薬研究を行った。上村はインドネシア・アイルランガ大学スクマ・バスキ博士とインドネシアにおける熱帯熱マラリアに対するアルテミシニンの有効性とその耐性遺伝子K13の解析の共同研究を継続し、東カリマンタンのサンプルについての解析の結果、K13に変異が認められないこと、アルテミシニン併用療法の導入前と比較して熱帯熱マラリアの感染率が低下していることをグローバルヘルス合同大会2017で報告した（東京、2017年11月）。

7) マラリア原虫抗原の抗原性と多様性に関するフィールド調査研究

大阪市立大学の金子明博士らと共同で採取した熱帯熱マラリア原虫ケニア株のクローニングを行い、一部の原虫で全ゲノム配列を決定し、*in vitro*薬剤抵抗性の解析を開始した。ケニアのマウント・ケニア大学のジェッセ・ギタカ博士がテルモ生命科学芸術財団に申請していた、ケニアの熱帯熱マラリア原虫におけるK13非依存型アルテミシニン耐性の機序を明らかにする研究助成金が2018年1月に採択され、共同研究を開始した。

8) 偶蹄類寄生性マラリア原虫の研究

麻田らは、偶蹄類に寄生するマラリア原虫種の分子疫学調査を継続した。タイのチュラロンコン大学のモラコット・カエタマソー博士との共同研究として、麻田と竹田がタイを訪問し、偶蹄類マラリア原虫の分離株を樹立する試みを継続した。また、ヤギのマラリア原虫がアフリカ・アジアに広く流行していることを見出し、顕微鏡写真も世界で始めて撮影することに成功し論文報告した（Sci Rep, 2018）。金子と麻田はブラジルのミナス・ジェライス連邦大学のエリカ・ブラガ博士と偶蹄類マラリアに関する共同研究を行い、南米のシカにもマラリアが寄生していることを初めて見出し論文報告した（Int

J Parasitol Parasites Wildl, 2018)。

9) その他

金子と矢幡は長崎大医歯薬学総合研究科の由井克之博士らと共同で、ケニアにおける無症候性熱帯熱マラリア感染児におけるT細胞免疫応答の質は多様性に富むものの、一般的にマラリア原虫の感染により抑制されることを見出した (Parasitol Int, 2018)。金子はまた、熱研免疫遺伝学分野の平山謙二博士らと共同で、熱帯熱マラリア原虫のヘモゾイン形成を阻害する化合物の予測モデルに関する成果を論文発表した (Antimicrob Agents Chemother, 2018)。

Ⅱ. トリパノソーマ原虫に関する研究

上村はアメリカ・トリパノソーマ原虫のトランスシアリダーゼについて、本学・先端創薬イノベーションセンター・武田弘資博士の協力を得て、スクリーニングで得られた幾つかのリード化合物の誘導体を調べ、阻害効果を示す化合物の基本骨格についての情報を得た。より有効な阻害剤を得るために、トランスシアリダーゼの立体構造を基とした検討を行った。麻田は帯広畜産大学の井上昇博士らとの共同研究として、*Trypanosoma congolense* 上鞭毛期原虫のヘモグロビン受容体の解析結果、および、アフリカ・トリパノソーマ原虫のザンビアにおける疫学研究成果を論文発表した (Parasit Vectors, 2016; J Vet Med Sci, 2017)。

Ⅲ. バベシア原虫に関する研究

麻田と外国人客員研究員 (学振) のハサン・ハキミは、*B. bovis* 寄生赤血球の接着現象の分子基盤を明らかにするため、寄生赤血球表面に発現する分子の同定を試み、その成果を第13回 Nagasaki-Singapore Medical Symposium (長崎市, 2017年5月) 等にて発表した。また、寄生赤血球が内皮細胞接着性の原虫ラインと非接着性の原虫ラインの網羅的転写解析により *ves1 α* と呼ばれる遺伝子の接着性への関与を示唆する結果を得、第28回 Molecular Parasitology Meeting (米国, 2017年9月) 等で発表した。さらに、帯広畜産大学原虫病研究センターの玄学南博士らとの共同研究で、犬に寄生するギブソン・バベシア原虫 *Babesia gibsoni* の一過性遺伝子発現系を開発し (Mol Biochem Parasitol, 2017)、バベシア原虫の種間を超えて機能するプロモーターに関する研究成果についても論文発表を行った (Ticks Tick Borne Dis, 2018)。加えて、北大人獣共通感染症リサーチセンターの山岸潤也博士らと共同で *Babesia ovata* の全ゲノム配列を明らかにした (BMC Genomics, 2017)。麻田は鹿児島大学の正谷達膳博士との共同研究として、鹿児島で採取されたダニを用いて同地域におけるダニのバベシア原虫等の感染状況も明らかにし、成果を発表した (Ticks Tick Borne Dis, 2017)。

Ⅳ. その他、国際活動など

上村は熱研のケニア拠点およびインドネシア・アイルランガ大学と、矢幡は英国フランス・クリック研究所と、金子はタイのマヒドン大学やチュラロンコン大学、米国南フロリダ大学、米国ワシントン大学、米国国立アレルギー・感染症研究所、英国ロンドン大学衛生熱帯医学大学院、ニュージーランドのオタゴ大学、韓国江原大学校、マウント・ケニア大学といった様々な国外研究機関の研究者とマラリアに関する海外共同研究を行った。また、第16回あわじしま感染症・免疫フォーラムに招待されたデイビッド・コンウェイ博士を熱研に招聘し、セミナーを開催した。金子は2017年12月まで日本熱帯医学会の監事を務め、12月からは会計担当常任理事に着任、2018年3月には日本寄生虫学会の理事に着任した。金子はまた、学術誌PLOS ONEの編集委員を継続して務めた。

4. 5 寄生虫学分野

本分野は世界的に重要な住血吸虫症・フィラリア症ならびに腸管寄生虫症などの蠕虫疾患、多くの人々を苦しめているにもかかわらず顧みられることの少ないアメーバ赤痢・リーシュマニア症・トリパノソーマ症などの原虫疾患に対してフィールド・ラボ双方向からのアプローチを試みている。

平成29年4月、田中美緒と Keith Kiplangat Talaam の2名が、医歯薬総合研究科博士課程（熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム）に入学し、本分野所属となった。5月13-23日、スペイン・トレドで開催された WorldLeish-6 Congress に参加し、また同地にて GHIT 研究の打合せを行った。5月26-29日、北海道大学で開催された第86回日本寄生虫学会大会に参加した。6月28日、エジプト South Valley 大学の博士課程に所属する大学院生 Eman Abdelazeen Abuelmafa Mousa がエジプト政府のチャネル・システム事業により来日し、協力研究員として本分野での研究を開始した。6月30日-7月7日、大分大学の小林隆志教授、愛知医科大学の伊藤誠教授と共にバングラデシュに国際下痢症研究センター icddr,b. を訪ね研究打合せを行った。7月21日、大阪大学微生物病研究所で開催されたアドバンストセミナーで講演を行った。9月5-8日第16回あわじしま感染症・免疫フォーラムに参加した。18-21日、ロンドン熱帯医学衛生校での会議に参加し、21-27日、ケニアを訪問し、ヴィクトリア湖湖畔の Mbita において基盤研究（A）による住血吸虫症の時空間疫学研究を展開した。10月28日-11月1日、金沢で開催された The 5th Annual Meeting of the International Cytokine and Interferon Society, ICIS 2017 に参加した。11月2日、東京大学で開催された赤痢アメーバに

関するミーティングに参加し、その後、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター（奄美分室）で開催された第70回日本寄生虫学会南日本支部大会に参加した。11月24-26日、第58回 日本熱帯医学会・グローバルヘルス合同大会2017（東京大学）で企画された「日本の熱帯医学、我ら今何を為すべきか」にシンポジストとして参加した。この頃、TMGH研究科 MPH専攻の佐々美保が寄生虫学分野に配属された。12月12-14日、第46回日本免疫学会学術集会（仙台）に参加した。11月28日に Sharmina Deloer が公開学位審査を終え、1月から佐賀大学へ異動し J-PRIDE 予算で雇用されることになった。2月14-15日、J-PRIDE 九州班会議が長崎で開催された。22-24日、第11回寄生虫感染免疫研究会（杏林大学）に参加した。3月15-18日、国立国際医療研究センターで開催された第87回日本寄生虫学会大会に参加した。本年度より、本学・医歯薬学総合研究科、熱帯医学研修課程、TMGH研究科、医学部、九州大学・医学部 & 医学系研究科、山口大学・医学部、奈良県立医科大学に加えて高知大学・医学部での講義を担当した。

1. 住血吸虫症に関する研究

平成29年度、科学研究費・基盤研究（A）（海外学術）『ヴィクトリア湖湖畔における住血吸虫伝播ダイナミクスと環境モニタリング（平成29-32年度）』が採択された。平成25-27年度に頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム『住血吸虫症の多角的な調査を通じたフィールド志向型熱帯感染症専門家の強化育成事業』で築いた研究基盤を生かして、病害動物学分野・二見恭子・皆川昇、免疫遺伝学分野・菊池三穂子・平山謙二、工学部・板山朋聡、神戸大学・源利文、リバプール大学との連携を進めた。ケニア中央医学研究所 KEMRI やケニア・マセノ大学において承認されている研究計画に基づき、Mbita には Ngetich Benard を配しヒトの疫学研究を進めると共に、CBO を活用して中間宿主貝の定点観測、DNA抽出を継続した。Prof. Njenga（ESACIPAC, KEMRI）の研究グループ、新潟大・松本（結核）グループ、長崎大・由井（マラリア）グループなどとの共同研究体制を維持・強化した。またさらに、生態疫学分野・金子聡・藤井義人・Yombo と連携してマンソン住血吸虫の診断用抗原の探索・構築を進めた。研究室ではマンソン住血吸虫 *Schistosoma mansoni* および中間宿主貝を継代維持して、各種研究や学生実習に供している。

2. フィラリア症ならびにその他の蠕虫疾患に関する研究と国際貢献

ラボでは、マレー糸状虫 *Brugia malayi*、パハン糸状虫 *Brugia pahangi* および糸状虫の媒介蚊であるネッタイシマカ *Aedes aegypti* を継代維持しており、TMGH 北瀬グループ、城西大学薬学部の武内智春助教らとの共同研究を開始した。土壌伝播蠕虫に関しては、ロンドン自然史博物館との共同研究として「DeWorm3プロジェクト、ビル&メリンダ・ゲイツ財団」に

参画し、高感度検出法を用いて国内の現況を調査した。

3. リーシュマニア症およびアメーバ赤痢に関する研究

平成27年度に公益社団法人グローバルヘルス技術振興基金に採択されたオハイオ州立大学（米国）、マギル大学（カナダ）、NIH・FDA（米国）との研究課題“Live attenuated prophylactic vaccine for leishmaniasis（GHIT Fund RFP 2015-001）”に関して研究を進めた。具体的にはCRISPR-Cas技術で作成された*centrin*欠損*Leishmania major*の生ワクチンとしての安全性と免疫付与・感染防御効果を確認し、GLP/GMP規格の製品生産を可能とする次期大型予算の申請準備を進めた。バングラデシュではicddr,bと連携しリーシュマニア症の研究を展開した。またタイプ2自然免疫リンパ球ILC2に着目して赤痢アメーバに対する感染防御機構を解明すると共に、平成29年より、感染症研究革新イニシアティブ（J-PRIDE, AMED）に採択された「赤痢アメーバ“含硫脂質代謝”を標的とする阻害剤探索」に関する共同研究を開始した。

4. 6 分子疫学分野

【チョン・ヨンセン】

2017年6月まで在籍し、以下の研究を行った。

1. 南アフリカ共和国リンポポ州の気象データおよびマラリアサーベイランスデータをもとに、マラリア流行期と非流行期で異なる統計モデルを選択するスイッチングモデルを持ちいて、マラリア流行予測モデルの開発に従事した。本研究は熱研が同州でおこなっているSATREPS事業「気象予測を用いたマラリア流行早期警戒システムの構築」において、マラリア流行予測の基礎となる研究である。
2. ベトナム、マレーシア、フィリピン3か国の日別時系列死亡者数データと気象データを用いて、これまで未解明であった熱帯地域における気温と死亡率との関連を定量化するために、時系列解析モデルの開発に従事した。
3. 日本の47都道府県の過去40年間（1972年-2012年）の死亡者数データと気温データを用いて時系列解析を行い、温暖化により暑熱の死亡者数に対する影響が時代とともにどのように変化しているか明らかにすることを試みた。暑熱の影響が過去よりも現在に近くなるほど概ね小さくなってきていることや、東西日本でその変化のパターンが異なるこ

となど、非常に興味深い知見が得られ、*Environmental Health Perspectives*誌で論文発表した。本知見をもとに、暑熱影響の時系列変化が温暖化に対する適応によるものか、それ以外の社会的・人口学的要因によるものか、さらなる検討を開始した。

【トーマス・テンブルトン】

2017年10月に着任後、ネズミマラリア原虫が寄生赤血球へ輸送する PHIST と呼ばれる蛋白質のノックアウト原虫の作製を開始した。また、アフリカから米国に輸入された偶蹄類の血液からのDNA試料を入手する段取りをつけた。

4. 7 免疫遺伝学分野

1. 研究テーマの概要

当研究室では、幅広い感染症、とりわけ1) デング熱、2) マラリア、3) シャーガス病に関連する以下のような問題に着目し、免疫学的・遺伝学的解析を行っている。

1) デング熱は、不顕性感染の症例も多い蚊媒介性の熱性疾患として知られているが、重症例では死に至る場合がある。そのため重症化に至る可能性が高い症例を早期に発見できる感度・特異度の高い診断法（早期予測因子による）が求められている。また、ワクチン開発では、これまで主に抗体誘導が目指されてきたが、近年T細胞などが働く細胞性免疫の重要性が示唆されている。しかし、その機序は未だ不明なことが多い。2) マラリアに関しては、十分に実用的なワクチンが開発できていないこと、また、抗マラリア薬に対しては、すぐに耐性が生じてしまうことが問題になっている。このような現状から、新たな作用機序を有する優れた新規抗マラリア薬の開発が常に求められている。3) シャーガス病は、（前述のデング熱同様に）“顧みられない熱帯病”に分類される疾患である。急性期には感冒に類似した症状でおさまることが多いが、10年ほどの比較的長い潜伏期の後に巨大結腸症や心肥大などの慢性合併症を来することが知られている。これら慢性期病態の発症機序やその予防法、さらには慢性感染症の治療薬の開発など、ラテンアメリカに在住する1千万人以上の慢性感染者や30万人の新たな感染者を抱える感染症の制御は大きな課題となっている。

教室では各疾患の問題点に対して研究テーマを設定し、平成29年度には代表的なものとして総括で述べるような研究成果をあげ、論文として報告している。

2. 主な研究テーマ

- デング熱における重症化早期予測因子の解明とその応用

- デング熱における細胞性免疫の特にヒトT細胞応答性の解析
- マラリアワクチン候補分子の同定とそれに関連する免疫応答性の解析
- マラリア原虫抗原及び宿主免疫関連遺伝子の遺伝子多型と防御免疫の関連解析
- フェノタイプあるいは標的分子を用いた新規抗熱帯熱マラリア薬開発
- ボリビアにおけるシャーガス病患者の薬剤感受性、合併症発症に関するの遺伝学的・免疫学的解析

3. 平成29年度の総括

- デング熱の優れた重症化予測因子を発見すべく、ベトナム南部のベンティエ総合病院で患者コホート研究を2年にわたって行い、デング熱患者の発熱後早期の血漿を多数収集し、入院観察後判明した重症群と軽症群の血漿タンパク成分の比較を行った。最終的に統計的に有意差の観察されたタンパクは2種であったが、その一つはデング特異的なIgE抗体であった。すなわち重症デングでは、血漿中の総IgEに対するデング特異的なIgE比が高くなることが示された。この結果は血管内皮を裏打ちするマスト細胞の反応との関連を示唆するものでありきわめて重要な発見と思われる。この研究成果は本年度投稿中（平成30年4月アクセプト）。**Inokuchi M, et al. Association between dengue severity and plasma levels of dengue-specific IgE and chymase. Arch Virol. 2018 May 4.**
- デングウイルスに対する防御免疫反応における細胞性免疫の重要性明らかにするためには、主たるエフェクター細胞と想定される細胞傷害性T細胞の誘導を試験管内で再現する実験系が必要となる。そのため、ヒトiPS細胞から誘導した骨髄細胞株を用いて樹状細胞誘導し、これを用いた抗原特異的T細胞の試験管内での活性化を再現する実験系を構築した。この研究成果は現在論文として投稿。（平成30年6月アクセプト）**Manh DH, et al. iPS cell serves as a source of dendritic cells for in vitro dengue virus infection model. J Gen Virol. 2018 Sep;99(9):1239-1247.**
- 新規抗マラリア薬候補の探索を、マラリア原虫が赤血球内で生き残るために使用しているヘモゾイン形成機構に着目して行った。東京大学創薬機構(DDI)より提供された9,600コアラライブラリー化合物からヘモゾイン阻害活性を指標にHTSを行い200化合物を選定。続いて、ヒト赤血球期マラリアの試験管内増殖系を用いて、原虫増殖阻害能を検討し、細胞障害性のないIC50がマイクロモルレベルの6化合物をヒット化合物として同定した。平成29年度には、このヒット化合物をモチーフとした類似構造化合物を東大のライブラリーから1,300ピックアップし、さらに高い活性を有する化合物を発見した。本研究は、AMEDより創薬支援推進事業・創薬総合支援事業（創薬ブースター事業）として助

成を受けることとなった。また、得られた実験結果をもとに、化合物の物理化学的特性から抗マラリア活性を予測するモデルを構築し論文として報告した。(論文1)。**Mosaddeque F,et al.Prediction Model for Antimalarial Activities of Hemozoin Inhibitors by Using Physicochemical Properties. Antimicrob Agents Chemother. 2018 Apr 26;62(5).**

- 新規抗マラリア薬、抗シャーガス薬の探索のために、伝承医薬領域とも共同研究を進めた。漢方については富山大学和漢医薬学総合研究所の小松研とスクリーニングを行い、すでに有望な生薬を選択した(論文準備中)。また同時にアフリカ原産の抗マラリア作用を持つ薬草コンゴボロロの薬効成分に関する解析を共同で進めている。
- シャーガス病の合併症早期予測因子探索研究は科研費(A)で行っているが、平成29年は、共同研究の相手先のUAGRM(ボリビアサンタクルース市のガブリエラルミモレノ自治大学)の新入生のシャーガス病検査を行い、約5%の陽性者が存在することが分かった。未治療の陽性者について来年度にかけて臨床的な検査を行い、早期合併症の有無について検討する予定。現地の倫理委員会の開設準備にほぼ一年かかった。

4. 学会等の活動状況

氏名・職	委員会等名	関係機関名
平山謙二・教授	日本寄生虫学会評議員	日本寄生虫学会
平山謙二・教授	日本熱帯医学会理事	日本熱帯医学会
平山謙二・教授	日本組織適合性学会評議員	日本組織適合性学会
平山謙二・教授	米国熱帯医学会会員	米国熱帯医学会
平山謙二・教授	科学研究費委員会専門委員	独立行政法人日本学術振興会
平山謙二・教授	寄生虫疾患専門部長	日米医学協力研究会
平山謙二・教授	会長	長崎シンガポール・マレーシア協会
平山謙二・教授	議長	アジア西太平洋地域倫理委員会(FERCAP)
平山謙二・教授	PLoS NTD 編集委員	PLOS Journals
平山謙二・教授	帯広畜産大学原虫病研究センター運営委員会委員	帯広畜産大学原虫病研究センター
平山謙二・教授	協力研究委員	富山大学和漢医薬学総合研究所
平山謙二・教授	研究評価委員会委員	国立感染症研究所
菊池三穂子・講師	評議員	日本熱帯医学会

5. 市民講演会、アウトリーチ活動

- ① Diploma Course on Research & Products to Meet Public Health Needs (世界保健ニーズに応える医薬品研究開発のためのディプロマ・コース) の開催

主催者：平山謙二, Juntra Laothavorn教授 タイ王国タマサート大学国際大学院との共催, 東京大学, タイ王国チュラロンコン大学の協力, 長崎大学熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラムのコースワークとして登録

日時：2017年8月21日～9月1日 場所：長崎大学グローバルヘルス総合研究棟4階中セミナー室

②第16回 医学研究のための倫理に関する国際研修コースの開催

代表者：佐々木均 教授 主催者：平山謙二, Juntra Laothavorn教授

主催：長崎大学熱帯医学研究所 共催：東京有明医療大学, 昭和大学, 国立病院機構総合医療センター治験研究部治験推進室, アジア太平洋地区倫理委員会連絡会議(FERCUP), Strategic Initiative for Developing Capacity in Ethical Review (SIDCER), 長崎大学熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム

日時：2017年5月22日～24日 場所：長崎大学グローバルヘルス総合研究棟大セミナー室（坂本キャンパス）

4. 8 病理学分野

4. 8. 1 病 理 学

I. 成人T細胞白血病におけるPim-3発現の重要性に関する研究

ヒトT細胞白血病ウイルス1型（HTLV-1）は、成人性T細胞白血病（ATL）を生じる。ウイルスTaxタンパク質は、ATL発現で主な役割を果たす。serine/threonine キナーゼのPim family は、Pim-1, -2と-3から成る。ATLの治療の標的として、Pim familyの可能性を分析した。

RT-PCRとウエスタンブロット法は、Pim キナーゼ, Taxと細胞内信号分子の発現を決定するのに用いられた。Pim-3とRelAのノックダウンは、小さく干渉するRNAを使用して行われた。細胞増殖, 生存度, 細胞周期とアポトーシスに対する効果は、WST-8, プロピジウム・ヨウ化物とAPO2.7分析によって分析された。NF- κ B DNA結合活性は、電気泳動度移動検定によって分析された。

Pim-3発現は、HTLV-1に感染しているT細胞株に制限された。Pim-3のNF- κ Bは、Knockdownを通してのTaxによって誘発されたPim-3の発現により、HTLV-1感染のT細胞の発育を抑制することを示した。NJC97-nHは、Pim-1/3キナーゼの新しい抑制剤で細胞生存度を抑制する。NJC97-nHは、G2/M細胞周期停止を誘導し、サイクリンAとサイクリンB1を発現する。

Pim-3は、ATL治療に対する新しい適切な治療薬の可能性がある。

Ishikawa C, Senba M, Hashimoto T, Imaizumi A, Mori N. Expression and significance of Pim-3 in adult T-cell leukemia. *Eur J Hematol*, 2017, 99 (6): 495-504.

Ⅱ. Butein は NF- κ B, AP-1, Akt を抑制して成人T細胞白血病の活性化に関する研究

ヒトT細胞白血病ウイルス1型 (HTLV-1) は、成人T細胞白血病/リンパ腫 (ATLL) の原因である、しかし、HTLV-1関連の疾患の有効な治療がない。我々は、HTLV-1に感染したT細胞株の細胞成長、アポトーシスとシグナル伝達系で、腫瘍成長に関して **butein** (生理活性植物ポリフェノール) の効果を認めた。**butein** による治療は、HTLV-1感染したT細胞株の生存度の減少を引き起こした。**butein** で培養されるT細胞は、明らかなアポトーシス形態とカスパーゼ-3、-8と-9の活性化によるポリエステル繊維 (ADPリボース) の重合酵素の裂開を示した。カスパーゼ抑制薬による細胞の前処置は、**butein** によって誘導され、細胞生存度を部分的に抑制した。**Butein** は、G1相で細胞周期停止する。**Butein** は、CDK4, CDK6, サイクリンD1, サイクリンD2, サイクリンE, **survivin**, XIAP, c-IAP2, 燐酸pRbのタンパク質発現レベルを著しく制御した。ATLL異種移植腫瘍を行ったマウスにおいて、**butein** は腫瘍成長を有意義に抑制して、可溶性インターロイキン-2受容体 α 鎖と可溶性分化抗原群30の血清レベルを低下させた。

butein は、生体の内外で、HTLV-1に感染したT細胞に信号を送っているNF- κ B, AP-1, Aktの抑制を通して抗増殖性およびプロアポトーシスを示し、ATLLを含むHTLV-1関連の疾患に対して、治療薬としての可能性を示唆した。

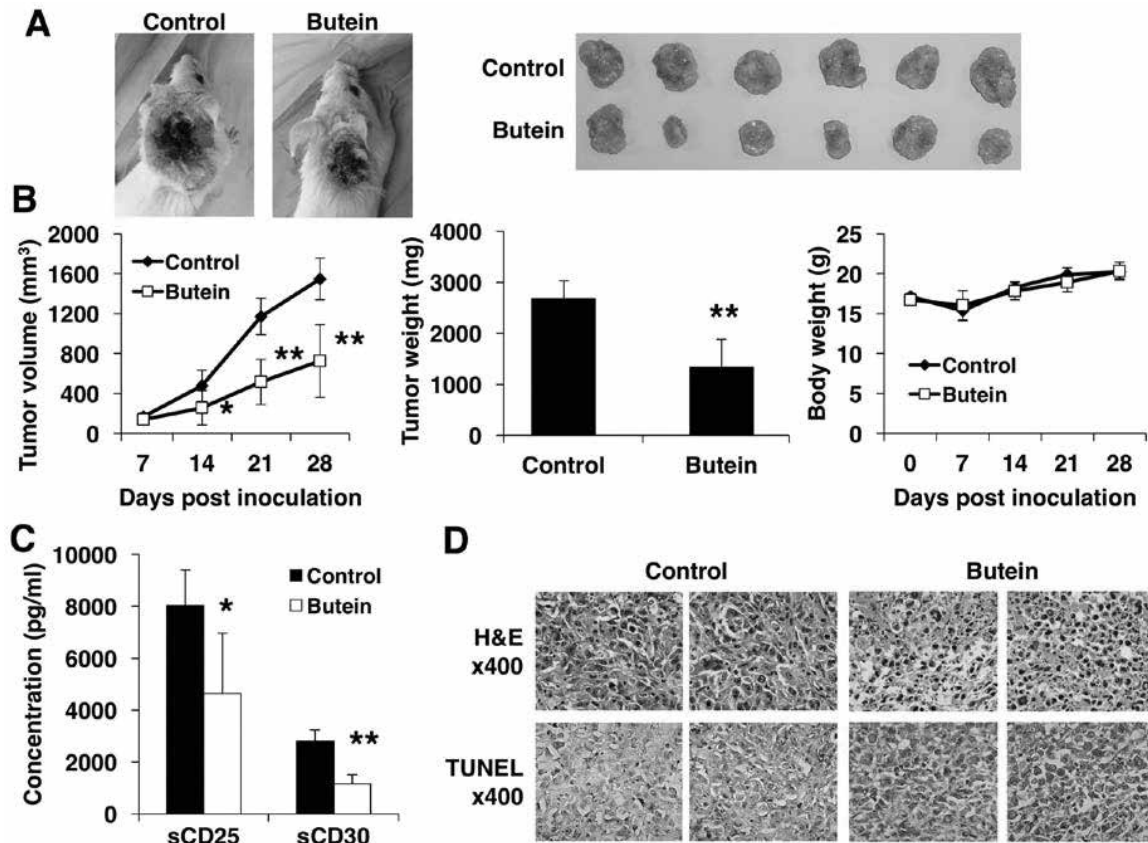


図 HUT-102腫瘍-関係SCID マウスにおける butein の抗腫瘍作用。

HUT-102細胞は、SCID マウス (n=6) の耳介後部の、皮下に移植された (A)。マウスは、週に3回 butein (0.7mg/kg) または溶媒を用いた治療を受けた (左のパネル)。可視HUT-102異種移植腫瘍は、剖検 (正常なパネル) の前に移植された。Serialは、マウスの体重 (右のパネル)、腫瘍容積 (左のパネル) (B)。

buteinと対照群 (中間のパネル) の腫瘍組織の重さ。SDがマウスでsCD25とsCD30の血清濃度で評価する (C)。腫瘍組織の細胞のアポトーシスは、H&EとTUNELで染色をして測定した (D)。倍率、x400。

Ishikawa C, Senba M, Mori N. Butein inhibits NF- κ B, AP-1 and Akt activation in adult T-cell leukemia/lymphoma. *Int J Oncol*, 2017, 633-643.

4 . 8 . 2 マラリア学

The Malaria Unit published fourteen peer-reviewed scientific papers between April 2017 and March 2018 in journals such as the New England Journal of Medicine, PLoS Pathogens, and the Lancet Global Health. The NEJM paper described the first report of Artemisinin resistance in Africa, a finding of crucial importance. We published the results of experiments identifying targets of strain specific immunity and virulence control in malaria parasites in PLoS Pathogens, findings which also formed the basis of a successful patent application. In collaboration with researchers from FioCruz in Brazil, we also described an outbreak of zoonotic malaria in Brazil, another finding of potentially huge importance in the malaria research field. We went on to design and publish a sample assay for identifying zoonotic malaria in humans, which was subsequently published, and is now under consideration for a further patent.

We hosted Cláudia Gomes, a JSPS International Post-Doctoral Fellow from Portugal, who performed experiments concerning within-host competition between malaria parasite species.

Medard Ernest published his first paper on the Toll-Like Receptor 2 agonist PEG-Pam₂Cys as an immunochemoprophylactic and immunochemotherapeutic against the liver and transmission stages of malaria parasites in IJP; Drugs and Drug Resistance.

Richard travelled to Melbourne in July for the first World Malaria Congress, where the results of the Brazilian zoonotic malaria were presented. Also presented were the ongoing work on *P. ovale* and *P. malariae* in Nigeria. Medard Ernest travelled to South Korea for ICOPA and presented his Pam₂Cys results.

This year has seen the continuation of many exciting collaborative projects with overseas researchers including scientists from the London School of Tropical Medicine and Hygiene in the UK, the University of Melbourne in Australia, Mahidol university in Thailand, the Jiangsu Institute of Parasitic Diseases in China and FioCruz in Brazil.

4. 9 生態疫学分野

本分野では、実態把握と実態の把握から始まる新たな研究への展開を目指し、分子生物学や最新の情報技術も駆使しつつ、広く疾病・健康状態を監視するシステムとそのツールの開発、さらには得られた新たな知見からの次世代研究へと繋げる活動を行っている。

- 1) **貧困層を中心とする複数感染症の一括・同時診断技術開発と広域的監視網の構築に関する研究**：アフリカにおいては、顧みられない熱帯病（Neglected Tropical Diseases: NTDs）が蔓延し、その実態把握もままならない。幾つかのNTDsは、感染分布も重複していることから、複数のNTDsを同時に監視する事が出来れば、効率よくその実態の把握と対策の評価を行うことができる。本分野では、Multiplex技術を用いた複数の感染症に対する抗体価の同時一括測定技術の開発を展開しており、さらには、その技術を用いたサーベイランス（監視網）の整備にむけての研究も展開している。
- 2) **ケニアとラオスにおける HDSS の運用**：開発途上国では、住民登録が未整備な地域も多く、疫学調査を展開するに当たり、地域住民の基礎統計も算出できない。そこで、調査地域に居住しているすべての住民を登録し、その出生、死亡、移動、健康関連情報などを定期的に更新し、長期に追跡するための仕組み（HDSS：人口登録動態追跡システムという）を展開している。本研究分野では、ケニアプロジェクト拠点におけるMbitaならびにKwaleと、ラオスのラハナム地区、セポン地区のHDSSに対して、技術支援をすると共に同地域における健康問題に関する研究も行っている。
- 3) **アフリカにおける地域特性を考慮した乳幼児の健康改善モデル構築に関する疫学研究**：ケニアの地方（辺縁地域）であるクワレ地区は、ケニア国内においても最も貧困である地域の一つであり、乳幼児死亡も高く、また、子供の栄養状態が悪いことから、stunting（月齢に対する標準に比べて、身長が低い）の割合も高い。そこで、妊婦登録と乳幼児登録により、新生児の把握とその追跡、さらには、乳幼児の健康に関する疫学研究を展開し、新生児死亡やstuntingを予防するための要因の把握に関する研究をタブレットPCや指静脈認証装置を導入し、展開している。平成29年度からは、あらたにクラウドベースの母子手帳登録システム（Women and Infant REgistration system: WIRE）を開発し、同地区の数カ所の医療施設において、母子の電子登録を開始した。
- 4) **スリランカにおける居住地の衛生環境改善によるデング熱予防に関する研究**：スリランカのデング熱は、endemic状態にあり、その対策が急がれている。本分野では、スリランカ・クルネーガラ県、ケラニア大学、大阪教育大学との協力により居住地の衛生環境改善（屋外に放置された容器の回収による清掃活動）によるデング熱予防効果の評価に

関する研究を行っている。

- 5) **Multiplex法によるマラリア・ワクチン候補抗原の発掘に関する研究**：マラリア流行地において、多数の候補抗原に対する抗体価を multiplex 法により一括・同時に測定し、マラリア発症リスクを下げる抗体（候補抗原に対する）の確認と有望なワクチン候補抗原の発掘を行っている。
- 6) **寄生虫疾患の分子基盤解明を目指す研究**：本分野では基礎研究も行っており、特に世界的に重要な住血吸虫症、赤痢アメーバ症ならびにリーシュマニア症の分子基盤を解明しようとしている。これらの研究結果をフィールド研究に還元することを目指している。
- 7) **住民主導による総合的な公衆衛生（CLTS）のアフリカ型のモデルを構築する研究**：住民主導による総合的な公衆衛生活動（CLTS）によるアフリカ型健康改善モデルの構築について研究している。
- 8) **スリランカにおける JICA 事業への支援**：スリランカでは、経済発展にともない、寿命が伸び、それとともに生活習慣病の増加と医療費の増加が社会的問題となっている。本分野では、スリランカにおける生活習慣病患者の実態把握のための仕組みの構築に向けて、JICA 事業に協力している。

4. 10 国際保健学分野

当分野の研究は、1)「生態系と感染症」の関係を研究するユニット、2)「環境や気候変動と感染症」の関係を研究するユニット、3)「時間軸のなかでの感染症」を再構築し研究するユニット、4)「歴史感染症学」を研究するユニットに大きく分かれる。そうした研究ユニットを貫く共通概念を、「空間軸」と「時間軸」に置く。空間的広がりと時間的広がりのなかで、感染症流行の様相を比較し、その多様性を理解する。あるいは、そうした広がりのなかにおける、微生物の遺伝的多様性を、適応・進化といった側面から理解することを目指す研究である。具体的には、実地疫学、分子疫学、統計・数理モデリング、微量 DNA の検出技術、次世代シーケンサー、バイオインフォマティクス、分子進化学を駆使し、多種多様なアプローチによって解析の糸口を探る。このような自然科学研究に、文献資料に基づく歴史学的アプローチを加え、双方が共通の課題に取り組むことで、生物と社会の関係について広く理解することが可能となる。

もうひとつの柱である社会貢献は、分野の特性から国際貢献を行うことを目指す。企業に「企業の社会的責任（CSR: Corporate Social Responsibility）」という言葉があるように、大学にも社会的責任があると考え。当分野における社会的責任の一つが、国際貢献であると考

える。国際貢献としては、以下の3つのことを行う。第一に政策提言、第二に現場における開発協力、第三に緊急援助等である。こうした取り組みを通して国際社会への貢献を行う。

【研究活動について】

I. 病原体の分子進化, 感染自然史

1) STLV-1の感染自然史

ヒトT細胞白血病ウイルス（HTLV-1）に近縁なサルT細胞白血病ウイルス（STLV-1）の感染自然史の解明を目指している。これまでに得られた疫学情報の分析から、群によっては陽性率がしばしば50%を超えることが明らかとなり、さらに、HTLV-1とは異なり、母子感染よりも性成熟以降の水平感染によって高い陽性率が維持されている可能性が示唆された。宿主の変化によって病原体の伝播・拡散戦略はダイナミックに変化し、病原性さえも変化する。本課題ではHTLV-1とSTLV-1をそうした変化を知るための1つのモデルとして捉え、その違いをより詳細に調べていく。

2) 動物感染症, 人獣共通感染症の循環と生態学的理解

病原性の獲得は本質的には生物戦略であり、自然環境下における宿主と病原体の関係がどのような生態的バランスにおいて発生、変化しているのかを理解することが重要である。ヒトの病原体と自然環境の接点是人獣共通感染症にあり、さらには野生動物において循環・定着している感染症とその病原体を知ることが、そうした現象理解への新たな糸口になる。本課題では、抗酸菌種や下痢原性大腸菌群の病原遺伝子、宿主スペクトルおよびその病原性を研究対象とし、途上国との連携やフィールド調査、症例分析を通して病原体の分離同定、遺伝的多様性解析を行っている。

3) 日本における結核菌の遺伝的特異性とその来歴

結核菌は結核患者の咳などによって拡散する病原体である。結核菌には複数の系統群が存在しており、それぞれの系統群が地域特異的に定着している。東アジアでは「北京型」と呼ばれる系統群が定着しており、わが国では分離株の約8割が同群に属している。この中で、「祖先型」と細分類された亜系統群は日本において優先的に分離されることが知られているが、周辺国を含めて分離例が少ないことから、日本固有の疫学的背景や何らかの適応進化がその理由として考えられる。本課題では、現代株の比較ゲノムと分子進化、過去の結核患者の古病理標本を材料とした微量DNAの調査分析、歴史的調査といった多角的アプローチにより、日本における結核菌のルーツと履歴を検証し、さらにはそれが現代に及ぼす影響を探る。

4) 文献史料を用いた感染症流行の再現

おもに文献史料を用いて過去数百年における日本の感染症流行状況の再現を行う。対象としては、江戸時代の天然痘、明治時代のコレラ、戦前から戦後にかけての結核、戦後直後の三日熱マラリアなど、日本社会に多大な影響をもたらした事例を取りあげている。過去の感染症流行については、いずれも歴史学ないしは社会経済史など、文献史料のみを用いて、人文・社会科学的手法によって研究されてきた。本分野では、天然痘については数理疫学による伝播パターンの追求、結核については遺伝型別に基づく結核菌の分子疫学研究などを、文献史料の分析と合わせて用いることで、過去の感染症流行の実態に迫ることを目指している。

Ⅱ. 寒冷高地への適応と生活習慣病に関する疫学研究

中国西北部（四川省、青海省、チベット自治区）およびネパール北部の海拔3500mを超える高地居住者の間で問題となっている肥満、糖尿病、高血圧などの生活習慣病が、どのような原因に基づくものであるのかを疫学的に解明することが目的である。

長期的な視野に基づき、次の二つの点から本問題にアプローチしている。第一に、伝統的に継承されてきた塩分多量摂取という歴史文化的適応が、結果的に現代の生活習慣病を増加させる要因となっていないかという点である。第二は、数千年に及ぶ高地居住のなかで蓄積された遺伝的变化、すなわち身体的適応と、生活習慣病との関係である。本研究では、これらについて、現地住民の食生活調査および身体計測によりデータを採取する。

本研究では、高地居住者が、歴史文化的および遺伝子的適応をどのように行ってきたのかを踏まえ、これらが生活習慣病を増幅させる要因となっていないかを疫学的に明らかにする。その上で、高地居住者にとってどのような健康増進の方法が望ましいのかを考えたい。

Ⅲ. 結核分子疫学に基づく伝搬経路推定

結核分子疫学は、結核菌の遺伝的多様性をマーカーとして患者由来株の異同または相同性を判定し、感染源や伝搬経路を推定することを目的とする。

本邦では、東アジア地域の定着株である北京型結核菌において分解能が高いJATA(12)-VNTR型別分析が標準法として有効であり、地方衛生研究所（地衛研）を中心に普及が進められている。しかしながら、数十年にわたる潜伏や患者の長距離移動など、様々な理由のため遺伝多型解析のみでは結核の伝播経路の正確な追跡は難しく、患者情報をはじめとした多様な疫学情報を駆使することが不可欠である。

当分野では、1) 地衛研との連携に基づく実地疫学・遺伝多型情報の集積と活用の模索、2) 次世代シーケンサーの活用と菌株間比較ゲノム解析による超精密な異同判定手法の確立、3)

統計数理モデリングによる実地疫学情報の高度活用を柱とし、結核菌伝搬経路の正確な推定と結核公衆衛生への還元を目指している。

Ⅳ. ピロリ菌の病原性に関する研究

本邦では、男女問わずに毎年数多くの胃ガン患者や胃ガンに起因した死亡者が報告されている。胃がんを誘発する要因は多岐にわたるが、それらの中でピロリ菌が最も重要な因子であることが広く知られている。現状では抗生物質を用いた化学療法でピロリ菌を除去することが一般的に行われているが、他の病原細菌同様にピロリ菌も薬剤耐性菌が増加傾向にあり、抗生物質に頼らない治療法の確立が求められている。新たな治療法や予防法などを確立するには、ピロリ菌がどのように胃ガンなどの疾患を引き起こすのかを理解し、同時にピロリ菌の病原因子が疾患形成における役割などを明らかにすることが重要である。

そこで本課題ではピロリ菌の病原因子であり、胃ガンなどの疾患の形成に重要な役割を担っていることが示唆される **VacA** に着目し、ピロリ菌感染における **VacA** の役割を分子生物学的な手法を用いて解析する。特に、ピロリ菌感染によって誘発される主病態の1つであるガンの形成における **VacA** の役割を明らかにすることで、**VacA** の標的とした新たな治療法や予防法などの確立を目指し、臨床面での応用も視野に入れている。

Ⅴ. 特殊環境下に居住する住民の腸内細菌叢の解析

ヒト腸管内には膨大な数や種類の微生物が存在し、常在細菌叢と呼ばれる微生物の集団を形成しており、ヒトの健康の維持に重要な役割を担っていることが報告されている。常在細菌叢は各人固有の構成を有しており、生活する環境や摂取する食事などに応じて細菌種の構成が変化することが知られている。近年では、**microbiome** と呼ばれる次世代シーケンサーを用いた解析により、ヒトの腸管内や皮膚に存在する細菌種の構成が明らかになりつつある。

当分野では、特殊環境下（高地や砂漠など）で生活する住民の常在細菌叢を明らかにすることで、環境適応に特徴付けられる細菌種の構成が認められるのかを検証するという計画をしている。また同時に、それら特殊環境下で生活する住民から回収した糞便サンプルを適切に保存する方法の確立も目指す。

4. 11 病害動物学分野

当分野では、主に感染症を媒介する昆虫の生理、生態、進化、分類及び防除について研究を行なっている。特にアフリカと東南アジアを中心に、マラリア原虫を媒介する蚊とデングウイルスの媒介蚊の生態とその防除について研究を行っている。

I. マラリア媒介蚊の防除研究

マラリア媒介蚊の研究は、主に、西ケニアにあるフィールドで実施している。西ケニアでは、住友化学株式会社が開発したオリセットネットを使った新しい蚊帳の効果試験を実施している。オリセットネットを屋根と壁の隙間、および天井に設置することで媒介蚊の数を減らし、子供への感染を減少させることができた。一方、殺虫剤付き蚊帳の普及に伴い、媒介蚊が殺虫剤に対して抵抗性を持ってきたことが明らかになった。そこで、殺虫剤抵抗性を持った蚊に対しても有効なオリセットプラスの効果試験を実施したところ、子供への感染についても減少が見られた。併せて、殺虫剤抵抗性を持った蚊のモニターリングを続けるとともに、媒介蚊の調査と防除試験をマラウイでも展開している。

さらに、蚊帳の使用状況を調べたところ、1枚の蚊帳で3名以上の子供が寝ているケースも多くみられ、蚊帳をシェアする人数が増えると感染リスクが上がり、WHOが推奨している1枚の蚊帳を多くとも2名という基準が妥当であることを実証した。今後とも蚊帳の効果については、追従試験を継続する予定である。

II. 気候予測をもとにした感染症流行早期警戒システムの開発

貧困が顕著な南部アフリカでは、感染症の流行が人々の生活を脅かしているが、近年の気候変動の影響により、これまでと異なった地域や規模で感染症の流行が発生する危険性が高くなると考えられている。

そこで国立研究開発法人日本医療研究開発機構と独立行政法人日本国際協力機構が共同で実施している地球規模課題対応国際科学技術協力プログラムの支援を受け、国立研究開発法人海洋研究開発機構とともに平成25年度より、南アフリカ共和国において「南部アフリカにおける気候予測モデルをもとにした感染症流行の早期警戒システムの構築」に取り組んでいる。

主に気候が流行発生に影響しているマラリアを対象に、気候変動予測モデルに様々な環境因子の影響を加味した感染症流行予測モデルを開発し、2016-17シーズン、および2017-18シーズンの大きな流行の予測に成功している。この成果をもとに、南アフリカ政府では、感染症予報局（仮称）を目指すことになった。

Ⅲ. デングウイルス媒介蚊研究

都市開発及びグローバル化に伴うデング熱の拡大は、アフリカにおいても例外ではない。我々はこれまで、東アフリカを中心に、デング熱媒介蚊であるネッタイシマカの亜種構成の解析および集団遺伝学的解析を行ってきた。その結果、都市型と呼称されデング熱媒介能力が高いと考えられる *Aedes aegypti aegypti* (Aaa) の割合が、流行が頻発している海岸地方で高く、他の地域では森林型と呼称され媒介能力が低い *Ae. aeg. formosus* (Aaf) が優先していた。東アフリカ各地の集団と東南アジアの集団を遺伝的に比較したところ、流行が発生しているモザンビーク北部およびケニア海岸地方集団、さらにモーリタリアの集団がアジアの集団と類似していることが明らかになり、流行地の集団は大陸外から侵入した集団である可能性が示唆された。

デングウイルス媒介蚊の防除としては、蚊の発生場所に限定的に使用できる昆虫成長制御剤 (IGR) をもとにした新しい殺虫剤の効果試験をミャンマーとベトナムで実施している。IGRは幼若ホルモンの成分をもとに作成されているため、昆虫以外の生物に対する影響はほとんどない。さらに、媒介蚊の発生場所は人工容器に限られているため、他の昆虫に対する影響も小さいと考えられる。

4. 12 臨床感染症学分野 (熱研内科)

熱帯地域のみならず、地球規模で共通する健康課題の解決に導く臨床研究を推進している。特に、呼吸器感染症、結核、HIV・エイズ、熱帯感染症等を対象とし、基盤となる病院ベースおよびコミュニティベースの臨床疫学フィールドを立ち上げ、適正な研究デザインに基づき体系的に収集した質・量ともにレベルの高い情報と検体を蓄積させ、臨床とサイエンスをつなぐ学際的研究を実施している。また、当分野の最大の特徴は、長崎大学病院にて呼吸器・感染症内科診療に従事していることにある。平成29年度は、国際医療センター1階内科病棟・結核病棟において、入院患者197名（うち14名は結核患者）を診療する他に、院内の他科病棟より、551症例の感染症内科診療に関するコンサルテーションを受けた。また、長崎大学病院にて経験された *Corynebacterium ulcerans* による重症肺炎を症例報告として Emerging Infectious Disease に発表した (Yasuda, Emerg Infect Dis 2018)。

I 呼吸器感染症に関する研究

2011年9月から2014年8月にかけて、全国4か所（北海道江別市民病院、千葉県亀田総合病院、高知県近森病院、長崎県十善会病院）の地域拠点病院をベースに実施した全国多施設

成人肺炎前向き調査（APSG-J）由来のデータを用いた研究発表が平成29年度もあった。

同調査から得られた呼吸器ウイルスが検出された605名（23.1%）のデータを再解析し、インフルエンザA/B重複感染は、慢性呼吸器疾患患者の肺炎死亡リスクを3倍以上も上昇させるのに対し、RSVなどのパラミクソウイルスは非慢性呼吸器疾患の肺炎患者において死亡リスクを下げることを示した（Katsurada, *MBC Infect Dis* 2017）。肺炎球菌ワクチン血清型特異的な肺炎を診断することは、肺炎球菌ワクチン研究において重要は未解決課題である。本研究では、当教室が開発したナノ流体リアルタイムPCRを用いたハイスループットの喀痰中の肺炎球菌血清型定量的測定法（Sp-qPCR）と、血清型特異的尿中肺炎球菌抗原検査（UAD）を、古典的膨化反応によって判定された血清型を、*Baysian Latent class models*を用いて比較検討し、Sp-qPCR法が最も精度が高いことを示した（Kakiuchi, *J Clin Microbiology* 2018）。システマティックレビューを実施し、肺炎球菌ワクチントライアルにおいてワクチン効果を評価する際、肺炎の診断定義の相違によって、どのような影響を受けるかを論じた（Suzuki, *Epidemiology and Infection* 2018）。海外の呼吸器感染症研究としては、アフガニスタンの地域拠点病院に入院した小児肺炎の高い死亡率（12.1%）と、そのほとんどが入院2日以内の死亡であること、新生児や栄養失調が死亡リスクであり、46.8%の肺炎球菌性肺炎は13価肺炎球菌ワクチンでカバーされることを同国では始めて明らかにした論文を発表した（Zabihullah, *Emerg Infect Dis* 2017）。その他、鈴木が参画したインフルエンザワクチンの国際共同研究由来の論文が高インパクトジャーナルに掲載された（Darvishian, *Lancet Respir Med* 2017）。

Ⅱ HIV・エイズ，結核に関する研究

これまで当分野が共同研究を実施してきた北タイランパン病院および北ベトナムバクマイ病院HIV感染者（各442名，384名）の臨床データと、フィリピンのGeneral Hospitalに通院するHIV感染者314名，名古屋医療センターのHIV感染者365名の臨床データを連結させたデータを解析し，HIV関連感染症発生頻度の多国籍比較を実施した。その結果，感染ルート，年齢・性別，CD4を補正した後も，ニューモシスチス肺炎の発症リスクがベトナムやタイで低く，クリプトコッカスのリスクがタイで高いことが判明，一方，サイトメガロウイルス網膜炎の頻度に国間の差は認めなかったことを示した論文を発表した（Gangcuangco, *Am J Trop Med Hyg* 2017）。また，小児感染症学分野との共同で中部ベトナムにおけるHIV感染者のなかにおける薬剤耐性HIVウイルスの頻度について述べた論文を発表した（Do HT, *Jpn J Infect Dis* 2017）。

我々は先行研究にて，フィリピン国立感染症病院（サンラザロ病院；以下SLH）で実施した後向き研究を実施したが，今回は前向き研究を実施し，同病院の結核患者466名を対

象にTB-PCRに加え、Multiplex-PCRを用いて細菌性呼吸器病原体を検出したところ、約3割の結核患者において細菌感染を合併していること、また、これらの患者群で死亡率が上昇していることが判明した（Shimazaki, Int J Tuberc Lung Dis 2018）。

Ⅲ その他、熱帯感染症等に関する研究

ネパールカトマンズのKanti小児病院新生児集中治療室に入院した135名の新生児を対象に、前向き観察研究を行い、医療資源の限られた病院においても、SNAP IIやSNAP II PEといった評価システムが、新生児死亡の予測に役立つことを示した（Shrestha, Trans R Soc Trop Med Hyg 2017）。鈴木が2014年に参画したリベリアのエボラ疫学調査から得られたデータを、数理モデルを用いて再解析し、隔離病床の増加に加えて、住民の受療行動が流行の終息に影響していることを示した論文が発表された（Funk S, Trans R Soc Lond B Biol Sci 2017）。熱研小児感染症学分野との共同研究で、2001年から2012年にかけて、フィリピンマニラ市内の病院へ入院したレプトスピラ患者数と降雨量の相関を定量的に解析し、2週間のタイムラグで両者が強く相関することを確認するとともに、洪水の関与を示した（Matsushita, PLoS NTD 2018）。2015年にネパールで起きた大地震後に、安全な水、衛生、上下水道が障害されたBhaktapur郡において、被災者となった4,216名の小児を対象に、Viポリサッカライドワクチンによる腸チフスワクチンキャンペーンを、長崎大学・Siddhi記念病院・ネパール小児科学会が共同で実施した。この活動状況を報告した（B.G. Dhoubhadel, Int. J. of Safety and Security Eng., 2017）。

4. 13 小児感染症学分野

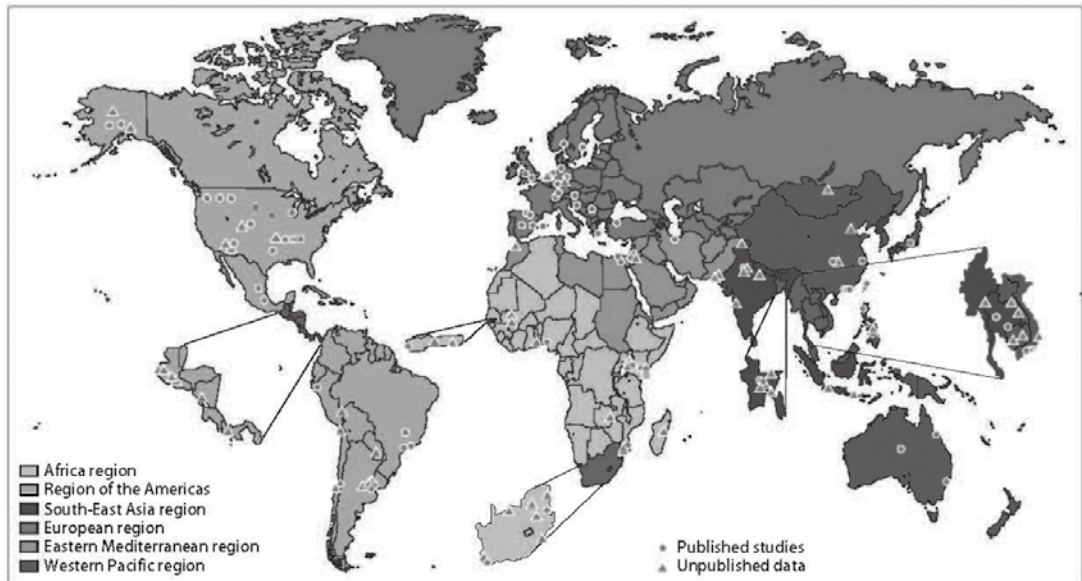
I. 臨床疫学に関する研究（平成29年4月1日～平成30年3月31日）

▶ベトナム・カンホア県ニャチャン住民コホートを用いた小児感染症研究

ベトナム国立衛生疫学研究所（NIHE）との共同研究。2006年、2010年、2015年にカンホア県全住民（人口約35万人）を対象としたセンサスをおこない、人口・社会経済状態の他、急性呼吸器感染症（ARI）、下痢症など小児感染症罹患に関する情報を収集した。また、2007年よりカンホア総合病院においてMultiple PCR法を用いてARI入院患者の病原ウイルスを同定するARIサーベイランスシステムを構築した。これらデータをもとに小児感染症データベースを作成した。平成30年3月31日まで小児急性呼吸器感急性呼吸器感染症の症例10,239人を登録した。

(1) ニャチャン臨床疫学フィールドを活用した小児重症肺炎研究

ニャチャン住民コホート小児重症肺炎研究の結果を利用して、RSVの世界における疾病負荷（5歳未満小児において3300（2060-5320）万回のRSV関連急性下気道疾患エピソード，310（200-520）万回の入院エピソード，59600（47000-74500）の病院での死亡）を発表した（*Lancet*, 2017）。



Lancet. 2017 Sep 2;390(10098):946-958.

(2) ニャチャン臨床疫学フィールドを活用した小児重症肺炎研究

平成27年6月にカンホア総合病院小児科で集中治療ユニット（ICU）に入院した呼吸器疾患症例の登録を開始。平成29年3月までに181症例を登録。その63%が男児であり，およそ半数（56%）が月齢6か月未満であった。平成30年8月までに321症例を登録。その64%が男児，およそ半数（52%）が月齢6か月未満であった。入院時に94%は重症肺炎の症状を示し，入院時SpO₂の平均値は90.2%であった。RSウイルス（27.2%），ライノウイルスA型（29.0%）とエンテロウイルスD68やライノウイルスC型を含む他のエンテロウイルス（35.9%）が同定された主要なウイルスであった。さらにベトナム小児肺炎における病原体（Pneumonia Etiological Agents in Vietnamese Children）をThe 13th Congress of Asian Society for Pediatric Research, Hong Kong,（2017年10月）に発表した。

(3) 先天性風疹症研究: 先天性風疹症候群を持つ小児の感覚器障害と発達遅延

2011～2013年ベトナムの一省で出生した先天性風疹症候群小児を追跡した。2013,

2015年に眼科，自動聴性脳幹反応検査，年齢および発達段階に関する質問票，デンバー式発達スクリーニング検査第二版を施行。自閉症評価として乳幼児自閉症チェックリスト，小児自閉症評定尺度第二版を使用。20人中19人で発達スクリーニング検査の1つ以上の領域に遅れを認め，13人が難聴，7人が眼疾患を合併していた。2015年13人中2人を自閉症と診断。兄の多くが自閉症を含む発達の問題と感覚器障害を合併し早期介入を要する。（*Scientific Reports*. 2017）。

(4) 中部ベトナムにおける HIV 薬剤耐性研究

中部ベトナムにおける HIV 陽性と薬剤耐性率解明するため高リスク群6,016人を調査した結果97人が HIV 陽性（IDUs: n = 63, 3.0%; FSWs: n = 24, 0.9%; and MSM: n = 10, 1.0%）でした。その内40人に薬剤耐性検査を行った結果13人（32.5%）が薬剤耐性 HIV が解明された。（*Jpn J Infect Dis*, 2017）

II. 環境疫学に関する研究

(1) 気候変動の疫学研究

2014年に英ロンドン大学，米ハーバード大学等の研究者とともに世界29か国（日本・英国・米国・フランス・カナダ・中国等）の研究機関を網羅する Multi-Country Multi-City（MCC）ネットワークを構築し，514都市（図1）の最大過去45年にわたる日別死亡者数（計約8000万人），気象データ，大気汚染データを収集しデータベースを構築した。気温と死亡の関連に関する時系列統計解析共同研究を進め，気温の変動によりもたらされる過剰死亡の推定，将来の温暖化に伴う過剰死亡の予測（*Lancet Planetary Health* 2017）をおこなった。また，暑熱の死亡に対する影響が年代とともに減少していることや熱波の健康影響を報告した（*Environ Health Perspect.* 2017）。日本では，東日本大震災後の節電と暑熱関連死亡との関連を報告したほか（*Environ Health Perspect.* 2017），過去40年間で暑熱による死亡リスクが経時的に低減していることを明らかにした（*Environ Health Perspect.* 2018）

(2) 大気汚染の疫学研究

ソウル国立大学（韓国），国立台湾大学（台湾），复旦大学（中国），筑波大学との共同研究により，東アジアにおける黄砂および越境大気汚染の健康影響を明らかにした（韓国 National Research Fund）（*Sci Rep.* 2017）。また橋爪が座長を務める環境省「黄砂の健康影響に関する疫学研究等を行うワーキンググループ」では，長崎県で黄砂ばく露と小児の喘息による夜間救急外来受診の関連を明らかにしたほか，喘息患児の呼吸機能と黄

砂ばく露に関する疫学研究を進めた。さらに長崎市における粒子状大気汚染物質の化学組成と呼吸器疾患との疫学的関連について長崎県環境保健センターとの共同研究を進めた。また、東南アジアにおける越境大気汚染ヘイズの健康影響を明らかにするため、宇宙航空研究開発機構（JAXA）、英ロンドン大学、インドネシア大学等と共同で衛星観測データを用いたモデル開発に関する研究を開始した。



図1 Multi-Country Multi-City（MCC）データに含まれる都市と気温分布
(*Lancet Planetary Health* 2017)

4. 14 臨床開発学分野

臨床開発学分野は世界保健機関WHO決議事項(WHA61.21)である公衆衛生とイノベーションと知的財産権におけるグローバル戦略に応えるべく2011年度より新設された。この決議は実際に公衆衛生上のニーズに見合った医薬品の研究開発を促進することで、特に開発が遅れている発展途上国に偏ってみられる病気に対する医薬品開発を適正な規模で行うようにという趣旨でなされた。また、本分野は日本の文部科学（MEXT）の特別の援助によって設置され、この分野の研究開発プロジェクトや人材育成プログラムが軌道に乗るまで継続して特別の支援を受けることとなった。

客員教授 Kesara Na-Bangchang（タイ）が共同研究者として度々長崎大学を訪れている。

【研究活動】

Research Activities (April 2017-March 2018)

- I. Improved pregnant women's understanding of research information by an enhanced informed consent form: a randomized-controlled study nested in neonatal research.**

The SIDCER ICF significantly improved the understanding of pregnant women, particularly among those with lower level of education. The results of this study has been published in the Arch Dis Child Fetal Neonol Ed 2018;103:F403-F407.

- II. A randomized-controlled study of SIDCER informed consent form and the conventional informed consent form in understanding of research information among parents of Thalassemia children.**

The study was completed, data have been analyzed, paper is being submitted for publication. The results support the findings in other studies in different setting. It suggests that SIDCER ICF methodology is applicable and effective in pediatric research requiring parental permission.

- III. The development of Khod Kamao formulation as oral administration for Anti-cholangiocarcinoma**

The optimal condition of the formulation was established and validated. The application for Patent in Thailand of this formulation was submitted. The MOU between the development Team and the pharmaceutical were signed.

- IV. The Clinical trial phase I of Khod Kamao in Healthy volunteers**

The protocol for phase I has been approved by the Ethics committee in Vachira Hospital, Bangkok. The clinical trial material (CTM) is being produced by the local pharmaceutical in Thailand. The Conduct of Clinical trial phase I has been delayed due to the delay of CTM production. The Phase I is expected to be conducted in 2019.

V. Multi-center survey on what information research participants would like to know in informed consent forms in biomedical research

The final data analysis was completed. The paper has been submitted for publication. The results suggest that the research participants would like to be informed of the information required by ethical guidelines and regulations; however, the importance of each element varied, e.g., risk and benefit associated with research participants were considered to be more important than the general nature or technical details of research.

VI. Attitude towards and Practice of Authorship Determination in Academic and Scientific Publication in Asia: a cross sectional survey

The results have been analyzed, the paper has been submitted for publication.

VII. Documentary research on the *Atractylodes lancea* (Thumb) DC as a promising Candidate for Cholangiocarcinoma Chemotherapeutics

The work was published in Evidence Based Complementary and Alternative Medicine 2017, article ID 5929234, 16 pages. <https://doi.org/10.1155/2017/5929234>

VIII. Documentary research: A Systematic review on the PKPD modeling and its application

The work was completed and submitted for publication.

Teaching Activities (April 2017-March 2018)

I. In collaboration with the Department of Immunogenetics

1. A 3-day Research Ethics Workshop in May 2017
2. A 2-week course on Product Development in August 2017

II. TMGH course

1. A one week course on Conducting Responsible Research (Oct 2017)
2. Teaching one session on WHO/TDR research
3. Supervised Mrs. Renu Bhandari (MSc)

III. Leading program PhD course

1. Mentored Mr. Nattawut
2. Supervised Mr. Teerachat SaeHeng
3. Provided guidance to Mr. Teerachat on the review and analyzing the PBPK Modeling

IV. In collaboration with SIDCER- FERCAP (April 2017- March 2018)

1. A 3-day training course for Ethics committee Surveyors
 - a. Thailand: Bangkok (July 31-Aug5)
 - b. Philippines: Manila (Aug 10-13)
2. Chairing 2 sessions at International FERCAP Conference (Nov 20-21, 2017, Delhi, India)
3. Oral presentation at the FERCAP International Conference (Nov 21, 2017, Delhi, India)

V. In collaboration with Thammasat University under MOU with Nagasaki university

1. Examined 3 PhD proposal defend and 2 final MSc and PhD examination at Thammasat University, Thailand
2. Lectured on Product Development, ethics in research and responsible research for MSc and PhD students at the International Medical School, Thammasat University.
3. Coordinated the operational activities for the development of Herbal Medicinal Plants as anti-cholangiocarcinoma
4. Coordinated for the production of Khod Kamo capsule under Thai GMP for the clinical trial Phase I-II that expected to be carried out in 2019
5. Coordinated with the clinical site selection for Phase I study

Network activities (April 2017-March 2018)

1. Continued to coordinate the network activities for the collaboration of Mahidol, Chulalongkorn and Khon Kaen University, SIDCER and the Middleton Foundation for Ethical studies (MFES) on MFES Global Fellows program. The course is now established and conducted annually with partial supports from MFES and the National Research Council of Thailand.
2. Coordinated with FERCAP and Khon Kaen University on the development of database software for the operation of ethics committees and FERCAP recognition program.

Social activities (April 2017- March 2018)

1. Coordinator for Strategic Initiative for Developing Capacity in Ethical Review (SIDCER)
2. Secretariat team Member for the FERCAP (Forum of Ethical Review Committee in Asia and western Pacific)
3. Served as an Editor for Scientific Journal: Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine, Hindawi Publishing Corporation.
4. Establishing a special issue (as Chief Editor) for the Journal of Evidence-based Complementary and Alternative Medicine on Herbal Medicine & Development: Methodologies, Challenges and Perspectives. This Special Issue intends to identify current issues in herbal medicine research & development in different setting, to examine the methodological challenges, and to discuss the regulatory and ethical issues that arise, both in pre-clinical research and in clinical development. The objective of this special issue was to examine the current state-of-the-art for herbal medicines R&D while identifying appropriate methodologies to address issues and challenges for developing herbal medicine under the acceptable scientific and ethical standards.
5. Served as a member of steering committee for EDCTP program on Ethics since 2016
6. Served as a member of consultants for the National Research Council of Thailand on the establishment of an Accreditation System for Research Ethics Committees in Thailand since 2016
7. Lectured at the Khon Kaen University (July 27-28) on Bioethics

5 附属施設

5. 1 アジア・アフリカ感染症研究施設

5. 1. 1 ケニアプロジェクト拠点

ケニアプロジェクト拠点は、文部科学省の特別教育研究経費（連携融合事業）「新興・再興感染症研究ネットワークの構築」（2005（平成17）年9月）による事業として始まり、特別経費「熱帯病・新興感染症臨床・疫学研究プログラム－アフリカと日本を結ぶ教育研究体制の構築－」（2010（平成22）年4月）、2016（平成28）年4月からは機能強化経費「感染症制御に向けた研究・人材育成の連携基盤の確立－熱帯医学研究拠点からの取り組み－」（全国共同利用・共同実施分）へと事業を引き継いで、現在に至っている。

ケニア中央医学研究所（Kenya Medical Research Institute, KEMRI）内に事務所並びに研究施設を設置しており、熱帯病・グローバルヘルスに関する研究と人材育成、さらには、KEMRIとの共同研究の強化を図っている。

2010年（平成22年）3月には、長崎大学アフリカ教育研究拠点も併設され、熱帯医学研究所以外の本学組織（歯学部、水産学部、工学部および医学部保健学科、医歯薬総合大学院、熱帯医学・グローバルヘルス研究科、多文化社会学部等）からの研究教育を支援する体制が確立した。

ケニアプロジェクト拠点は、下記の三つの機能を基盤に、研究教育活動を展開している。

1. 研究ラボ機能：ナイロビの微生物病研究センター（CMR, KEMRI）、ならびにKEMRI本部敷地内に2017（平成29）年度に設置した汎アフリカ感染症研究Hubにおいて熱帯病に対する研究・教育を実施している。
2. 地域研究機能：ビタ地区、クワレ地区の2か所において、人口静態動態サーベイランスシステム（Health and Demographic Surveillance System：HDSS）を運用し、疫学研究基盤として機能させている。
3. 病原体媒介生物（蚊、貝）のモニタリングシステム機能：ビタ地区において、媒介生物のモニタリング調査を継続している。

【研究活動】

ケニアプロジェクト拠点における研究活動は、ケニア人研究者との共同研究として行われ、KEMRI（ケニア中央医学研究所）でのScientific Ethics Review Unit(SERU)での研究計画の承

認を受け、実施されている以外に、共同研究を行うケニア側研究者の所属先（ケニヤッタ国立病院（KNH）、マセノ大学、National Commission of Science Technology and Innovation (NACOSTI) など）それぞれ、研究計画の承認を受けて研究を実施している。平成29年度に継続中の研究計画は、下記の通り。

KEMRI との研究

No	承認 番号	承認 年	研究タイトル	日本主任研究者	所属
1	1088	2006	Establishment of health and demography surveillance systems in Kwale and Suba districts	金子 聡 M Karama	生態疫学
2	2680	2009	Utility of multiplex technology for disease diagnosis in laboratory and field settings	金子 聡 M Mwau	生態疫学
3	2820	2012	Factors influencing health of children under five years in Kwale County with emphasis on child growth , co-morbidity and potential risks for high morbidity and mortality	金子 聡 V Wanjihia	生態疫学
4	3570	2017	The effect of Nutritional Counselling of Primary caregivers and peer support on the Nutritional status of children under 5 years in Kwale County	金子 聡 V Wanjihia	生態疫学
5	1934	2010	Development of a Concurrent Detection method for a wide range of Neglected Tropical Diseases (NTDs) in Africa	金子 聡 M Mwau	生態疫学
6	3633	2018	Behavioural study of <i>Aedes aegypti aegypti</i> and <i>Aedes aegypti formosus</i> in Kenya	二見恭子 S. Njenga	病害動物
7	3168	2016	Field evaluation of a rapid malaria diagnostic device with a cell microarray chip in western Kenya	皆川昇 S. Njenga	病害動物
8	2084	2011	Polyparasitism and other major infectious diseases in rural settings: Prevalence and surveys in school children in Kwale and Mbita	皆川 昇 S. Njenga	病害動物
9	3092	2015	Spatial and temporal dynamics of <i>Schistosoma mansoni</i> and plasmodium infections in areas around Lake Victoria, Mbita sub-county	皆川 昇 S. Njenga	病害動物
10	1323	2008	The study on the diarrheagenic agents as intestinal and invasive infections in Nairobi and Wstern Kenya	一瀬休生 J. Nyangao	ケニア プロジェ クト拠点
11	2896	2013	Detection and molecular characterization of diarrhea viruses in environmental samples in Kenya	一瀬休生 E Wandera	ケニア プロジェ クト拠点
12	2916	2014	Effects of Kenya comprehensive school health program and health education using participatory learning and action-PLAa approach in primary schools in Mbita sub-county	竹内理恵 S. Njenga	ケニア プロジェ クト拠点
13	3128	2015	Development of diagnostic methods and epidemiological survey of tick-borne viruses in Kenya	井上真吾 K Limbaso	ウイルス 学
14	3579	2017	Monitoring, Surveillance and Control Strategy Evaluation of Selected Neglected Tropical Diseases in Taita Taveta County, Kenya	金子 聡 M Nzou	生態疫学
15	SSC 2084	2011	Polyparasitism and other major infectious diseases in rural settings: Prevalence surveys in school children in Kwale and Mbita, Kenya	濱野真二郎 S. Njenga	寄生虫学
16	SERU 3092	2015	Spatial and temporal dynamics of <i>Schistosoma mansoni</i> and Plasmodium infections in areas around Lake Victoria Mbita sub-county, Kenya	濱野真二郎 S. Njenga	寄生虫学

KNH との研究

1	P609/ 10/ 2014	2014	A feasibility study of malaria elimination on islands in lake Victoria by mass drug administration with ACT and low-dose primaquine and sustained community directed vector control	金子 明 J. Giaka	大阪市立 大学
---	----------------------	------	---	------------------	------------

マセノ大学との研究

1	000492/ 17	2013	Ilaramatak Area Development Program Mother to Mother Project	一瀬休生 C Ouma	ケニア プロジェクト拠点
2	MUERC/ 171/15	2015	Survey on Tsetse Flies and African Trypanosoma in National Parks (NPs) and Game Reserves (GRs) in Kenya.	濱野真二郎 S. Njenga	寄生虫学
3	MSU/ DEPC/ MUERC/ 000056/14	2014	Spatial distribution, relative abundance of host snails and their infection rate with Schistosoma spp. around transmission sites in Mbita region , Western Kenya	皆川昇 濱野真二郎 C. Owma	寄生虫学
4	MSU/ DRPI/ MUERC/ 000171/15	2015	Survey on Tsetse Flies and African trypanosoma in National Parks (NPs) and Game Reserves (GRs) in Kenya	濱野真二郎 C. Owma	寄生虫学

NACOSTI での研究承認

1	P/14/ 9119/ 3490	2014	Molecular Phylogenographical studies for assessing expansion patterns and speciation of the sweet potato veevils and bigheaded ants and their parasites	二見恭子 M.Gikungu	病害動物
---	------------------------	------	---	-------------------	------

【教育活動】

ケニアプロジェクト拠点では、リーディングプログラムの海外研修の目的で学生（2名）を受け入れ、長崎大学THGHのMPH学生（2名）をインターンシップ、フィールド研究のための受け入れを実施し、10月4日から3日間P3 ワークショップも開催した（参加者：受講者、講師合計81名）。

また、ケニアの学部生の実習、修士学生（12名）および博士課程（4名）の研究指導も行った。

5. 1. 2 ベトナムプロジェクト拠点

研究活動

1. ベトナム拠点を活用したデング熱対策に資する研究

(1) デングウイルスの網羅的解析による病原因子の探索と創薬開発への応用

2017年はベトナム北部でデングウイルスの大きな流行が発生し、61,450人のデング疑い患者、6名の死者が報告された。デング患者発生 の 時期も例年より早く5月から認められたため、

ハノイ近郊のHa Nam省とHai Duong省でNIHEと各省の疾病予防センター（PMC）の協力を得て、デング疑い患者からの血液採取を行った。Ha Nam省では533人のデング疑い患者から検体を採取し、リアルタイムPCR診断を行いデングウイルス1型（DENV-1）陽性患者139人、DENV-2陽性患者12人、DENV-3陽性1人、DENV-4陽性1人でジカウイルス（ZIKAV）陽性患者は確認できなかった。今回の大流行はDENV-1が主流の流行であることが判明し、患者血清から直接抽出したデングウイルスRNAについて次世代シーケンサー（NGS）を用いて解析を行い、現在18症例の患者由来のDENV-1の全ゲノム解析データが得られている。

北里研究所からの2271サンプル（第一弾ライブラリー）から7つの抗デング活性物質を確認してBrefeldin Aをはじめとする物質を同定し、一部を論文として発表した。また第二弾化合物として2239サンプルの一次スクリーニングを開始した。

(2) デング熱重症化因子の解明とその臨床応用に関する研究

ベンチェ県総合病院での病院コホート研究の結果、TGF-beta誘導タンパク質、血清トランスアミナーゼ（PLOS ONE投稿中）、血中遊離DNA（PLOS ONE）、マスト細胞メディエーター（PLOS ONE）、及びデング特異的IgE / 総IgE（Archives of Virology印刷中）を、有望なデング熱重症度マーカー候補として同定した。

デングウイルス感染iPS細胞由来樹状細胞を抗原提示細胞として用いて、ナイーブT細胞から抗原特異的な活性化T細胞を誘導するin vitro実験系を樹立した。

(3) デングウイルス媒介蚊の防除介入試験と観測システムの構築

ヒトスジシマカの系統による感染率の違いを調べるために、1日の間に設定温度が25℃から32℃まで変動する場合と18℃から25℃まで変動する場合において長崎系統とハノイ系統にデングウイルスI型を取り込ませたところ、ハノイ系統の方が感染率は高かった。また、ハノイで採集したヒトスジシマカから強い殺虫剤抵抗性をもたらす遺伝子変異が見つかり、それをホモ接合体で有する抵抗性系統を作出して殺虫試験を行ったところ、これまで見つかった遺伝子よりも強い抵抗性をもたらすことが明らかとなった。

(4) 中部ベトナムにおけるデング熱の疾病負荷と予想されるデングワクチンの影響

住民レベルで家族内に行っているデング熱感染率を解明するためニャチャン市 Polyclinic と Tropical Medicine Hospital から dengue NS1 陽性患者151人（index case）を登録し家族411人を追跡調査を行った。100人（24%）の家族内（NS1陽性（10）、IgM陽性（76）、IgG 4倍増加（28））にデング熱感染が確認された。本研究でデング熱index caseから24%の家族に感染した可能性があることを解明した。さらにニャチャン市民内のデングIgG serosurveyを

行った。0-55歳の健康な住民500人を登録して血清デングIgGを調査した。0-5yrグループに17%,6-15yrに45%,16-25yrに80%,26-35yrに83%,36-55yrに90%の住民がIgG陽性になった。この結果は住民レベルでのデング熱負荷を判断するために重要な情報である。

(5) ベトナムにおけるジカ熱の流行とジカ熱感染症による小頭症の疫学調査

2016年10月にベトナム中央高地Dak Lak省でジカウイルス感染による小頭症の症例が確認されたことから、NIHE、TIHE、PMCの協力を得て、血清疫学調査を行った。2016年11月から2017年3月までにKrong Buk地区の7つの村落の住人846人から採血し、ZIKAV特異的IgM-capture ELISAを用いてスクリーニングを行い、陽性検体についてプラーク減数中和試験（PRNT）を用いてジカウイルス、DENV-1,2,3,4、及び、日本脳炎ウイルス（JEV）に対する特異的中和抗体価の測定を行った。9名（1.1%）がZIKAV感染が陽性という結果で、そのうち6名が小頭症患児の同居家族で、2名が親戚であった。現在、846人全ての血清についてZIKAV特異的PRNT（1：40）を用いてスクリーニングを行い、過去の感染状況の確認を行っている。

2. ベトナムにおける下痢症感染症研究

(1) ベトナムにおけるビブリオコレラの包括的な研究

ナムディン省10地点（3ヶ月おきに計4度）、タイビン省のエビ養殖池と河川20地点（夏季に2度）水検体の採取し、環境中の*V. cholerae*のモニタリングならびにゲノム多様性の解析を行った。ナムディン省から収集した環境水40検体中32検体（80.0%）、タイビン省河川水検体の40検体中34検体（85.0%）が*V. cholerae*の*toxR*遺伝子陽性を示し、経年比較が可能なナムディン省の検体で比較すると陽性の頻度は、特に12月、2月はそれぞれ50.0%、70.0%と低かった。また、前年までに分離保存したナムディン省環境水由来24株の全ゲノム配列を取得し、季節変化を含めて環境*V. cholerae*のゲノム動態の解析を進めている。

(2) 北部ベトナムにおけるコホートを用いた下痢症感染症および腸内細菌叢に関する研究

北部ベトナムの小児病院において抗生剤関連下痢症の疫学研究を引き続き実施した。抗生剤投与を要する非下痢症患者群で、抗生剤投与前に採便し腸内細菌叢の解析を行う。抗生剤を投与した後に下痢を起こした群（ケース）と起こさない群（コントロール）とで、腸内細菌叢の比較を行うため、琉球大学、長崎大学、ベトナム国立衛生疫学研究所の倫理委員会より承認を得た。実施研究者間で会議を持ち、検体収集、解析のための準備を進めた。計画の通り、これまで収集した住民基盤下痢症検体約2,000検体の解析を進めた。その結果、同地域では、5才未満の小児において下痢は年間2.5回発生する事が推定された。また、水道水を使

用している家庭に比較して、雨水を使用している家庭に下痢が少ない。水洗式に比べて、溜め込み式トイレを有する家庭で下痢症が多い事が推定された。ロタウイルス、ノロウイルス、下痢原性大腸菌、クロストリジウム・ディフィシル、赤痢アメーバが多く検出され、これらの混合感染例も多く確認された。

(3) ロタウイルスワクチンが下痢症ウイルスによる疾病負担及び流行株に与える影響に関する研究

前年度に引き続き、WHO小児ロタウイルスサーベイランスネットワークによって収集したロタウイルス陽性検体から180検体をランダムに選択し遺伝子型の決定を行った。2017年においてはG3P[8] (34%), G9P[8] (33%), G8P[8] (18%)が主要な流行型であり、前年と比較するとウシロタウイルスに類似するG8P[8]型は減少、G3P[8]型とG9P[8]型は増加していた。また、同じサーベイランスネットワークにより収集した検体からノロウイルスの検出と遺伝子型別の同定を行った。GII.4型 (78%)が流行しており、中でも現在世界的な流行が報告されているGII.Pe/GII.4 Sydney型とGII.P16/GII.4 Sydney型が多いことが明らかになった。

3. ニャチャン住民コホートをを用いた小児呼吸器感染症研究：小児重症肺炎・インフルエンザ・薬剤耐性肺炎球菌

(1) ニャチャン臨床疫学フィールドを活用した小児重症肺炎研究

2015年6月～2017年11月にカンホア総合病院集中治療ユニットに入院した呼吸器疾患小児229症例を登録した。63%が男児、55%が月齢6か月未満であった。入院時に96%は重症肺炎の症状を示し、入院時SpO2平均値は88.3%であった。RSウイルス (27.7%), ライノウイルスA型 (29.0%) とエンテロウイルス (EV) -D68やライノウイルスC型を含む他のEV (35.9%)が同定された主要なウイルスであった。EV-D68は6症例に認めた。死亡例は13例 (5.7%), うち1例にEV-D68を認めた。

(2) ニャチャン臨床疫学フィールドを活用したインフルエンザ研究

平成30年3月17日までにカンホア総合病院に入院した呼吸器疾患小児を906例登録した。そのうち12月4日までに入院した583症例の鼻咽頭ぬぐい液検体で13種類の呼吸器ウイルスに対しPCRを行い、10.3%でインフルエンザウイルス (Flu) Aウイルスを、0.5%でFluBウイルスを同定した。平成29年度にH3N2遺伝子型が流行したことが確認された。NA遺伝子解析の結果薬剤耐性遺伝子は確認されなかった。平成19年～29年にかけて登録した9327例のうちFluA陽性は966 (10.4%), うち906例に特異的PCRを用いてサブタイプ分類し、季節性H1 (4.5%), H3 (40.0%), 新型H1N1 (25.6%), 分類不能 (29.6%)であった。

(3) ニャチャン臨床疫学フィールドを活用した薬剤耐性肺炎球菌研究

肺炎球菌ワクチン（PCV）導入前の薬剤耐性率を解明するため平成27年10月から平成28年9月まで急性小児呼吸器感染症患者から分離した肺炎球菌（*Streptococcal pneumoniae*）316株を serotype と MIC 検査を行った。肺炎球菌の80%は PCV ワクチン serotypes;6A/B (37%), 19F (24%), 23F (12%), 14 (6%), 19A (2%) であることが確認された。薬剤耐性 MIC 検査の結果 serotype 19F の33% と serotype 14 の36% に Imipenem 耐性が確認された。さらに19F の67% に penicillin 耐性, 37% に ampicillin 耐性があった。肺炎球菌全株に macrolide, tetracycline, chloramphenicol, clindamycin, ciprofloxacin に対して高い耐性が確認された。Penicillin と macrolide の薬剤耐性遺伝子, pbp, mefA, ErmB 遺伝子が高率に検出された (83-100%)。

4. デング熱の地域横断的研究

(1) デングウイルスの地域横断的解析

ベトナム, フィリピン, ミャンマー, ネパール, スリランカ, ケニア等においてデング熱疑い患者サンプルの採取を継続し通算で約7,600検体（長崎大学のみ数）となった。また, J-GRID Dengue Virus Data Base に収載されたデングゲノム情報は, 全ゲノム: 215株, 構造蛋白遺伝子: 16,641レコード（うち, 独自株: 582株; 公開データベース (INSDC) からのデータ 16059レコード, トランスクリプトーム解析: (36検体) となった。一部のデータは国立感染症研のデータベース「GenEpid-J」に格納した。また, 全自動のデングウイルス準種解析プログラム (NABESHIMA) の運用を開始した。

(2) デングウイルス媒介蚊のグローバルな移動と変異: 対策のためのデータベース構築

名古屋中部空港に侵入してきたネッタイシマカ成虫（雌）, 及び, その後, 大量に発見された幼虫と成虫の遺伝子を解析したところ, 同じ mtDNA COI 配列のハプロタイプを持っていることが分り繁殖が確認された。ベトナムの集団によくみられる kdr 遺伝子の変異を持っていたことと, マイクロサテライトによる集団遺伝解析の結果から東南アジア起源と推定された。南部アフリカでの調査では, 分布南限は, 過去の報告同様南緯33.6度付近（ポートアルフレッド）であった。

5. 下痢症病原体データベース構築連携研究

(1) 東南アジア地域における下痢症病原体データベース構築連携研究

感染症研と共同で, データベースを活用して第7次コレラパンデミック株の病原因子 VSP-II を網羅的に解析し, 以下の結果を得た。第7次パンデミックコレラ菌は普遍的に VSP-II を有するとされていたが保有率は86%である事が解明された。パンデミック前半には完全型 VSP-

IIがほとんどであったが、後半には短軀型が大半となった。

6. 共同研究

長崎大学とNIHEとの間で、本年度は合計14研究課題が共同研究として実施された。日本国内の大学・研究機関との共同研究も活発に行われており、前述のAMED傘下の元では国立国際医療研究センター及び結核研究所が副拠点を活用した薬剤耐性細菌、エイズ、結核を対象とした臨床・基礎研究を、京都産業大学、鳥取大学が拠点を活用したインフルエンザ研究を、それぞれ前プログラムより引き続いて推進している。平成28年度における京都産業大学と鳥取大学との共同研究の成果は以下の通りである。

(1) ベトナム国内生鳥市場における鳥インフルエンザウイルスの浸潤と変異株出現の監視

国内4地域の生鳥市場のアヒルを対象とした鳥インフルエンザウイルスサーベイランスおよび血清疫学調査を継続実施した。2014年以降に主として認められているclade2.3.4.4 H5亜型高病原性鳥インフルエンザウイルスが依然として流行していることが分かった。分離株にはウイルスのヒトへの適応を示唆する変異は認められず、ヒト型レセプターへの親和性も低かった。一方で、clade 2.3.4.4 ウイルスに対する抗体を有する家禽が増加しており、この選択圧により今後流行株の性状が変化する恐れがあり、引き続き監視が必要である。

(2) ベトナムの野鳥におけるインフルエンザウイルス感染状況の監視に関する研究

生長市場の従業員の鳥インフルエンザへの感染状況についての抗体調査を鳥取大学と共同で実施し、現在ベトナム北部で優勢な亜型であるH5N1、H5N6亜型に対する抗体陽性率は、それぞれ約2%、約1%と低く、以前にベトナム国内で行われた調査と大きな差は見られなかった。また、中国において人への感染報告が多数あるH7N9亜型に対しては、全て陰性であった。以上より、ベトナムの生長市場の従業員への鳥インフルエンザへの感染は、広範には起こっていないと考えられた。

(3) ベトナムにおける鳥インフルエンザウイルスの遺伝子再集合体に関する研究

平成29年度中に新たに分離された鳥インフルエンザウイルスについて参照株の全ゲノムを解読し、データベースに適宜登録している。新たに分離されたH5亜型高病原性鳥インフルエンザウイルスについて、HA遺伝子はclade2.3.4.4内で複数のクラスターを形成したものの、他のウイルスと遺伝子再集合を起こした株は認められず、8分節のゲノムは分離株間で比較的近縁であった。哺乳類への病原性に関与する既知のウイルス側因子は認められず、現状ヒトへの感染リスクは低いと考えられる。

(4) ベトナムの野鳥における鳥インフルエンザウイルスの遺伝子再集合体の伝播に関する研究

野鳥から分離される鳥インフルエンザウイルスの哺乳類への伝播、感染リスクを評価するため、H9N2亜型のプロトタイプ株と近年にベトナムの野鳥から分離されたH9N2亜型株を用

いて、マウスへのウイルス接種実験を行った。その結果のプロトタイプ株は、マウスで継代ができなかったのに対し、近年の野鳥分離株は、マウスで継代が可能であり、さらに、ウイルスが継代によりマウスに適応し、増殖性が高まった。以上より、近年の野鳥から分離株は、哺乳類に対しての感染性及び適応性が、高いことが示唆された。

5. 2 熱帯医学ミュージアム

2017年4月より奥村順子が着任した。前任者による地域へ開かれたミュージアムを目指した活動を引き継ぎ、その充実を図った。また、情報技術支援（IT）室としての機能を強化するとともに費用を削減し、費用対効果の増大に努めた。この他、奥村はラオスやギニアにおいてフィールド調査を実施し研究成果をあげている。

I. 熱帯医学に関する啓発活動

熱帯医学研究所における研究活動を中心に熱帯医学に関する地域住民の理解醸成に努め、講義および熱帯医学ミュージアムの展示内容に関する解説の充実を図った。2017年度の来場者数は初めて千名を超え、ことに中・高生の来場は増えている。また、海外からの見学者数も伸びており、英語による講義や解説も提供している。

この他に夏休みこどもイベントとしてアニサキスに関する実験を含むイベントを近隣の小学生を対象に実施するなど、低年齢層にとっても科学に親しみやすく、好奇心を刺激する活動を行っている。

II. 情報技術支援（IT）活動

2017年後半より次期5年間（2018年度～2022年度）の基盤整備事業に取り組んだ。過去5年間（2013年度～2017年度）の基盤整備事業に比し、2200万円以上の予算削減に成功し、本事業の費用対効果は格段に上がった。サーバーなどの重要機器を文教のICTメディア基盤センターの管理下に置くことで、停電時のサーバー管理の安心および安全度を上げることができた。

また、PCおよびその周辺機器の技術革新が急速に進む中、講演会演者や講義担当者が使用する機器が多様化しており、その対応が複雑化している。予算が限られてはいるものの附属機器およびソフトウェアの準備など、使用環境整備の充実化を図っている。

Ⅲ. 研究活動

奥村は、感染症を人間の生活を取り巻く「環境：Eco-system」の問題として捉え、分野横断的に影響要因を明らかにし、人々の健康推進に資する研究を行ってきた。本年度の主なテーマは、2点で、「少数民族を取り巻く急速な社会環境変化と疾病罹患（ラオス）」と「エボラウイルス病大流行時の住民啓発活動が人々の感染症罹患時の対応に及ぼす影響（ギニア）」である。前者については、国際会議における口頭発表と基調講演を行い、国際誌に投稿準備中である。また、後者についても目下、解析を行っており、その結果を国際誌に投稿する予定である。

5. 3 共同研究室

共同研究室は研究所の大型の研究機器等の効率的な管理と運用、および、研究所で行われている研究一般を支援することを目的としている。研究所内の各分野への支援に加えて、文部科学大臣から認定された共同利用・共同研究拠点「熱帯医学研究拠点」の国内設備として所外からの利用にも対応している。

5. 3. 1 分子細胞生物学ユニット

分子細胞生物学ユニットは、生体分子解析及び細胞機能解析に関する教育研究にその施設等を供するとともに、熱帯医学研究における研究に対して総合的な支援を行う事により、教育・研究の進展に資することを目的としている。

共同利用できる機器には、シーケンサーなどの遺伝子解析用機器、フローサイトメーターなどの細胞機能解析用機器、蛍光発光画像撮影装置などのイメージング解析用機器などに加えて、研究一般を支援する設備として、超純水作製装置、凍結乾燥機、細胞破碎装置、マイクロ天秤装置、液体窒素試料保管庫、ドラフトチャンバー、低温室、暗室などが整備されている。分子細胞生物学ユニットでは、これらの機器の管理・利用補助を行うと共に、共同研究の機器を用いて実験を行う研究者に対し、テクニカルセミナーや利用者講習会などを通して、最新情報・技術の提供を行っている。

機器リスト

共同機器	メーカー名・機種名・型番
キャピラリーシーケンサー	ABI 3730 Genetic Analyzer (48 capillaries) ABI 3130xl Genetic Analyzer (16 capillaries)
蛍光ビーズアレイ解析機	Luminex LABScan™100 マイクロビーズアレイシステム
マルチラベルプレートリーダー	Perkin Elmer ARVO MX-1420 蛍光発光測定用プレートリーダー EnVision 蛍光発光測定用プレートリーダー
フローサイトメーター	Becton Dickinson FACSVerser Beckman Coulter Gallios
高感度ノンラベル・ゲノム定量解析システム リアルタイムPCR	SEQUENOM MassARRAY®Nanodispenser Roche Diagnostics Light Cycler®480II ABI QuantStudio 7 Flex real time PCR
サーマルサイクラー	Biometra TI Thermal cycler (384 well) ABI GeneAmp 9700 (96well)
DNAバイオアナライザー	Agilent 2100 Bioanalyzer
ルミノイメージアナライザー	富士フイルム LAS-4000EPUV mini
液体クロマトグラフ質量分析装置	日立ハイテクノロジーズ Nano Frontier eLD
DNA, RNA 自動電気泳動装置	QIAGEN QIAxcel Advanced
オールインワンタイプ蛍光顕微鏡	Keyence BZ8000
細胞破碎装置	大岳製作所 フレンチプレス
サンプル密閉式超音波破碎装置	コスモバイオ BIORAPUTOR
天秤	Mettler Toledo ミクロ天秤
分光光度計	日立ハイテクノロジーズ U3900H

* 機器の使用には、登録が必要です。機器の一部には、別途誓約書が必要な場合があります。

5. 3. 2 光学顕微鏡ユニット

光学的手法を用いて分子局在や形態の変化を静的・動的に解析することにより、病原体の細胞への感染成立機構等を明らかにし、治療・予防法の開発に資する研究を支援している。平成27年4月に開設された長崎大学ニコン感染症イメージング・コアラボラトリーの管理・利用補助を担当する。共同利用機器として、共焦点レーザー/蛍光顕微鏡（Confocal A1R, Nikon）、イメージングフローサイトメーター（ImageStream Mark II, MERCK）、共焦点レーザー/超解像度顕微鏡（LSM780/ELYRA PS1, ZEISS）、バーチャルスライドスキャナ（NanoZoomerRS 2.0RS, 浜松ホトニクス）が使用可能である。

ホームページ: <http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/microscope/kiki.html>

5. 3. 3 電子顕微鏡ユニット

電子顕微鏡室では、感染症を引き起こすあらゆる病原体の微細構造解析のみならず、免疫組織学的手法を含む新しい技法を取り入れ、電子顕微鏡を駆使して病原体と宿主との相互作用を超高倍率で直接観察し、その解析を行っている。現在の主な機器は透過および走査電子顕微鏡、超ミクロトーム、高圧急速凍結装置、真空蒸着装置、オスミウムプラズマコーター、超音波固定装置などで、広範な電子顕微鏡レベルでの研究を行っている。

I. 電子顕微鏡を用いた主な共同研究

- ウイルス感染細胞の超微細形態解析（ウイルス学分野）
- 精製ウイルスのネガティブ染色法による解析（ウイルス学分野，ウプサラ大学）
- バベシア原虫の超微細形態解析（原虫学分野）
- サルマラリア原虫及び感染赤血球の三次元微細構造解析（原虫学分野，生理学研究所）
- サルマラリア原虫及び感染赤血球の免疫電顕法による局在解析（原虫学分野，獨協医科大学）
- 水頭症患者の鼻腔粘膜の超微細形態解析（熱研内科，長崎大学）
- フォルニカータ生物のミトコンドリア関連オルガネラの免疫電顕法による局在解析（筑波大学）

上記のように、透過型電子顕微鏡を用いたネガティブ染色，試料ブロックの薄切の観察や免疫染色による局在解析が主な作業となっている。

II. 電子顕微鏡室での研究

サルマラリア原虫 *Plasmodium knowlesi* は東南アジアに生息するマカク属サルを自然宿主とするが，近年，同地域内でヒトにも自然感染することが次々と報告され，現在では4種のヒトマラリア原虫に続く第5番目のヒトマラリア原虫として認識されている。さらに *P. knowlesi* 感染による死亡例では臓器内血管において感染赤血球による塞栓像が観察され，ヒトにおけるサルマラリア重症化機序に感染赤血球の血管内皮細胞への接着が関与すると考えられる。

電子顕微鏡室ではヒト血管内皮細胞への接着に関わる *P. knowlesi* 分子を同定し，感染赤血球やヒト血管内皮細胞における局在や接着機構を解明することを目的として，分子生物学的及び超微細形態学的研究を行っている。

5. 4 熱研生物資源室 (英語表記 NEKKEN Bio-Resource Center : NBRC)

熱帯医学研究所は平成14年よりナショナルバイオリソースプロジェクト事業（以下、NBRP事業）に参画し、病原原虫リソースの収集・保存と提供を担当している。NBRP事業は、平成26年度まで文部科学省研究振興局ライフサイエンス課の研究開発施設共用等促進補助金を経費に充てられていたが、平成27年度から日本医療研究開発機構（AMED）に移管された。これをうけて、本研究所直下のプロジェクト業務としてNBRP事業に取り組むこととし、同年に熱研生物資源室を開設した。マラリア原虫，トリパノソーマ原虫，リーシュマニア原虫，腸管寄生アメーバ，トリコモナス原虫，ランブル鞭毛虫などを主なリソースとして扱い，以下の活動等を通じて，学内外における原虫感染症と病原原虫の研究と教育を支援している。

(1) 主な活動内容

- ① 病原原虫株の収集・寄託受け入れ
- ② 病原原虫株の保管
- ③ 保管原虫株の品質管理および原虫由来試料や標本の作製
- ④ 病原原虫株や原虫由来試料等の提供
- ⑤ 国内の関連機関保有原虫株情報等の発信

(2) 平成29年度事業実績

保存原虫株数：793株

ホームページ公開株数：335株

原虫株提供数：15件

(3) 学会，広報，アウトリーチ活動

- ① 実物つきパネル展示「バイオリソース勢ぞろい」（平成29年12月6～8日，神戸国際展示場，国立遺伝学研究所NBRP広報室主催）
- ② 第87回日本寄生虫学会大会（平成30年3月17～18日，国立国際医療研究センター）

5. 5 顧みられない熱帯病イノベーションセンター (NTD innovation Center)

世界の人口の8割を占める途上国や熱帯地域の貧困層に広がる寄生虫疾患等の慢性感染症対策には公的な支援の枠組みが必要であり、それらの感染症は、総称して「顧みられない熱帯病 (NTDs)」と呼ばれている。これらの感染症は、貧困層を中心に問題となっていることから、新薬・診断薬の開発の市場価値が低いと見なされ、民間企業がその開発に二の足を踏んでいる。そこで所内にこの領域の研究活動をさらに促進するメカニズムとして、産学官連携を主体とするNTD制御のための医薬品開発研究推進するためのセンターを2016年度より開設した。

【活動内容】

1. 2017年4月18日ジュネーブで開催されたNTD Summitに出席し、世界のNTD関連団体等と長崎とのネットワーク構築およびそのための情報収集を行った。(金子)
2. 2017年12月一盛和世シニアアドバイザー就任。
3. 2017年12月14日(木) UHCforum2018 公式サイドイベントにてNTDネットワークに関するNTDs Japan advocacy event – “Public Debate on NTDs in Japan” – の開催。
4. 2018年2月20日～22日 Uniting Combat to NTDsがドイツで開催したNTD advocacy planning meeting に出席 (金子, 一盛)

【トレーニングコース】

1. 2017年5月16日(火)–18日(木) 研究倫理の国際研修コース (ETHICS) (3日間) の実施。
2. 2017年8月22日(火)–9月2日(土) 「世界保健ニーズに応える医薬品開発研究ディプロマコース (PRD)」(10日間) の実施。

【実施セミナー】

1. 「WHOにおける意思決定プロセス」
講師：一盛和世先生 (フィラリアNTD室 ディレクター)
日時：2018年8月2日(木) 16:00～17:00
2. “The Application of Nanotechnology to Drug Delivery –Emerging success stories, challenges and opportunities-”
講師：Prof. Andrew Owen (University of Liverpool)

日時：2017年8月19日(土) 17:00～18:00

3. “Neglected Tropical Diseases: Progress, Opportunities, Innovation and Challenge in the Era of Universal Health Coverage”

講師：Prof. David Molyneux (Senior Prof. Liverpool School of Tropical Medicine)

日時：2017年12月15日(金) 16:00～17:00

4. 「ナノポアシークエンサーの最前線」

講師：宮本 真理氏 (株オックスフォード・ナノポアテクノロジー)

日時：2018年1月26日(金) 17:00～18:00

5. “CAM, Complementary and Alternative Medicine -focusing on YNSA, Yamamoto New Scalp Acupuncture”

講師：小出 宏先生 (YNS往診専門医師)

日時：2018年2月19日(月) 16:30～17:30

5. 6 フィラリア NTD 室

現在、熱帯病の多くはその根絶、制圧に向けて対策が進められている。特にリンパ系フィラリア症 (LF) はWHOの率いる世界制圧プログラムのもと、蔓延国政府、ドナー、NGO、製薬会社、大学・研究機関らによるグローバルレベルでの産官民学連携パートナーシップによって、人類の一大事業として、着実に制圧目標へと歩みを進めている。日本にもかつてLFが蔓延していた時代があったが、1970年代に根絶することに成功した。このような経験を持つ日本には、地球人としてグローバルな視野を持てる人材を育成し、世界と協働して制圧プログラムに貢献していくことが求められている。

この目的を達成するための拠点としてフィラリアNTD室は次の4点において活動している。

【活動内容】

1. 情報データの収集および管理

LF、NTDに関する情報およびデータを世界中から収集管理

熱帯病対策に関する国内外会議・ミッションへの参加貢献

2. 国内外ネットワークの構築

ネットワークの構築, 運営

パートナーシップへの日本の参加促進

3. 日本国内向け情報発信, 啓蒙活動

熱帯病対策に関する講演, 集会, メディア

一般市民に向けた情報の発信, 資料の展示

4. 熱帯病分野の人材育成

大学生や専門家向けの講義, アドバイス

関連資料, 教材の作成

各項目に従い平成29年度の活動について報告する。

1. 情報データの収集および管理

・ PacELF endgame project プロジェクト

日本熱帯医学会誌「Tropical Medicine and Health」に〈特集号〉「Elimination of Lymphatic Filariasis in the Pacific - A PacELF success」として論文4編, Overview, Bibliographyを発表。
PacELF Way book No.2 出版に向けてプロジェクト進行中。

・ WHO (AFRO): The 6th Meeting of the Regional Programme Review Group for Preventive Chemotherapy Neglected Tropical Diseases プログラム評価委員として出席, 10-12 April, Dakar, Senegal

・ 平成29年度第一回日本熱帯医学会理事会 出席, 6/5, 長崎大学熱帯医学研究所, 長崎

・ 研究集会「All Japan Mosquito Symposium」開催, 6/10, 長崎大学熱帯医学研究所, 長崎

・ WHO (WPRO): The Seventeenth Meeting of the Regional Programme Review Group on Neglected Tropical Diseases in the Western Pacific 出席, 15-16 June, Siem Reap, Cambodia

・ WHO (SEARO): Meeting of National Programme Managers for Lymphatic Filariasis and Soil Transmitted Helminthiasis 出席, 20-21 June, Yangon, Myanmar

・ WHO (SEARO): Meeting of the SEA Regional Programme Review Group 出席, 22-23 June, Yangon, Myanmar

・ 20年にわたる WHO 太平洋地域リンパ系フィラリア症対策に関する資料を James Cook University へ寄贈。寄贈記念式典に参加, 11 August, Australia

・ Seventh Meeting of the Preventive Chemotherapy Neglected Tropical Diseases Regional Programme Review Group プログラム評価委員として出席, 16-18 October, Berlin,

Germany

- ・ COR-NTD Meeting 2017 出席, 3-4 November, Baltimore, USA
- ・ 平成29年度第二回日本熱帯医学会理事会 出席, 11/23, 東京大学, 東京
- ・ グローバルヘルス合同学会2017シンポジウム「太平洋諸島リンパ系フィラリア症制圧 (PacELF) : 疾病制圧事業成功の要因とカギを探る」開催 座長として参加, 11/25, 東京大学, 東京
- ・ グローバルヘルス合同学会2017シンポジウム「日本のNTD研究事業－その目的と成果」座長として参加, 11/26, 東京大学, 東京
- ・ WHO (WPRO): Binational planning between American Samoa and Samoa to accelerate elimination of lymphatic filariasis 出席, 29 November-1 December, Pago Pago, American Samoa
- ・ WHO (WPRO): サモアおよびアメリカンサモアにおけるリンパ系フィラリア症制圧プログラム完了までのアクションプランの作成に従事, 4-6 December, Apia, Samoa
- ・ 東京都蚊媒介感染症対策会議委員に就任

2. 国内外ネットワークの構築

- ・ Uniting to Combat Neglected Tropical Diseases: The 1st Neglected Tropical Diseases Summit 出席, 19-22 April, Geneva, Switzerland
- ・ UHC Forum 2017 Side event 「Neglected Tropical Diseases (NTDs): Driving progress towards UHC」組織委員会委員長, 12/15, 東京プリンスホテル, 東京
- ・ JAG NTD 設立に関する意見交換のための面談, 1/29, 東京
- ・ Uniting to Combat Neglected Tropical Diseases: Advocacy Planning Meeting 出席, 20-22 February, Berlin, Germany
- ・ James Cook University ・ 長崎大学NTDs共同研究に関する意見交換会議 出席, 9 March, JCU, Australia
- ・ JAG NTD 設立準備のための会議 出席, 3/15, 東京
- ・ JICA/JOCV感染症対策AGアドバイザー・グループ参加
- ・ WHO アフリカ地域LF&NTD プログラム評価委員として活動
- ・ 長崎大学熱帯医学研究所NTDiセンター・シニアアドバイザーとして活動

3. 日本国内向け情報発信, 啓蒙活動

- ・ 世界モスキートデイ2017イベントー蚊と蚊がもたらす病気について知ろうー「大人の蚊学講座」開催, 6/10, 長崎大学

- ・世界モスキートデイ2017イベント－昼の蚊と夜の蚊－「親子蚊学入門」開催, 7/28, 長崎大学
- ・世界モスキートデイ2017イベント－昼の蚊と夜の蚊－「子ども蚊学教室」開催, 8/4, 長崎大学
- ・「蚊のはなし」発刊(朝倉書店) 第6章蚊のうつす病気6.1マラリア6.2フィラリア症 執筆, 8/20
- ・国際保健医療学会誌「**Journal of International Health**」(33巻1号)に論文発表
「世界リンパ系フィラリア症制圧計画(Global Programme to Eliminate Lymphatic Filariasis : GPELF) の政策の枠組み～ゴールの設定と道筋～」
- ・ランチタイムセミナー開催, 毎月第3金曜日, 長崎大学, 長崎

4. 熱帯病分野の人材育成

- ・長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科熱帯医学コース「**WHO NTD Program**」, 5/16, 長崎大学
- ・長崎大学熱帯医学研究所熱帯医学研修課程「**WHO 顧みられない熱帯病対策**」, 5/18, 長崎大学
- ・「おわりのはじまり－リンパ系フィラリア症制圧 日本から世界へ－」DVD 出演, 監修
- ・一盛和世フィラリアサロン(全4回)開催, 長崎大学
第一回 「リンパ系フィラリア症」, 5/15
第二回 「英国」, 5/16
第三回 「アフリカ」, 5/16
第四回 「太平洋」, 5/17
- ・長崎大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程教育リーディングプログラム「**Leadership Development**」, 10/23-24, 長崎大学
- ・グローバルヘルス合同学会2017自由集会「**WHO での意思決定に関するプロセスについて**」開催, 11/26, 東京大学, 東京

5. 7 人道支援調整室 (Office of Coordination for Humanitarian Affairs)

以下の趣旨, 目的のもと, 熱帯医学研究所人道支援調整室(以下に概要)が2016年に設置された。初代室長は国際保健学分野の山本が兼任することとなった。設置後, 熱帯医学研究

所からは、2016年4月に発生した熊本地震後の人道支援ニーズ把握及び支援のため人員を派遣し、またアフリカコンゴ民主共和国で流行が見られた黄熱病へ国際緊急援助隊感染症チームの一員として人員を派遣した。現在、JICA国際緊急援助隊に感染症対策チームが設立され、その支援委員会へ委員として森田教授が、公衆衛生対応班班長として山本がその任務にあっている。

(趣旨)

熱帯医学研究所内に熱帯医学研究所人道支援調整室を置く。

(目的)

人道支援室は、主として熱帯地域、開発途上国、あるいは我が国を含むその他の国、地域において発生した大規模災害（自然災害、人為的災害等）に対して、緊急支援活動を行うとともに、支援活動に携わる人材の育成、研究、国内外ネットワークの拠点となることを目的とする。

(概要)

1. 人道支援調整室は熱研内に設置する。
2. 1名の兼任室長（教授）、その下に事務局を置く。
3. 上記目的に関する、情報収集、発信、国内及び国際的ネットワークの構築、研究等を行うと同時に、機動的に人的貢献を行う。

(背景)

長崎大学熱帯医学研究所は、2010年のハイチ大地震、及び同年のハイチのコレラ大流行、2011年の東日本大震災、2014年の西アフリカにおけるエボラ出血熱の流行、2015年のネパール大地震等に、所員を派遣しており、人道支援分野における国内リーディング機関の一つとなっている。

独立行政法人国際協力機構（JICA）は、2014年に西アフリカで発生したエボラ出血熱の発生等を受け、感染症対策チームの設立を2015年10月に決定した。国際緊急援助隊感染症対策チーム（注1）の国内支援には、東北大学、国立感染症研究所、国立国際医療研究センターと共に、長崎大学が積極的に参加することとなった。

熱帯医学研究所人道支援調整室を置く要請が高まっている。

（注1）大規模自然災害に対して国際緊急援助を行うにあたって、JICAは、国際緊急援助隊派遣、緊急援助物資の供与、緊急無償資金供与の3つのスキームを有している。国際緊急援助隊は、「国際緊急援助隊の派遣に関する法律（昭和62年公布・施行）」にもとづき派遣される。緊急援助隊は、救助チーム、医療チーム、専門家チーム、自衛隊から構成されていたが、そこに感染症対策チームが加わった。

6 特別事業費による事業

6. 1 熱帯医学研修課程

平成30年度（第41回）熱帯医学研修課程は、平成30年4月2日から6月29日まで3ヵ月間にわたり21名の参加者で実施された。受講者の職種内訳は医師7名、看護師11名（医師・看護師の免許を有するもの1名）、薬剤師2名、その他1名（女性14名、男性7名）であり、昭和53年度の第1回から平成28年度までの修了生の総数は527名となった。

I. カリキュラム

本年度カリキュラムも前年度同様、分野横断的な理解を促す目的で、熱帯医学分野（総論・各論、実習、臨床歴学）と実務的分野（国際保健・国際協力等の専門家による講義）を織り交ぜながら配置した。

今年度の特徴として

1) 全体の講義時間数の減少

講義数が年々増加し時間割が多忙になりすぎていたことを受け、見直しを行い、後半の授業コマ数を減らし、自習時間の充実を図る時間割を作成した。

2) シラバスの充実

今年度も前年度と同様の編集方針で作成した。各講義のポイントを見開き左ページに置き、右ページに中心的スライド4～6枚を配するレイアウトは研修生の理解や予習や復習を助けた。また、講師紹介欄の充実を図り講師と研修生の交流をより可能にする構成とした。

3) 講義録画システムによる復習

グローバルヘルス総合研究棟の講義室には、講義録画システムが設置され、ほぼ全講義の収録を行っている。平成28年5月から導入した視聴ログインシステム（Argos view system）により、研修生がその復習に録画視聴を積極的に活用していることが確認できた。

II. 試験

平成17年度（第28回）より導入した学科試験を今年度も実施した。所内の各分野に4-6問の作成を依頼し、計50問の選択試験問題を出題した。全体の平均得点は67.0点であった。

Ⅲ. 研修生による評価と全体まとめ

全講義及び試験終了後の6月28日に研修課程研修生による評価をワークショップ形式で行った。カリキュラム構成、授業及び実習内容、時間数、難易度、就学支援体制等が、その多くは良好な評価であった。また、前年秋に開講した熱帯医学グローバルヘルス研究科の修士課程学生（30名）と教室また自習室などを共有する機会が多く、それぞれの経験を共有し、刺激しあう場面が多く見ることができた。

Ⅳ. フォローアップ研修「第8回リフレッシュャー講座」開講

同研修課程修了者の再研修を目的に、第8回リフレッシュャー講座を、平成30年12月8日と9日に、東京都のミカサエコーフォーラムにて開催した（受講65名）。熱研内部講師9名によるそれぞれ1時間の各分野のアップデート講義が行われた。今回も前年と同様、短期間で定員を越す応募があり、熱帯医学の学習の需要が高いことが伺われた。

（文責：教育室 阪下健太郎）

7 外部資金による研究

7. 1 文部科学省科学研究費補助金（平成29年度）

研究種目	職名・研究者名	研究経費 (千円)	間接経費 (千円)	研 究 課 題	備 考
基盤研究(A)	教 授・金 子 修	12,600	3,780	三日熱マラリア原虫の休眠現象とその多様性	27～29年度
基盤研究(A)	教 授・平 山 謙 二	9,300	2,790	慢性シャーガス病の合併症早期予測因子の探索ーボリビアコホート研究	28～32年度
基盤研究(A)	教 授・濱 野 真二郎	7,300	2,190	ヴィクトリア湖湖畔における住血吸虫伝搬ダイナミクスと環境モニタリング	29～32年度
基盤研究(A)	教 授・金 子 聰	6,100	1,830	アフリカにおける地域特性を考慮した乳幼児の健康改善モデル構築に関する疫学研究	25～29年度
基盤研究(A)	教 授・有 吉 紅 也	4,400	1,320	ベトナム中部に確立した出生コホートの拡充による小児重症疾患の総合的なリスク評価	25～29年度
基盤研究(B)	講 師・菊 池 三穂子	3,100	930	フィリピン在住血吸虫性肝線維化症ハイリスク集団における早期診断及び予防法の確立	27～30年度
基盤研究(B)	准教授・和 田 崇 之	1,600	480	アジア・オセアニアにおける病原性抗酸菌の浸淫度調査	27～30年度
基盤研究(B)	准教授・藤 井 仁 人	2,200	660	マルチプレックス法と流行地住民コホートを用いたマラリア・ワクチン候補抗原の発掘	27～29年度
基盤研究(B)	教 授・一 瀬 休 生	2,600	780	ロタウイルス感染症の疫学と感染モード解明に関する研究	27～29年度
基盤研究(B)	准教授・早 坂 大 輔	3,100	930	マウスモデルを用いたウイルス感染病態の分子イメージングダイナミクス解析	28～31年度
基盤研究(B)	教 授・金 子 修	4,000	1,200	マラリア原虫の赤血球侵入期におけるシグナルカスケード	28～30年度
基盤研究(B)	助 教・麻 田 正 仁	4,300	1,290	タイにおけるスイギュウマラリアの分子疫学並びにその病原性解析	28～30年度
基盤研究(B)	講 師・上 村 春 樹	4,900	1,470	熱帯熱マラリアに対するACTの有効性と薬剤耐性関連遺伝子多型の解析	28～30年度
基盤研究(B)	准教授・ NGUYEN HUY TIEN	5,000	1,500	Effects and Safety of Oral Mast Cells Stabilization Therapy in Early Dengue Patients: A Randomized, Placebo-Controlled Trial	28～30年度
基盤研究(B)	教 授・平 山 謙 二	5,300	1,590	HLA結合抗原ペプチド変異はヒトマラリア感染免疫を変化させるか	29～31年度
基盤研究(B)	准教授・和 田 崇 之	5,800	1,740	患者地理情報と病原体遺伝子情報を駆使した結核伝播経路追跡	29～31年度

研究種目	職名・研究者名	研究経費 (千円)	間接経費 (千円)	研 究 課 題	備 考
基盤研究(B)	教 授・山 本 太 郎	3,800	1,140	中国及びネパール高地における適応と肥満、糖尿病とヒト腸内細菌多様性に関する研究	29～32年度
基盤研究(B)	准教授・早 坂 大 輔	4,200	1,260	ケニア共和国におけるマダニ媒介感染症の疫学調査	29～32年度
基盤研究(B)	教 授・奥 村 順 子	2,600	780	ラオス中南部における少数民族の健康希求行動は乳児死亡の地域間格差をもたらすか	25～29年度
基盤研究(C)	助 教・坂 口 美亜子	1,200	360	サルマラリア原虫が感染したヒト赤血球の微細構造と接着能の解析	27～29年度
基盤研究(C)	講 師・菊 池 三穂子	1,100	330	マイクロRNA発現動態を指標とした住血吸虫生肝線維化症病態の解明	27～29年度
基盤研究(C)	助 教・矢 幡 一 英	1,000	300	マラリア原虫における赤血球密着接合分子の機能解析	27～29年度
基盤研究(C)	助 教・竹 村 太地郎	1,200	360	CRISPRの解析を通じたV.cholerae病原株出現と拡散機構の解明	27～29年度
基盤研究(C)	助 教・鈴 木 基	1,100	330	乳幼児期の呼吸器感染症にみられる病原体干渉の解明：ベトナム中南部出生コホート研究	27～29年度
基盤研究(C)	助 教・竹 内 理 恵	800	240	途上国における健康教育の一般教科への統合内容分析－衛生教育への宗教の影響	28～30年度
基盤研究(C)	助 教・麻 田 正 仁	1,200	360	バベシア原虫メロゾイト滑走運動機構の解明	28～30年度
基盤研究(C)	助 教・加 藤 健太郎	1,600	480	腸管寄生原虫の病原性発現機構の解明	28～30年度
基盤研究(C)	助 教・中 野 政 之	1,100	330	ピロリ菌VacAの宿主受容体を基盤とした病原メカニズムの解析	28～30年度
基盤研究(C)	客員研究員・森 正彦	1,200	360	アジア発の抗HIV免疫情報同定及び国際HIVワクチン開発への応用	28～30年度
基盤研究(C)	准教授・森 本 浩之輔	1,100	330	肺胞マクロファージの小胞体ストレスは肺線維化の治療ターゲットとなりうるか	28～30年度
基盤研究(C)	助 教・市 川 智 生	1,100	330	戦前日本の結核に関する歴史疫学研究―罹患情報に基づく蔓延状況の再現―	29～31年度
若手研究(B)	助 教・山 下 嘉 郎	800	240	IGRAsを越える次世代結核診断法確立へ―結核特異的CD4陽性T細胞の臨床研究	27～29年度
若手研究(B)	助 教・園 田 梨 沙	1,500	450	腸赤痢アメーバ症の慢性化と重症化におけるグループ2自然リンパ球の機能解明	28～29年度
若手研究(B)	助 教・KIM YOONHEE	700	210	Global Perspectives of Seasonal Changes of Suicide and Associations between Suicide and Weather	28～30年度

研究種目	職名・研究者名	研究経費 (千円)	間接経費 (千円)	研 究 課 題	備 考
若手研究(B)	准教授・ Culleton Richard Lei	1,200	360	Stimulating the host innate immune response to fight the early stages of malaria infection	28～29年度
若手研究(B)	助 教・黒 崎 陽 平	1,200	360	西アフリカにおけるエボラウイルス病疑似症例の感染疫学研究	28～29年度
若手研究(B)	助 教・浦 田 秀 造	1,600	480	ウイルス粒子形成・出芽機構の多様性解析	29～30年度
若手研究(B)	助 教・樋 泉 道 子	2,400	720	ベトナムにおける百日咳発生パターンと乳児への感染リスク	29～31年度
若手研究(B)	助 教・阿 部 遥	1,600	480	アフリカにおけるウイルス性感染症の迅速検出法開発と大規模疫学的解析	29～30年度
若手研究(B)	客員研究員・北庄司絵美	1,800	540	フィリピン マニラにおけるレプトスピラ症の病態解明と包括的マネジメント法の確立	29～31年度
挑 戦 的 研 究 (萌 芽)	教 授・金 子 修	1,800	540	抗原性強化弱毒サルマリア生ワクチン開発に向けた研究	29～30年度
挑 戦 的 萌 芽 研 究	助 教・水 上 修 作	900	270	HLA組換えマウスを用いたCD8陽性T細胞のデングウイルス防御免疫への関与検討	28～30年度
国際共同研究強化	助 教・矢 幡 一 英	11,200	3,360	赤血球侵入型マラリア原虫の滑走運動と赤血球侵入機構(国際共同研究強化)	28～30年度
特別研究員奨励費	客員研究員・吉川 禄助	1,100	330	ヒト高病原性新型ブニヤウイルスの病原性発現メカニズムの解明	(27)28～29年度
特別研究員奨励費 (外 国 人)	教 授・金 子 修	1,100	0	バベシア原虫による宿主赤血球修飾分子の同定とその輸送機構の解析	28～29年度
基盤研究(A)	助 教・市 川 智 生	300	90	20世紀日本の長期療養型疾患の歴史－ハンセン病・精神疾患・結核の比較総合的検討	研究分担者
基盤研究(A)	教 授・皆 川 昇	100	30	ビクトリア湖島嶼マラリア撲滅：プリマキン使用による集団治療とヒト・原虫多様性	研究分担者
基盤研究(A)	教 授・金 子 修	400	120	ビクトリア湖島嶼マラリア撲滅：プリマキン使用による集団治療とヒト・原虫多様性	研究分担者
基盤研究(A)	教 授・平 山 謙 二	100	30	ビクトリア湖島嶼マラリア撲滅：プリマキン使用による集団治療とヒト・原虫多様性	研究分担者
基盤研究(B)	教 授・平 山 謙 二	800	240	in silico と in vitro の融合によるトリパノソーマ原虫治療薬探索	研究分担者
基盤研究(B)	助 教・市 川 智 生	100	30	日米医学協力計画(1965～90年)とJICAによるフィリピンへの医療援助	研究分担者
基盤研究(B)	教 授・濱 野 真二郎	200	60	リーシュマニア症ワクチン開発に向けた宿主免疫記憶機構の包括的解明	研究分担者

研究種目	職名・研究者名	研究経費 (千円)	間接経費 (千円)	研 究 課 題	備 考
基盤研究(B)	教 授・濱 野 真二郎	200	60	省力的空間分布把握システムによる糸状虫症根絶の確認と再燃の早期発見	研究分担者
基盤研究(B)	助 教・砂 原 俊 彦	100	30	ハマダラカ唾液抗体価を指標とした「マラリア感染危険度」評価法の開発	研究分担者
基盤研究(B)	助 教・竹 村 太地郎	400	120	コレラ菌から地球規模での水の衛生微生物学的安全性を保障する	研究分担者
基盤研究(B)	助 教・市 川 智 生	800	240	ドイツ日本関係史料による新しい明治日本理解の構築：外交と国家形成	研究分担者
基盤研究(B)	教 授・濱 野 真二郎	1,400	420	バングラデシュにおけるポスト・カラ・アザール皮膚リーシュマニア症新規診断法の検証	研究分担者
基盤研究(B)	講 師・上 村 春 樹	1,500	450	マラリア予防薬でマラリアは予防できるのか？	研究分担者
基盤研究(B)	教 授・濱 野 真二郎	500	150	潜在性結核の検出と、結核の発症予知技術の確立を目指した、ケニア国における調査研究	研究分担者
基盤研究(B)	教 授・金 子 聡	30	9	デング熱の実態把握と環境負荷のない地域対策の無作為化比較試験による評価	研究分担者
基盤研究(B)	准教授・藤 井 仁 人	30	9	デング熱の実態把握と環境負荷のない地域対策の無作為化比較試験による評価	研究分担者
基盤研究(C)	准教授・和 田 崇 之	100	30	高まん延多剤耐性結核菌株のゲノム解析による高病原因子の探索	研究分担者
基盤研究(C)	准教授・川 田 均	400	120	疾病媒介蚊の殺虫剤抵抗性獲得メカニズム解明	研究分担者
挑 戦 的 萌 芽 研 究	准教授・森 本 浩之輔	100	30	ips細胞を用いた家族性間質性肺炎由来肺胞上皮細胞の解析による肺線維化機構の解明	研究分担者
合 計	64件	142,360	42,378		

7. 2 受託研究費等（平成29年度）

7. 2. 1 受託研究

相手先	職名・氏名	課 題 名	直接経費 (千円)	間接経費(千円) 大学全体	備 考
国立研究開発法人 国際医療研究機構	教授・皆 川 昇	南部アフリカにおける気候予測モデルをもとにした感染症流行の早期警戒システムの構築	13,464	4,039	
	教授・安 田 二 朗	公衆衛生上問題となっているウイルス感染症の把握と実験室診断法の確立プロジェクト	25,440	7,632	
	教授・平 山 謙 二	マラリアワクチン候補分子トランスアミダーゼ様分子のヒトマラリアでの抗原性および遺伝子多様性の解析	8,060	2,418	
	准教授・モイ メンリン	ミャンマーで流行している乳幼児～大人及び重症デングにおけるウイルス遺伝子の多様性解析	9,040	2,712	
	准教授・モイ メンリン	国内侵入・流行が危惧される昆虫媒介性ウイルス感染症に対する総合的対策に資する開発研究	2,307	692	
	教授・森 田 公 一	国内侵入・流行が危惧される昆虫媒介性ウイルス感染症に対する総合的対策に資する開発研究	1,538	461	
	教授・森 田 公 一	重症熱性血小板減少症候群(SFTS)に対する診断・治療・予防法の開発及びヒトへの感染リスクの解明等に関する研究	2,770	831	
	教授・安 田 二 朗	国内侵入・流行が危惧される昆虫媒介性ウイルス感染症に対する総合的対策に資する開発研究	2,307	692	
	教授・安 田 二 朗	我が国における高病原性病原体取扱い者の安全を確保するための研究	1,400	420	
	准教授・森 本 浩之輔	ワクチンによって予防可能な疾患のサーベイランス強化と新規ワクチンの創出等に関する研究	769	230	
	助教・比 嘉 由紀子	新興・再興感染症を媒介する節足動物の対策に関する研究	1,000	300	
	教授・金 子 修	Establishment of a novel in vitro system to assess Plasmodium vivax hypnozoites and its application for the metabolomic and pharmacological analysis	1,230	369	
	教授・平 山 謙 二	アカデミア創薬プラットフォームを活用した抗マラリア薬の探索研究	11,250	0	
	教授・安 田 二 朗	ウイルス性出血熱に対する治療・診断・予防法等の開発に向けた研究	9,903	2,956	研究代表機関は 学校法人聖路加 国際大学
	准教授・森 本 浩之輔	自己免疫性肺胞蛋白症に対する酵母由来組換えGM-CSF吸入の多施設共同医師主導治験	4,519	1,355	研究代表機関は 国立大学法人新潟 大学
	准教授・森 本 浩之輔	肺胞蛋白症診療に直結するエビデンス創出研究：重症難治例の診断治療管理	153	46	研究代表機関は国立 病院機構近畿中央胸 部疾患センター
	助教・和 田 崇 之	結核の診断及び治療の強化等に関する革新的な手法の開発に関する研究	1,385	415	研究代表機関は公 益財団法人結核予 防会結核研究所

相手先	職名・氏名	課 題 名	直接経費 (千円)	間接経費(千円) 大学全体	備 考
国立研究 開発法人 国際医療 研究機構	教 授・濱 野 真二郎	赤痢アメーバ“含硫脂質代謝”を標的とする阻害剤探索－全容解明と治療薬開発にむけて－	4,000	1,200	研究代表機関は国立大学法人佐賀大学
	教 授・平 山 謙 二	ベトナムにおける感染症制御研究・開発プロジェクト	142,707	42,812	その他再委託分： NCGM (直37,153千円、間11,146千円) 結核研 (直16,323千円、間4,896千円) 鳥取大 (直3,761千円、間1,128千円) 京産大 (直4,276千円、間1,283千円) 北里大 (直3,846千円、間1,153千円)
	教 授・金 子 聰	アフリカのNTD対策に資する大陸的監視網に向けたイノベティブ・ネットワークの構築：一括・同時診断技術を基軸とした展開	53,010	15,903	
独立行政 法人国際 協力機構	教 授・皆 川 昇	南部アフリカにおける気候予測モデルをもとにした感染症流行の早期警戒システムの構築	18,264	0	
	教 授・安 田 二 朗	公衆衛生上問題となっているウイルス感染症の把握と実験室診断法の確立プロジェクト	151,731	0	
独立行政 法人日本 学術振興会	助 教・市 川 智 生	医学史の現代的意義・感染症対策の歴史化と医学史研究の社会との対話の構築	3,700	0	平成28年度より協力機関として参画
旭 化 成 フ ァ ー マ 株 式 会 社	准教授・森 本 浩之輔	マイコプラズマ抗原迅速検出キットの検出能評価試験	216	64	
B I L L & M E L I N D A G A T E S F O U N D A T I O N	教授・吉 田 レイミント	Evaluation of PCV schedules in a naive population in Vietnam	307,285	59,009	間接経費： 直接経費の15% として換算 直接経費より分 担 3 機関への送 金額： USD776,191
	教 授・濱 野 真二郎	Research on soil-transmitted helminth prevalence in Japan (DeWorm3 Project) (Field studies on feasibility of elimination of STH) (日本における土壌伝播蠕虫(STH)有病割合に関する研究)	4,585	687	代表機関は The Trustees of The Natural History Museum
G l o b a l H e a l t h I n n o v a t i v e T e c h n o l o g y F u n d	教 授・金 子 修	三日熱マラリア原虫によるマラリア休眠期感染の早期診断に向けて	43,900	6,146	長崎大学が研究 代表機関 直接経費より分 担 2 機関へ送金： 18,688千円
	教 授・濱 野 真二郎	Live attenuated prophylactic vaccine for leishmaniasis (リーシュマニア症の予防のための弱毒性ワクチン)	14,917	2,088	研究代表機関は The Ohio State University
	教 授・皆 川 昇	Development of a fully automated malaria diagnostic system and field evaluation for practical use (全自動マラリア診断システムの開発と蔓延地域での評価)	10,000	0	研究代表機関は パナソニック株 式会社
	教 授・森 田 公 一	Development of novel dengue virus-like particle [VLP] vaccines against all four serotypes (ウイルス様粒子(VLP)を用いた新規4価デングワクチンの開発)	4,615	692	研究代表機関は VLP Therapeutics, LLC
レキオ・パワー・ テクノロジー 株 式 会 社	教 授・金 子 聰	途上国をクロスボーダーで結ぶ超音波画像の読影支援プラットフォームの中南米地域向け適合理化および活用実証調査	1,600	0	
合 計	31件		857,073	154,175	

7. 2. 2 受託事業費

相手先	職名・氏名	課題名	直接経費 (千円)	間接経費(千円) 大学全体	備考
独立行政法人 日本学術振興会	教授・森田公一	論博事業(森田) ID No.R11520	1,200	0	
	教授・平山謙二	論博事業(平山) ID No.R11521	1,200	0	
	教授・金子聰	5歳未満児の養育者に対する栄養 カウンセリングの効果の検討：ア フリカモデルの構築	2,208	0	
	講師・上村春樹	熱帯熱マラリアに対するACTの有 効性と薬剤耐性関連遺伝子多型の 解析	2,397	0	
グローバル・リンク・ マネジメント 株式会社	教授・金子聰	スリランカ国 非感染症疾患対策 強化プロジェクト	1,027	359	
独立行政法人 国際協力機構 九州国際センター	教授・神谷保彦	草の根技術協力事業 健康な地域 社会をつくる学童支援プロジェクト	25,694	0	
合 計	6 件		33,726	359	

7. 2. 3 その他の補助金

補助金名	職名・氏名	プログラム名	直接経費 (千円)	一般管理費 (千円)	備考
医療研究開発推進 事業費補助金	教授・金子修	病原真核微生物の収集, 保存, 提供 体制の整備(病原原虫の収集, 保 存, 提供)	4,834	483	
国立大学改革強化 推進補助金	助教・麻田正仁	特定支援型：優れた若手研究者の 採用拡大支援	6,000	0	
外国人研究者招へい事業(外特人研 究員(欧米短期))	准教授・ Culleton Richard	外国人研究者招へい事業(外特人 研究員(欧米短期))	350	0	
外国人研究者招へい事業(外国人研 究員(サマー・プログラム))	教授・山本太郎	外国人研究者招へい事業(外国人 研究員(サマー・プログラム))	158	0	
合 計	4 件		11,342	483	

7. 2. 4 民間等の共同研究

民間等機関名	職名・氏名	研 究 題 目	民 間 等 (千円)	大 学 (千円)	備 考
独立行政法人 海洋研究 開発機構	教 授・皆 川 昇	南部アフリカにおける気候予測モデルをもとにした感染症流行の早期警戒システムの構築	0		
山 形 県 衛生研究所	教 授・山 本 太 郎	結核菌遺伝型別による分子疫学解析	0		
キヤノンメディ カルシステムズ 株 式 会 社_2	教 授・安 田 二 朗	国内侵入・流行が危惧される昆虫媒介性ウイルス感染症に対する総合的対策に関する研究	0		
株 式 会 社 ニ コ インステック	教 授・金 子 修	イメージングによる感染症成立メカニズムの理解	525		
住 友 化 学 株 式 会 社	教 授・皆 川 昇	殺虫剤デリバリー技術の性能評価及び評価系の構築	13,000		
キヤノンメディ カルシステムズ 株 式 会 社_1	教 授・安 田 二 朗	遺伝子迅速検査における自動抽出システムの研究	1,200		
一般財団法人 カケンテスト セ ン タ ー	准教授・川 田 均	吸血昆虫の人工飼育方法の研究	594		
マイキャン・テクノ ロジーズ株式会社 京 都 大 学	教 授・金 子 修	マラリア原虫等培養及び抗マラリア原虫等薬としてのhESC/iPS細胞由来幼若赤血球様細胞の開発	1,000		
シスメックス 株 式 会 社	教 授・有 吉 紅 也	フィリピン・サンラザロ病院に入院する市中感染菌血症の起因菌と抗菌薬感受性を検討する臨床疫学研究	0		
公益財団法人 東京都医学 総合研究所	教 授・森 田 公 一	デングウイルス対策研究	10,000		
ア ー ス 製 薬 株 式 会 社_1	准教授・川 田 均	蚊取り剤の開発研究	2,838		
積水メディカル 株 式 会 社	教 授・有 吉 紅 也	フィリピン・サンラザロ病院に入院する市中感染菌血症患者におけるプロカルシトニンの有用性の検討	0		
ア ー ス 製 薬 株 式 会 社_2	准教授・川 田 均	殺虫剤抵抗性研究	1,738		
国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構 第一宇宙技術部門 事業推進部	教 授・皆 川 昇	アフリカにおけるマラリア流行予測のための衛星データの活用：警戒システム構築へ向けて	0		
国立研究開発法人 宇宙航空研究開発機構 第一宇宙技術部門 事業推進部	助 教・ Chris Fook Sheng Ng	Assessing the health impacts of particulate air pollution in the Southeast Asian countries using remote sensing	1,650		
キヤノンメディ カルシステムズ 株 式 会 社_3	教 授・安 田 二 朗	新興・再興感染症に対する迅速検査法の研究	0		
株 式 会 社 シンスター・ ジ ャ パ ン	教 授・平 山 謙 二	化合物の抗マラリア効果検討	0		
田辺三菱製薬 株 式 会 社	教 授・安 田 二 朗	抗Filovirus感染評価系の構築	1,000		
ワールドビジョン ワールドビジョン ケニア	教 授・一 瀬 休 生	Ilaramatak Area Development Program Mother to Mother Project	10,333		
合 計	19件		43,878	0	

8 海外活動

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
特 任 研究員	牛 島 由 理	SATREPSにおける研究遂行	ガ ボ ン	H29. 4. 5 ～ H29. 4.23	受託研究等 収 入
教 授	ローサボーン チャントラ	Ethics 事前打ち合わせ	タ イ	H29. 4. 6 ～ H29. 4. 9	運 営 費 交 付 金
教 授	平 山 謙 二	研究拠点をベトナムに移す学生に同行 するため	ベ ト ナ ム	H29. 4. 7 ～ H29. 4.11	自 己 収 入
助 教	樋 泉 道 子	小児肺炎球菌に関する研究・情報収集	ベ ト ナ ム	H29. 4.11 ～ H29. 4.15	受託研究等 収 入
教 授	吉田 レイミント	デング熱研究についての研究打ち合わせ および情報収集	ベ ト ナ ム	H29. 4.14 ～ H29. 4.20	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	ICAGDE参加, シャーガス病に関する情報 交換	ボ リ ビ ア	H29. 4.17 ～ H29. 4.27	科学研究費 補 助 金
助 教	阿 部 遥	1.JCC打ち合わせ 2.JCC参加 3.SATREPSプロジェクトによる研究	ガ ボ ン	H29. 4.17 ～ H29. 7.23	受託研究等 収 入
教 授	安 田 二 朗	SATREPSに関わる研究打ち合わせ及び JCCへの参加	ガ ボ ン	H29. 4.18 ～ H29. 4.23	受託研究等 収 入
教 授	金 子 聰	WHO及びNTD community主催のNTD サミットへの参加のため	ス イ ス	H29. 4.18 ～ H29. 4.23	運 営 費 交 付 金
教 授	ローサボーン チャントラ	Ethics事前打ち合わせ	タ イ	H29. 4.21 ～ H29. 5. 2	運 営 費 交 付 金
教 授	有 吉 紅 也	ベトナム拠点における学生指導のため	ベ ト ナ ム	H29. 4.25 ～ H29. 4.29	自 己 収 入
教 授	奥 村 順 子	20th WADEM Congress on Disaster and Emergency Medicine 2017に参加し情報を 収集する	カ ナ ダ	H29. 4.25 ～ H29. 4.29	寄 附 金
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌についての研究打ち合わせ および情報収集	ベ ト ナ ム	H29. 4.26 ～ H29. 5.10	受託研究等 収 入
准教授	川 田 均	長期残効型殺虫剤含浸蚊帳と空間忌避 剤を併用したマラリア防除トライアル	マ ラ ウ イ	H29. 4.28 ～ H29. 5.15	受託研究等 収 入
助 教	水 上 修 作	KEYSTONE SYMPOSIA参加	ア メ リ カ	H29. 5. 1 ～ H29. 5. 6	自 己 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	ローサボーン チャントラ	Ethical Study参加	ア メ リ カ	H29. 5. 2 ～ H29. 5. 6	運 営 費 金 交 付 金
教 授	ローサボーン チャントラ	Ethics事前打ち合わせ	タ イ	H29. 5. 7 ～ H29. 5.10	運 営 費 金 交 付 金
教 授	濱 野 真二郎	①GHITの研究打合せ ②World Leish 2017の会議 ③共同研究の打合せ	ス ペ イ ン	H29. 5.13 ～ H29. 5.23	受託研究等 収 入
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌についての研究打ち合わせおよび情報収集を行う	ベ ト ナ ム	H29. 5.14 ～ H29. 5.29	受託研究等 収 入
教 授	橋 爪 真 弘	Impact of Environmental Changes on Infectious Diseaseの学会発表と研究打ち合わせ	イ タ リ ア	H29. 5.15 ～ H29. 5.21	運 営 費 金 交 付 金
教 授	皆 川 昇	IECID2017参加	イ タ リ ア	H29. 5.17 ～ H29. 5.20	受託研究等 収 入
教 授	安 田 二 朗	ウイルス性出血熱に対する治療・診断・予防法等の開発における研究打ち合わせ	ナイジェリア	H29. 5.19 ～ H29. 5.26	受託研究等 収 入
特 任 研究員	末 吉 真 季	ウイルス性出血熱に対する治療・診断・予防法等の開発に関する研究打ち合わせ	ナイジェリア	H29. 5.19 ～ H29. 6.19	受託研究等 収 入
教 授	皆 川 昇	南ア研究代表者との打合せ	南アフリカ	H29. 5.21 ～ H29. 5.23	受託研究等 収 入
准教授	井 上 真 吾	ケニア拠点への防衛省訪問の対応, 研究打ち合わせ	ケ ニ ア	H29. 5.23 ～ H29. 6.13	運 営 費 金 交 付 金
助 教	樋 泉 道 子	「ベトナムにおける百日咳発生パターンと乳児への感染リスク」研究のための情報収集および打ち合わせ	ベ ト ナ ム	H29. 5.28 ～ H29. 6. 3	科学 研 究 費 補 助 金
助 教	和 田 崇 之	台湾動物由来大腸菌の分離状況	マレーシア	H29. 5.31 ～ H29. 6.12	受託研究等 収 入
准教授	藤 井 仁 人	マルチプレックスアッセイの実験室での研究指導	ケ ニ ア	H29. 5.31 ～ H29. 7. 3	受託研究等 収 入
教 授	皆 川 昇	マラリア対策会議に関する研究打ち合わせのため	南アフリカ	H29. 6. 1 ～ H29. 6. 6	受託研究等 収 入
教 授	橋 爪 真 弘	マラリア対策会議およびプロジェクト会議参加, 研究打ち合わせのため	南アフリカ	H29. 6. 3 ～ H29. 6. 7	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	ローサボーン チャントラ	Cholangiocarcinoma打ち合わせ	タ イ	H29. 6. 3 ～ H29. 6. 8	運 営 費 交 付 金
助 教	キム ユンヒ	マラリア対策会議およびプロジェクト 会議参加, 研究打ち合わせのため	南アフリカ	H29. 6. 3 ～ H29. 6. 9	受託研究等 収 入
准教授	早 坂 大 輔	ケニアにおけるマダニ媒介感染症研究 の打ち合わせ	ケ ニ ア	H29. 6. 4 ～ H29. 6. 8	科学研究費 補 助 金
准教授	モイ メンリン	重症デング熱の病態解明に資するデン グウイルス遺伝子の多様性に関する研 究打ち合わせ・実験をおこなう。	ミャンマー	H29. 6. 4 ～ H29. 6. 9	受託研究等 収 入
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌についての研究打ち合 わせおよび情報収集を行う	ベ ト ナ ム	H29. 6. 5 ～ H29. 6.20	受託研究等 収 入
教 授	有 吉 紅 也	ロンドン大学外国人教員採用面接のた め	イ ギ リ ス	H29. 6. 6 ～ H29. 6.10	運 営 費 交 付 金
講 師	菊 池 三穂子	フィリピンの住血吸虫性肝線維化症ハイ リスク集団における早期診断及び予防法 の確立に関する研究打ち合わせ, 実験指導	フィリピン	H29. 6. 6 ～ H29. 6. 9	科学研究費 補 助 金
教 授	安 田 二 朗	日米バイオディフェンスシンポジウム への参加	ア メ リ カ	H29. 6. 6 ～ H29. 6.10	受託研究等 収 入
教 授	橋 爪 真 弘	ロンドン大学外国人教員採用面接のた め	イ ギ リ ス	H29. 6. 7 ～ H29. 6.11	運 営 費 交 付 金
特 任 研究員	牛 島 由 理	①SATREPSに関わる研究遂行② SATREPSに関わる研究打合せ, 在ガボン 日本大使館及びJICAガボン支所への訪問	ガ ボ ン	H29. 6. 7 ～ H29. 9.30	受託研究等 収 入
教 授	ローサボーン チャントラ	Cholangiocarcinoma 打ち合わせ	タ イ	H29. 6.13 ～ H29. 6.16	運 営 費 交 付 金
教 授	金 子 聰	カンボジアでのNTD会議へ参加	カンボジア	H29. 6.13 ～ H29. 6.17	受託研究等 収 入
外国人 研究員	チ ヨ ン セ ン	International Conference on Econometrics and Statisticsに参加し, 発 表及び情報収集を行う	中 国	H29. 6.14 ～ H29. 6.16	先 方 負 担
助 教	レ ニ ャ ッ ト ン ミ	小児呼吸器感染症研究に関する情報収 集, 肺炎球菌検体のデータ収集・分析	ベ ト ナ ム	H29. 6.17 ～ H29. 7. 1	受託研究等 収 入
教 授	ローサボーン チャントラ	Cholangiocarcinoma打ち合わせ	タ イ	H29. 6.17 ～ H29. 7. 2	運 営 費 交 付 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	平 山 謙 二	WHOのTDR-JCB会議出席のため	ス イ ス	H29. 6.18 ～ H29. 6.23	運 営 費 交 付 金
助 教	矢 幡 一 英	赤血球侵入型マラリア原虫に関する研究実施	イ ギ リ ス	H29. 6.19 ～ H29.12.18	科学 研究 費 補 助 金
外国人 研究員	チ ョ ン セ ン	Third Korean-American Kavli Frontiers of Science Symposiumに参加し情報収集を行う	ア メ リ カ	H29. 6.24 ～ H29. 6.30	先 方 負 担
准教授	グ エ ン フ ィ ン テ イ エ ン	デングプロジェクトに関する研究打ち合わせ	ベ ト ナ ム	H29. 6.25 ～ H29. 7. 1	科学 研究 費 補 助 金
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌研究についての研究打ち合わせ及び情報収集を行う。	オーストラリア	H29. 6.27 ～ H29. 6.30	受託研究等 収 入
助 教	樋 泉 道 子	PCV研究の肺炎球菌保菌調査の準備と実施	ベ ト ナ ム	H29. 6.28 ～ H29. 7. 1	受託研究等 収 入
教 授	濱 野 真二郎	「南アジアにおけるアメーバ赤痢の免疫学的コホート研究」の打合せ・実施のため	バングラデシュ	H29. 6.30 ～ H29. 7. 7	科学 研究 費 補 助 金
教 授	神 谷 保 彦	草の根技術協力事業 事業終了報告会への参加	ケ ニ ア	H29. 7. 2 ～ H29. 7. 8	受託研究等 収 入
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌についての研究打ち合わせおよび情報収集を行う	ベ ト ナ ム	H29. 7. 3 ～ H29. 7.12	受託研究等 収 入
外国人 研究員	チ ョ ン セ ン	帰国のため	韓 国	H29. 7. 5 ～ H29. 7. 5	自 己 収 入
助 教	市 川 智 生	ネパールの寒冷高地における生活習慣病に関するフィールド調査	ネ パ ー ル	H29. 7. 6 ～ H29. 7.22	寄 附 金
教 授	ローサボーン チャントラ	Ethics Training	カザフスタン	H29. 7. 9 ～ H29. 7.12	先 方 負 担
助 教	樋 泉 道 子	科研費研究課題に関する情報収集, 打ち合わせ	ベ ト ナ ム	H29. 7.10 ～ H29. 7.14	科学 研究 費 補 助 金
特 任 研究員	竹 田 美 香	ヤギ及びスイギュウマラリア調査実施	タ イ	H29. 7.10 ～ H29. 7.23	科学 研究 費 補 助 金
助 教	麻 田 正 仁	ヤギ及びスイギュウマラリア調査実施	タ イ	H29. 7.10 ～ H29. 7.23	科学 研究 費 補 助 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 教	ク リ ス ウ ン フ ッ ク シ ェ ン	JAXA研究課題に関する打ち合わせおよび情報収集	インドネシア	H29. 7.12 ～ H29. 7.15	受入研究等 収 入
教 授	橋 爪 真 弘	JAXA研究課題に関する打ち合わせおよび情報収集	インドネシア	H29. 7.12 ～ H29. 7.15	受託研究等 収 入
教 授	吉 田 レイミント	小児肺炎球菌についての研究打ち合わせおよび情報収集を行う	ベ ト ナ ム	H29. 7.13 ～ H29. 7.22	受託研究等 収 入
教 授	ロ ー サ ボ ー ン チ ャ ン ト ラ	Evaluation of Ethics	タ イ	H29. 7.13 ～ H29. 7.23	先 方 負 担
教 授	奥 村 順 子	乳幼児死亡の少数民族間における格差に関する現地調査	ラ オ ス	H29. 7.15 ～ H29. 7.22	科学研究費 補 助 金
助 教	キ ム ユンヒ	研究課題に関する打ち合わせおよび情報収集	イ ギ リ ス	H29. 7.16 ～ H29. 7.20	科学研究費 補 助 金
教 授	橋 爪 真 弘	課題研究に関する新知見を収集する。モデルに関する打ち合わせを行う	イ ギ リ ス	H29. 7.16 ～ H29. 7.20	先 方 負 担
教 授	金 子 聰	HDSSに關しての情報収集及び保健省での母子手帳登録の打合せ、研究打ち合わせ	ケ ニ ア	H29. 7.17 ～ H29. 7.21	運 営 費 交 付 金
助 教	和 田 崇 之	抗酸菌症調査	ネ パ ー ル	H29. 7.18 ～ H29. 7.22	科学研究費 補 助 金
助 教	中 野 政 之	ネパールの寒冷高地における生活習慣病に関するフィールド調査及びDNA抽出作業	ネ パ ー ル	H29. 7.18 ～ H29. 7.25	科学研究費 補 助 金
講 師	菊 池 三穂子	フィリピンの住血吸虫性肝線維化症ハイリスク集団における早期診断及び予防法の確立に関する現地調査	フィリピン	H29. 7.22 ～ H29. 7.29	科学研究費 補 助 金
助 教	和 田 崇 之	動物由来抗酸菌症に関する研究打ち合わせ等	タ イ	H29. 7.23 ～ H29. 7.23	寄 附 金
助 教	和 田 崇 之	野生動物由来大腸菌群の分離に関する研究打ち合わせ等	ミャンマー	H29. 7.24 ～ H29. 7.28	寄 附 金
講 師	上 村 春 樹	熱帯熱マラリア原虫に関する研究実施	インドネシア	H29. 7.24 ～ H29. 8. 1	科学研究費 補 助 金
教 授	ロ ー サ ボ ー ン チ ャ ン ト ラ	研究打合せ及びFERCAPへの参加	タ イ	H29. 7.25 ～ H29. 8.18	先 方 負 担

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
特 任 研究員	ダニエル トシオ ハ ー レ ル	ケニアとラオスの母子保健に関する国際疫学研究展開の為の調査システム共有化に関する打合せ	ラ オ ス	H29. 7.29 ～ H29. 8.12	科学研究費 補 助 金
教 授	山 本 太 郎	ネパール寒冷高地における生活習慣病に関するフィールド調査	ネ パ ー ル	H29. 7.7 ～ H29. 7.18	科学研究費 補 助 金
教 授	平 山 謙 二	PacELF data library 開設式出席およびNDTsに関する打ち合わせ	オーストラリア	H29. 8. 9 ～ H29. 8.13	運 営 費 交 付 金
教 授	皆 川 昇	iDEWS研究打ち合わせおよび保健省訪問とマラリア発生地域の情報収集	南アフリカ	H29. 8.12 ～ H29. 8.20	受託研究等 収 入
助 教	和 田 崇 之	動物由来大腸菌の①遺伝子抽出打ち合わせ及びフィールド調査②情報収集	台 湾	H29. 8.14 ～ H29. 8.27	先 方 負 担
教 授	森 田 公 一	WHO西太平洋地域事務局における会議に出席	フィリピン	H29. 8.16 ～ H29. 8.19	先 方 負 担
准教授	川 田 均	ネパール南部地域におけるシマカ(Aedes)の成虫および幼虫の採集調査	ネ パ ー ル	H29. 8.17 ～ H29. 8.26	科学研究費 補 助 金
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌の研究打ち合わせ及び情報収集	ベ ト ナ ム	H29. 8.17 ～ H29. 9. 6	受託研究等 収 入
准教授	藤 井 仁 人	マルチプレックス法開発のための共同研究	スリランカ	H29. 8.18 ～ H29. 9.10	先 方 負 担
准教授	グ エ ン フ ィ ン テ イ エ ン	デングプロジェクトに関する研究打ち合わせ	ベ ト ナ ム	H29. 8.27 ～ H29. 9. 2	科学研究費 補 助 金
特 任 研究員	竹 田 美 香	ヤギ及びスイギュウマラリア調査実施	タ イ	H29. 9. 1 ～ H29. 9. 9	科学研究費 補 助 金
助 教	麻 田 正 仁	ヤギ及びスイギュウマラリア調査実施	タ イ	H29. 9. 1 ～ H29. 9. 9	科学研究費 補 助 金
教 授	ローサ ボ ー ン チ ャ ン ト ラ	Nation Buliding institute 主催のSenior-Executive Program参加	スウェーデン	H29. 9. 2 ～ H29.10. 5	運 営 費 交 付 金
教 授	一 瀬 休 生	国際熱帯医学会に参加, ケニア拠点に関する報告, 打ち合わせ	イ ギ リ ス	H29. 9. 4 ～ H29. 9.23	寄 附 金
助 教	阿 部 遥	SATREPSに係る研究遂行及び研究打合せ	ガ ボ ン	H29. 9. 6 ～ H29.11. 1	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 教	矢 幡 一 英	The 28th MPM出席	ア メ リ カ	H29. 9. 8 ～ H29. 9.17	科学研究費 補 助 金
助 教	キ ム ユンヒ	iDEWSプロジェクトに関するJCC参加 と事前打合せ	南アフリカ	H29. 9.10 ～ H29. 9.15	受託研究等 収 入
教 授	橋 爪 真 弘	iDEWSプロジェクトに関するJCC参加 と事前打合せ	南アフリカ	H29. 9.10 ～ H29. 9.15	受託研究等 収 入
助 教	浦 田 秀 造	9th International Symposium on Filovirusesへの参加	ド イ ツ	H29. 9.12 ～ H29. 9.18	科学研究費 補 助 金
助 教	黒 崎 陽 平	9th International Symposium on Filovirusesへの参加	ド イ ツ	H29. 9.12 ～ H29. 9.18	寄 附 金
教 授	有 吉 紅 也	ベトナム研修中の修了予定者と終了に 係る諸手続きの為	ベ ト ナ ム	H29. 9.13 ～ H29.9.17	運 営 費 交 付 金
教 授	吉田 レイミント	デング熱研究についての研究打ち合わせ および情報収集	ベ ト ナ ム	H29. 9.13 ～ H29. 9.23	受託研究等 収 入
教 授	皆 川 昇	モザンビーク保健省訪問	モザンビーク	H29. 9.14 ～ H29. 9.15	受託研究等 収 入
教 授	皆 川 昇	iDEWSプロジェクトに関するJCC参加 と事前打合せ	南アフリカ	H29. 9.15 ～ H29. 9.16	受託研究等 収 入
教 授	金 子 聰	ロンドンウィーク出席のため	イ ギ リ ス	H29. 9.16 ～ H29. 9.21	運 営 費 交 付 金
教 授	平 山 謙 二	ロンドンウィーク出席のため	イ ギ リ ス	H29. 9.16 ～ H29. 9.21	運 営 費 交 付 金
教 授	皆 川 昇	ロンドンウィーク出席のため	イ ギ リ ス	H29. 9.16 ～ H29. 9.22	運 営 費 交 付 金
教 授	安 田 二 朗	①SATREPSに関わる研究実施及び研究 打合せ ②在ガボン大使館への訪問及び打合せ	ガ ボ ン	H29. 9.16 ～ H29. 9.26	受託研究等 収 入
教 授	橋 爪 真 弘	Faculty of Public Health Universitas Indonesia Science Festival 2017にて 発表および情報収集を行う	インドネシア	H29. 9.17 ～ H29. 9.19	自 己 収 入
准教授	モイ メンリン	重症デング熱の病態解明に資するデ ングウイルス遺伝子の多様性に関する研 究打ち合わせ・実験のため	ベ ト ナ ム	H29. 9.17 ～ H29. 9.21	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	濱 野 真二郎	ロンドンウィークに出席するため	イ ギ リ ス	H29. 9.18 ～ H29. 9.20	運 営 費 金 交 付 金
教 授	橋 爪 真 弘	ロンドンウィーク出席のため	イ ギ リ ス	H29. 9.19 ～ H29. 9.22	運 営 費 金 交 付 金
講 師	菊 池 三穂子	「ヴィクトリア湖湖畔における住血吸虫 伝搬ダイナミクスと環境モニタリング」 遂行のため	ケ ニ ア	H29. 9.21 ～ H29. 9.30	科学研究費 補 助 金
教 授	二 見 恭 子	「ヴィクトリア湖湖畔における住血吸虫 伝搬ダイナミクスと環境モニタリング」 遂行のため	ケ ニ ア	H29. 9.21 ～ H29.10. 5	科学研究費 補 助 金
助 教	ク リ ス ウ ン フ ッ ク シ ェ ン	ISEE2017に参加し発表および情報収集 を行う	オーストラリア	H29. 9.22 ～ H29. 9.29	自 己 収 入
助 教	キ ム ユ ン ヒ	ISEE2017に参加し発表および情報収集 を行う	オーストラリア	H29. 9.22 ～ H29. 9.29	科学研究費 補 助 金
特 任 研究員	ヨンボ カレンダ ダン ジャスティン	マルチブレックスプロジェクトの研究 実施と業務調整	コ ン ゴ	H29. 9.22 ～ H29.10. 2	受託研究等 収 入
教 授	橋 爪 真 弘	ISEE2017に参加し情報収集を行う	オーストラリア	H29. 9.23 ～ H29. 9.27	科学研究費 補 助 金
教 授	有 吉 紅 也	LSHTM Week出席	イ ギ リ ス	H29. 9.24 ～ H29.9.25	運 営 費 金 交 付 金
教 授	有 吉 紅 也	DTM&H研修打ち合せ	タンザニア	H29. 9.25 ～ H29.10.2	運 営 費 金 交 付 金
教 授	濱 野 真二郎	研究拠点形成事業(B.アジア・アフリカ 学術基盤形成型)「アフリカ諸国におけ るピロリ菌を中心とした	ケ ニ ア	H29. 9.25 ～ H29. 9.29	先 方 負 担
教 授	金 子 聰	医学知見に基づくシステムローカライ ズ業務及び研究打ち合わせ	キ ュ ー バ	H29. 9.25 ～ H29.10. 3	自 己 収 入
講 師	上 村 春 樹	熱帯熱マラリア原虫に関する研究実施	インドネシア	H29. 9.27 ～ H29.10. 4	受託研究等 収 入
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌の研究打ち合わせおよび 情報収集, ASPR2017にて発表を行う	ベ ト ナ ム	H29. 9.27 ～ H29.10.13	受託研究等 収 入
准教授	井 上 真 吾	P3ワークショップ参加・JICA研修プロ グラム準備委員会出席・KEMRI共同研 究についての協議	ケ ニ ア	H29.10. 1 ～ H29.10.12	運 営 費 金 交 付 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
特 任 研究員	牛 島 由 理	SATREPSにおける研究遂行	ガ ボ ン	H29.10. 1 ～ H29.12.23	受託研究等 収 入
准教授	森 本 浩之輔	ID Week2017へ出席	ア メ リ カ	H29.10. 4 ～ H29.10. 9	受託研究等 収 入
助 教	鈴 木 基	ID Week2017へ出席	ア メ リ カ	H29.10. 4 ～ H29.10. 9	寄 附 金
助 教	樋 泉 道 子	The 13th Congress of Asian Society for Pediatric Researchにおける発表及び情 報収集	中 国	H29.10. 5 ～ H29.10. 9	学 術 研 究 助 成 基 金
教 授	平 山 謙 二	Steering Committee Meetingへの出席	ベ ト ナ ム	H29.10.10 ～ H29.10.14	受託研究等 収 入
教 授	ローサボーン チャントラ	Research meeting	イ ギ リ ス	H29.10.12 ～ H29.10.24	運 営 費 交 付 金
教 授	金 子 聰	ベルリンでのRPRG会議	ド イ ツ	H29.10.15 ～ H29.10.17	受託研究等 収 入
教 授	皆 川 昇	研究打合せ, シンポジウム参加	南アフリカ	H29.10.16 ～ H29.10.21	科学研究費 補 助 金
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌の研究についての打ち合 わせ, 情報収集, PCVシンポジウム	ベ ト ナ ム	H29.10.16 ～ H29.10.29	受託研究等 収 入
特 任 研究員	ヨンボ カレンダ ダン ジャスティン	ルサカでの国際会議へ参加	ザ ン ビ ア	H29.10.17 ～ H29.10.22	受託研究等 収 入
教 授	金 子 聰	国際会議へ参加	ザ ン ビ ア	H29.10.18 ～ H29.10.20	受託研究等 収 入
助 教	和 田 崇 之	2017ASCM出席のため	マレーシア	H29.10.20 ～ H29.10.23	科学研究費 補 助 金
准教授	カレトン リチャード レイ ト ン	共同研究に係る打ち合わせ	サウジアラビア	H29.10.23 ～ H29.10.27	先 方 負 担
講 師	菊 池 三穂子	1.ワークショップ(RNAS+)参加 2.研究打合せ	ラ オ ス	H29.10.23 ～ H29.10.28	科学研究費 補 助 金
教 授	金 子 聰	スリランカ国非感染症疾患対策強化プ ロジェクトに関する研究実施	スリランカ	H29.10.25 ～ H29.11. 3	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
講 師	上 村 春 樹	1) マラリア遺伝子解析実施, 2) マラリアフィールド調査打ち合わせ	インドネシア	H29.10.29 ～ H29.11. 8	受託研究等 収 入
教 授	ローサボーン チャントラ	Cholangiocarcinoma打ち合わせ	タ イ	H29.10.29 ～ H29.11.5	運 営 費 交 付 金
教 授	平 山 謙 二	ASTMH 65th Annual Meeting に 出 席, COR-NTDmeeting に出席	ア メ リ カ	H29.11. 2 ～ H29.11. 9	先 方 負 担
助 教	樋 泉 道 子	小児肺炎球菌研究のキャリッジスタ ディ参加, データ収集	ベ ト ナ ム	H29.11. 2 ～ H29.11.13	受託研究等 収 入
助 教	矢 幡 一 英	研究打合せ	ポルトガル	H29.11. 3 ～ H29.11. 5	科学研究費 補 助 金
教 授	金 子 聰	NTD 研究 に 関 す る 会 議(COR-NTD Meeting 2017)へ参加	ア メ リ カ	H29.11. 3 ～ H29.11. 6	受託研究等 収 入
特 任 研究員	溜 宣子	ASTMH 66th Annual Meeting 2017 にて 学会発表及び情報収集	ア メ リ カ	H29.11. 3 ～ H29.11.11	学 術 研 究 助 成 基 金
教 授	皆 川 昇	ASTMH学会参加	ア メ リ カ	H29.11. 5 ～ H29.11.11	受託研究等 収 入
准教授	モイ メンリン	デングウイルス遺伝子の多様性に関する 打ち合わせ	ミャンマー	H29.11. 6 ～ H29.11.10	受託研究等 収 入
教 授	ローサボーン チャントラ	FERCAP出席	イ ン ド	H29.11.11 ～ H29.12.10	自 己 収 入
教 授	金 子 聰	野口英世ガーナ来訪90周年シンポジウ ム参加のため, 学生面談・研究打合せの ため	ガ ー ナ	H29.11.13 ～ H29.11.19	受託研究等 収 入
講 師	菊 池 三穂子	フィリピンの住血吸虫性肝線維化症ハ イリスク集団における早期診断及び予 防法確立に関する現地調査	フィリピン	H29.11.13 ～ H29.11.18	科学研究費 補 助 金
准教授	カレトン リチャード レイ トン	マラリアに関する研究打ち合わせ	中 国	H29.11.14 ～ H29.11.17	自 己 収 入
教 授	ト ー マ ス テンブルトン	マラリアに関する研究打ち合わせ	中 国	H29.11.14 ～ H29.11.17	自 己 収 入
助 教	樋 泉 道 子	小児肺炎球菌の研究に関する打ち合わ せおよび情報収集, 検診補助	ベ ト ナ ム	H29.11.17 ～ H29.11.20	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	平 山 謙 二	1.NTDsに関するFERCUP会議出席のため	イ ン ド	H29.11.18 ～ H29.11.26	運 営 費 交 付 金
助 教	阿 部 遥	SATREPS及び科研費に係る研究遂行	ガ ボ ン	H29.11.18 ～ H29.12.23	科学研究費 補 助 金
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌の研究に関する打ち合わせ, 情報収集	ベ ト ナ ム	H29.11.19 ～ H29.11.29	受託研究等 収 入
教 授	安 田 二 朗	SATREPSにおける研究遂行	ガ ボ ン	H29.11.21 ～ H29.11.29	受託研究等 収 入
准教授	川 田 均	長期残効型殺虫剤含浸蚊帳と空間忌避剤を併用したマラリア防除トライアル実施	マ ラ ウ イ	H29.11.24 ～ H29.11.24	受託研究等 収 入
教 授	有 吉 紅 也	MRCG 70th Anniversary Symposium 出席	ガ ン ビ ア	H29.11.25 ～ H29.12. 1	運 営 費 交 付 金
准教授	グエン フイン テイ エン	ベトナムプロジェクトシンポジウム出席及びNIHE-NUステアリングコミッティ参加	ベ ト ナ ム	H29.11.26 ～ H29.11.30	受託研究等 収 入
教 授	皆 川 昇	ベトナムPJシンポジウム参加	ベ ト ナ ム	H29.11.27 ～ H29.11.30	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	ベトナムプロジェクトシンポジウム出席及びNIHE-NUステアリングコミッティ参加	ベ ト ナ ム	H29.11.27 ～ H29.11.30	受託研究等 収 入
教 授	森 田 公 一	①シンポジウムおよびステコミ出席 ②ベトナムPJ共同研究打合せ	ベ ト ナ ム	H29.11.27 ～ H29.12. 1	受託研究等 収 入
教 授	有 吉 紅 也	ロンドン大学調印式出席	イ ギ リ ス	H29.12. 2 ～ H29.12.11	運 営 費 交 付 金
助 教	麻 田 正 仁	バベシア原虫に関する研究打ち合わせ	イ ギ リ ス	H29.12. 3 ～ H29.12. 7	科学研究費 補 助 金
教 授	奥 村 順 子	乳幼児死亡の少数民族間における格差に関する現地調査	ラ オ ス	H29.12. 3 ～ H29.12. 9	科学研究費 補 助 金
特 任 研究員	多 賀 優	コンゴにおけるNTDに対する一括診断技術開発とそのサーベイランス整備に関する研究調整のため, 外	コ ン ゴ	H29.12. 3 ～ H29.12.16	受託研究等 収 入
特 任 研究員	ヨンボ カレンダ ダン ジャスティン	コンゴ民主共和国におけるNTDに対する一括診断技術開発とそのサーベイランス整備に関する研究調整のため	コ ン ゴ	H29.12. 3 ～ H29.12.23	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
准教授	モイ メンリン	WHO「地球規模感染症に対する警戒と対応ネットワーク(GOARN)」パートナー総会に出席	ス イ ス	H29.12. 4 ～ H29.12. 9	先 方 負 担
教 授	森 田 公 一	GLOBAL MEETING OF PARTNERS 2017出席	ス イ ス	H29.12. 4 ～ H29.12. 9	自 己 収 入
助 教	竹 内 理 恵	JITMMへの参加, 研究打ち合わせ	タ イ	H29.12. 4 ～ H29.12.12	運 営 費 金 交 付 金
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌の研究に関する打ち合わせ, 情報収集	ベ ト ナ ム	H29.12. 5 ～ H29.12.15	受託研究等 収 入
教 授	皆 川 昇	マラリア感染簡易検査装置の実地評価	ケ ニ ア	H29.12. 6 ～ H29.12.24	受託研究等 収 入
特 任 研究員	溜 宣 子	マラリア感染簡易検査装置の実地評価	ケ ニ ア	H29.12. 6 ～ H29.12.24	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	ロンドン大学調印式の出席のため	イ ギ リ ス	H29.12.10 ～ H29.12.13	運 営 費 金 交 付 金
教 授	橋 爪 真 弘	ロンドン大学調印式の出席のため	イ ギ リ ス	H29.12.10 ～ H29.12.14	運 営 費 金 交 付 金
助 教	キ ム ユンヒ	研究打ち合わせおよび情報収集	韓 国	H29.12.12 ～ H29.12.17	自 己 収 入
准教授	井 上 真 吾	ダニ媒介性ウイルスの分離・同定・解析についての協議及びダニ採集等	ケ ニ ア	H29.12.12 ～ H29.12.21	科学研究費 補 助 金
講 師	上 村 春 樹	マラリアおよびトリパノソーマ症についての研究打合せ	ケ ニ ア	H29.12.12 ～ H29.12.22	運 営 費 金 交 付 金
助 教	比 嘉 由紀子	DNAバーコーディングによる標本整理	タ イ	H29.12.14 ～ H29.12.27	受託研究等 収 入
教 授	ローサ ボーン チャントラ	Clinical trial (デング研究に関する臨床試験)	タ イ	H29.12.17 ～ H29.12.22	科学研究費 補 助 金
助 教	市 川 智 生	科研「ドイツ日本関係史料による新しい明治日本理解」にかかる文献調査	ド イ ツ	H29.12.17 ～ H29.12.24	科学研究費 補 助 金
教 授	皆 川 昇	研究調査打合せ(収集済みデータの解析について)	ベ ト ナ ム	H29.12.27 ～ H29.12.31	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	有 吉 紅 也	ロンドン大学との事務打ち合わせのため	イ ギ リ ス	H30. 1. 4 ～ H30. 1.13	運 営 費 交 付 金
教 授	ローサボーン チャントラ	デングプロジェクト2.Clinical Traial	タ イ	H30. 1. 4 ～ H30. 1.10	科学研究費 補 助 金
助 教	浦 田 秀 造	20th International Conference on Emerging Infectious Diseases in the Pacific Rim	中 国	H30. 1. 7 ～ H30. 1.12	先 方 負 担
教 授	森 田 公 一	第20回汎太平洋新興感染症国際会議・ 日米医学協力計画ウイルス性疾患専門 部会に出席	中 国	H30. 1. 7 ～ H30. 1.12	先 方 負 担
助 教	砂 原 俊 彦	マラリア対策(排除)モデル構築プロ ジェクト運営指導	ミャンマー	H30. 1. 9 ～ H30. 1.29	先 方 負 担
教 授	平 山 謙 二	慢性シャーガス病の合併症早期予測因 子の探索に関する研究打合せ	ボ リ ビ ア	H30. 1.13 ～ H30. 1.19	科学研究費 補 助 金
助 教	阿 部 遥	SATREPSに係る研究打合せ	ガ ボ ン	H30. 1.14 ～ H30. 1.31	受託研究等 収 入
特 任 研究員	牛 島 由 理	SATREPSに係る研究打合せ	ガ ボ ン	H30. 1.14 ～ H30. 1.31	受託研究等 収 入
教 授	山 本 太 郎	1.ロヒンギャ難民支援活動許可申請 2.ロヒンギャ難民支援活動に向けた ニーズ調査実施	バングラデシュ	H30. 1.16 ～ H30. 1.24	自 己 収 入
教 授	皆 川 昇	iDEWSプロジェクトに関するワーク ショップへの参加および研究打ち合わ せ	南アフリカ	H30. 1.24 ～ H30. 1.31	受託研究等 収 入
特 任 研究員	溜 宣 子	iDEWSプロジェクトに関するワーク ショップ参加及び研究打合せ	南アフリカ	H30. 1.25 ～ H30. 2. 3	受託研究等 収 入
講 師	上 村 春 樹	マラリアに関する実験実施	インドネシア	H30. 1.25 ～ H30. 2. 4	科学研究費 補 助 金
教 授	平 山 謙 二	TMGH海外研修についての打ち合せ	ヨ ル ダ ン	H30. 1.27 ～ H30. 2. 1	運 営 費 交 付 金
教 授	ローサボーン チャントラ	MFESGF Fellows Training Programme Meeting出席	ベ ル ギ ー	H30. 1.28 ～ H30. 2. 1	運 営 費 交 付 金
教 授	ローサボーン チャントラ	Responsible Researchのため	タ イ	H30. 2. 2 ～ H30. 2. 7	運 営 費 交 付 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
特 任 研究員	溜 宣 子	マラリア感染簡易検査装置の実地評価	ケ ニ ア	H30. 2. 3 ～ H30. 2.24	受託研究等 収 入
助 教	ク リ ス ウ ン フ ッ ク シ ェ ン	The 4th International Symposium on Environmental Healthにおける打ち合わせ・発表・情報収集	韓 国	H30. 2. 4 ～ H30. 2. 7	受入研究等 収 入
助 教	キ ム ユ ン ヒ	The 4th International Symposium on Environmental Healthにて発表および情報収集を行う	韓 国	H30. 2. 4 ～ H30. 2. 7	先 方 負 担
客 員 研究員	岩 下 華 子	1.下痢起因微生物の検出を行う為の水サンプリングの実施 2. フィールド見学及び調査, 研究打合せ	ベ ト ナ ム	H30. 2. 4 ～ H30. 2.11	寄 附 金
教 授	橋 爪 真 弘	The 4th International Symposium on Environmental Health Regional networksに参加, 情報収集	韓 国	H30. 2. 5 ～ H30. 2. 6	運 営 費 金 交 付 金
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌の研究に関する打ち合わせおよび情報収集	ベ ト ナ ム	H30. 2. 7 ～ H30. 2.23	受託研究等 収 入
教 授	皆 川 昇	ケニアにおけるマラリア媒介蚊調査研究のため	ケ ニ ア	H30. 2. 9 ～ H30. 2.18	自 己 収 入
教 授	森 田 公 一	媒介蚊対策に関する国際協同会議 [RAS5082 Project]に出席	タ イ	H30. 2.11 ～ H30. 2.17	先 方 負 担
特 任 研究員	末 吉 真 季	SATREPSに係る研究打合せ及び研究遂行	ガ ボ ン	H30. 2.12 ～ H30. 2.28	受託研究等 収 入
助 教	阿 部 遥	SATREPSプロジェクトに係る研究打合せ及び研究遂行	ガ ボ ン	H30. 2.12 ～ H30. 3.21	受託研究等 収 入
教 授	安 田 二 朗	共同研究者との打ち合わせ	イ ギ リ ス	H30. 2.15 ～ H30. 2.17	受託研究等 収 入
助 教	竹 内 理 恵	科研費「途上国における健康教育の一般教科への統合内容分析－衛生教育への宗教の影響」による調査	フィリピン	H30. 2.16 ～ H30. 2.20	科学研究費 補 助 金
准教授	川 田 均	長期残効型殺虫剤含浸蚊帳と空間忌避剤を併用したマラリア防除トライアル	マ ラ ウ イ	H30. 2.16 ～ H30. 3.25	受託研究等 収 入
教 授	安 田 二 朗	ラッサウイルスの診断法の確立に関する研究打合せ	ナイジェリア	H30. 2.17 ～ H30. 2.22	受託研究等 収 入
准教授	井 上 真 吾	ケニアにおけるマダニ媒介感染症に関する共同研究打ち合わせ	ケ ニ ア	H30. 2.17 ～ H30. 2.27	科学研究費 補 助 金

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	ローサ ボーン チャントラ	Cholangiocarcinomaについてディス カッション	タ イ	H30. 2.18 ～ H30. 3. 2	自 己 収 入
講 師	菊 池 三穂子	①④⑤住血吸虫症浸淫地フィールド調 査, ②実験打合せ及び結果検討, ③研究 打合せ	フィリピン	H30. 2.18 ～ H30. 3. 3	科学研究費 補 助 金
教 授	有 吉 紅 也	ロンドン大学との事務打合せのため	イ ギ リ ス	H30. 2.19 ～ H30. 2.23	運 営 費 交 付 金
助 教	シャー モハマド モ ニ ル	JSPS論博事業研究者マーティンムウェ ビアの指導	ケ ニ ア	H30. 2.19 ～ H30. 2.24	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	ケニア・ロタ会議出席のため	ケ ニ ア	H30. 2.19 ～ H30. 2.24	運 営 費 交 付 金
教 授	金 子 聰	NTD Advocacy planning meeting出席の ため	ド イ ツ	H30. 2.20 ～ H30. 2.23	運 営 費 交 付 金
特 任 研究員	多 賀 優	NTD会議への出席	ド イ ツ	H30. 2.20 ～ H30. 2.23	受託研究等 収 入
准教授	藤 井 仁 人	デング熱に対するマルチプレックス法 を用いた血清学検査法開発のための共 同研究	スリランカ	H30. 2.23 ～ H30. 3. 3	受託研究等 収 入
助 教	比 嘉 由紀子	デング熱の地域横断的研究として南ア の媒介蚊に関する調査研究	南アフリカ	H30. 2.23 ～ H30. 3. 6	受託研究等 収 入
准教授	早 坂 大 輔	マダニ媒介感染症研究に関する打ち合 わせ	ケ ニ ア	H30. 2.24 ～ H30. 2.28	科学研究費 補 助 金
教 授	有 吉 紅 也	4 大学合同シンポジウム大会出席	タ イ	H30. 2.24 ～ H30. 2.28	自 己 収 入
教 授	二 見 恭 子	デング熱の地域横断的研究として南ア の媒介蚊調査	南アフリカ	H30. 2.24 ～ H30. 3. 4	受託研究等 収 入
教 授	金 子 聰	NTDについての打ち合わせ	コ ン ゴ	H30. 2.26 ～ H30. 3. 1	受託研究等 収 入
助 教	クリス ウン フックシェン	研究課題における打ち合わせおよび データ収集・解析	マレーシア	H30. 2.25 ～ H30. 3. 4	受託研究等 収 入
教 授	平 山 謙 二	慢性シャーガス病の合併症早期予測因 子の探索に関する研究打合せ	ボ リ ビ ア	H30. 2.26 ～ H30. 2.26	自 己 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	長谷部 太	4 大学合同シンポジウム大会出席	タ イ	H30. 2.26 ～ H30. 2.28	自 己 収 入
特 任 研究員	多 賀 優	NTDの共同研究打ち合わせ	コ ン ゴ	H30. 2.26 ～ H30. 3. 1	受託研究等 収 入
准教授	グ エ ン フ ィ ン テ ィ エ ン	デングプロジェクトに関する研究打合せ	ベ ト ナ ム	H30. 2.28 ～ H30. 3. 3	科学研究費 補 助 金
教 授	皆 川 昇	iDEWSプロジェクト打合せ	南アフリカ	H30. 2.28 ～ H30. 3. 6	自 己 収 入
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌の研究に関する打ち合わせおよび情報収集, IMRP2018にて情報収集	ベ ト ナ ム	H30. 3. 1 ～ H30. 3. 2	受託研究等 収 入
教 授	金 子 聡	マルチ事業での次期調査に関する地域との調整	ケ ニ ア	H30. 3. 1 ～ H30. 3. 8	受託研究等 収 入
教 授	二 見 恭 子	ケニアの害虫類捕獲と研究機関視察③ 疾病媒介蚊調査	ケ ニ ア	H30. 3. 4 ～ H30. 3.14	受託研究等 収 入
助 教	ク リ ス ウ ン フ ッ ク シ ェ ン	環境疫学に関するデータについてディスカッション	インドネシア	H30. 3. 5 ～ H30. 3. 9	受託研究等 収 入
教 授	ローサボーン チャントラ	Ethics Review Committee Meeting	ミャンマー	H30. 3. 5 ～ H30. 3.10	先 方 負 担
教 授	皆 川 昇	蚊媒介性感染症の地域横断的研究に関する打ち合わせ	台 湾	H30. 3. 6 ～ H30. 3. 8	受託研究等 収 入
教 授	吉田 レイミント	小児肺炎球菌の研究に関する打ち合わせおよび情報収集, IMRP2018にて情報収集	シンガポール	H30. 3. 6 ～ H30. 3. 9	受託研究等 収 入
助 教	吉 原 圭 亮	2nd International Meeting on Respiratory Pathogens 2018出席における発表及び情報収集	シンガポール	H30. 3. 6 ～ H30. 3.10	学 術 研 究 助 成 基 金
客 員 研究員	岩 下 華 子	研究打合せ	ベ ト ナ ム	H30. 3. 6 ～ H30. 3.14	寄 附 金
教 授	奥 村 順 子	10th Asia Pacific Global Summit on Healthcare における基調講演のため	シンガポール	H30. 3.10 ～ H30. 3.15	科学研究費 補 助 金
教 授	安 田 二 朗	SATREPSにかかる研究遂行及び打合せ	ガ ボ ン	H30. 3.10 ～ H30. 3.19	受託研究等 収 入

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
特 任 研究員	末 吉 真 季	SATREPSに係る研究打合せ及び研究遂行	ガ ボ ン	H30. 3.10 ～ H30. 3.21	受託研究等 収 入
特 任 研究員	牛 島 由 理	SATREPSにかかる研究の遂行及び打合せ	ガ ボ ン	H30. 3.10 ～ H30. 3.30	受託研究等 収 入
教 授	ローサボーン チャントラ	Ethical Review Meeting	タ イ	H30. 3.11 ～ H30. 3.13	先 方 負 担
特 任 研究員	多 賀 優	電子システムサーバプログラムの調整 他	エ ジ プ ト	H30. 3.17 ～ H30. 3.22	受託研究等 収 入
教 授	金 子 聰	電子システムサーバプログラムの調整 他	エ ジ プ ト	H30. 3.18 ～ H30. 3.22	受託研究等 収 入
准教授	グエン フィ テイ エ ン	デングプロジェクトに関する研究打合せ	ベ ト ナ ム	H30. 3.18 ～ H30. 3.24	科学研究費 補 助 金
教 授	ローサボーン チャントラ	Cholangiocarcinomaについて ディスカッション	タ イ	H30. 3.25 ～ H30. 3.30	自 己 収 入
教 授	皆 川 昇	「BOBA Network First Open Network Meeting」参加による情報収集	イ ギ リ ス	H30. 3.27 ～ H30. 3.29	先 方 負 担

9 外国人研究者の受け入れ

9. 1 平成29年度に受け入れた外国人研究者

分野等	氏名	国籍	受入期間	経費	備考
ウイルス学	Aung Min Soe アウン ミン ソエ	ミャンマー	H29.7.10 ～H29.7.14	科学技術 振興機構	
	Maarten Smits マーティン スミッツ	オランダ	H29.9.21 ～H30.4.30	自費	
	Nor Azila Muhammad Azami ノーアジラ モハマッド アザミ	マレーシア	H30.1.29 ～H30.2.24	国立大学等 法人	
新興感染症学	Peter Owusu Afriyie ピーター オウス アフリイ	ガーナ	H29.8.21 ～H29.9.1	自費	
原虫学	Gitaka Jesse Njihia ギタカ ジェッセ ジヒア	ケニア	H29.5.17 ～H29.5.31	運営交付金	
	David Joseph Conway デイビッド ジョーゼフ コンウェイ	イギリス	H29.9.3 ～H29.9.5	他機関経費	
	Bruce Malcolm Russell ブルース マルコルム ラッセル	オーストラリア	H29.9.11 ～H29.9.17	自費	
	Jie Ying Ong ジエ イン オン	シンガポール	H29.9.11 ～H29.9.16	自費	
	Han Eun-Taek ハン ウンテク	韓国	H29.9.12 ～H29.9.14	自費	
	Pandey Kishor パンディ キシオル	ネパール	H29.10.11 ～H30.3.13	自費	
	Skmarwati Basuki スクマワティ バスキ	インドネシア	H29.11.26 ～H29.11.30	受託研究費 (二国間交流事業)	
寄生虫学	Eman Abdelazeem Abuelwafa Mousa イーマン アブデラジーム アブエルワファ モウサ	エジプト	H29.6.28 ～H30.6.27	エジプト政府 による奨学金	
免疫遺伝学	Levanya Martina Marbun レバニャ マルティナ マルブン	インドネシア	H29.6.5 ～H29.8.30	自費	
	Hardiani Alexandra ハーディアニ アレッサンドラ	インドネシア	H29.6.5 ～H29.8.30	自費	
	Mohammed Nasir Shuaibu モハメド ナシル シュアイブ	ナイジェリア	H29.9.26 ～H29.9.29	自費	
	Tran Quang Thach トラン ウエン タツ	ベトナム	H29.11.29 ～H30.3.31	自費	
	Malla Rao メラ ラオ	米 国	H30.2.14 ～H30.2.18	自費	
	Sanjai Kumar サンジャイ クマール	米 国	H30.2.14 ～H30.2.18	自費	
	Liwang Cui リウオン キ	米 国	H30.2.15 ～H30.2.18	自費	
	Abhay Satoskar アボイ サトスカー	米 国	H30.2.15 ～H30.2.18	自費	
	Patrapuvich Rapatbhorn パタプウイシユラパポー	タイ	H30.2.15 ～H30.2.17	国立国際医療 研究センター	
病理学	TANG JIANXIA タン ジアンシア	中国	H29.4.28 ～H29.5.12	自費	

分 野 等	氏 名	国 籍	受入期間	経 費	備 考
病 理 学	Claudia Sofia PARADELA GOMES クラウディア ソフィア パラデラ ゴメス	ポルトガル	H30.2.8 ～H30.7.7	科学研究費 補助金	
生 態 疫 学	Job Isaccs Wasonga ジョブ アイザック ワソonga	ケ ニ ア	H29.10.4 ～H29.10.25	受託研究等 収入	
	Job Isaccs Wasonga ジョブ アイザック ワソonga	ケ ニ ア	H30.1.20 ～H30.2.1	受託研究等 収入	
	Samson Muuo Nzou サムソン ムウオ ンゾウ	ケ ニ ア	H30.1.29 ～H30.2.16	受託研究等 収入	
	Anne Wanjiru Mwangi アン ワンジル ムワンジ	ケ ニ ア	H30.1.29 ～H30.2.16	受託研究等 収入	
国 際 保 健 学	Giulia Gaudenzi ジュリア ガウデンツィ	スウェーデン	H29.6.20 ～H29.8.21	運 営 費 交 付 金	
病 害 動 物 学	RAJENDRA MAHARAJ ラジェンドラ マハラ	南アフリカ	H29.4.25 ～H29.4.26	受託研究等 収入	
	NATASHIA MORRIS ナターシャ モリス	南アフリカ	H29.4.25 ～H29.4.26	受託研究等 収入	
	KAPWATA NGOZA THANDI ETHEL カプワタ ンゴザ タンディ エセル	南アフリカ	H29.4.25 ～H29.4.26	受託研究等 収入	
小 児 感 染 症 学	Le Thi Thu Thao レ チ ツ タオ	ベ ト ナ ム	H29.8.21 ～H29.9.2	受託研究費 等 収 入	
	Dang Duc Anh ダン ドック アン	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
	Nguyen Thi Hien Anh グエン ティ ヒエン アン	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
	Vien Quang Mai ビエン クアン マイ	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
	Tran Minh The トラン ミン テ	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
	Le Thuy Lien レ トウイ リエン	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
	Hoang Thi Ngoc Anh ホアン ティ ゴク アン	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
	Lam Quang Chung ラム クアン チュン	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
	Phu Quoc Viet フ クオック ビエト	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
	Le Hong Quan レ ホン クアン	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
	Luu Trung Hieu ル トラン ヒエウ	ベ ト ナ ム	H29.10.23 ～H29.10.27	受託研究費 等 収 入	
臨 床 開 発 学	Kesara Na-Bangchang ケセラ ナーバチャン	タ イ	H29.7.7 ～H29.7.7	先 方 負 担 (タマサート大学)	
	Tullayakorn Plengsuriyakarn トゥンラヤゴーン ペンスリヤガーン	タ イ	H29.7.7 ～H29.7.14	先 方 負 担 (タマサート大学)	
ケ ニ ア 拠 点	Martin Bundi Mwebia マーティン バンディ ムウェビア	ケ ニ ア	H29.6.27 ～H29.7.28	運営費交付金	
	Martin Bundi Mwebia マーティン バンディ ムウェビア	ケ ニ ア	H30.1.22 ～H30.1.25	運営費交付金	

10 研究成果の発表状況

10. 1 研究業績

ウイルス学分野

- 1) **Kayesh MEH, Kitab B, Sanada T, Hayasaka D, Morita K, Kohara M, Tsukiyama-Kohara K** : Susceptibility and initial immune response of Tupaia belangeri cells to dengue virus infection. *Infect Genet Evol* 51: 203-210, 2017
- 2) **Sha M, Odoyo E, Wandera E, Kathiiko C, Bundi M, Miringu G, Guyo S, Komoto S, Nyangao J, Karama M, Tsuji T, Taniguchi K, Morita K, Ichinose Y** : Burden of rotavirus and enteric bacterial pathogens among children under five years old hospitalized with diarrhea in suburban and rural areas in Kenya. *Jpn J Infect Dis* 70(4): 442-447, 2017
- 3) **Toda M, Njeru I, Zurovac D, Kareko D, O-Tipo S, Mwau M, Morita K** : Understanding mSOS: A qualitative study examining the implementation of a text-messaging outbreak alert system in rural Kenya. *PLoS One* 12(6): e0179408, 2017
- 4) **Moi ML, Nguyen TTT, Nguyen CT, Vu TBH, Ngwe Tun MM, Pham TD, Pham NT, Tran T, Morita K, Le TQM, Dang DA, Hasebe F** : Zika virus infection and microcephaly in Vietnam. *Lancet Infect Dis* 17(8): 805-806, 2017
- 5) **Ngwe Tun MM, Muthugala RV, Nguyen TTT, Pham HLL, Le THT, Dang TD, Nguyen VH, Le TQM, Moi ML, Buerano CC, Morita K, Hasebe F** : Dengue Associated Acute Encephalitis Syndrome Cases in Son La Province, Vietnam in 2014. *Jpn J Infect Dis* 70(4): 357-361, 2017
- 6) **Urakami A, Ngwe Tun MM, Moi ML, Sakurai A, Ishikawa M, Kuno S, Ueno R, Morita K, Akahata W** : An Envelope-Modified Tetravalent Dengue Virus-Like-Particle Vaccine Has Implications for Flavivirus Vaccine Design. *J Virol* 91(23): e01181-17, 2017 (IF: 4.663)
- 7) **Raekiansyah M, Mori M, Nonaka K, Agoh M, Shiomi K, Matsumoto A, Morita K** : Identification of novel antiviral of fungus-derived brefeldin A against dengue viruses. *Trop Med Health* 45: 32, 2017
- 8) **Pandey K, Pandey BD, Chaurasiya RR, Thakur M, Neupane B, Shah Y, Ngwe Tun MM, Morita K** : Evidence of Chikungunya virus circulation in the Terai region of Nepal in 2014 and 2015. *Trans R Soc Trop Med Hyg* 111(7): 294-299, 2017
- 9) **Nguyen HLK, Pham HTT, Nguyen TV, Hoang PVM, Le TQM, Takemura T, Hasebe F, Hayasaki D, Yamada A, Hotta K** : The genotypes of *Orientia tsutsugamushi*, identified in scrub typhus patients in northern Vietnam. *Trans R Soc Trop Med Hyg* 111(3): 137-139, 2017
- 10) **Kobashi K, Harada T, Adachi Y, Mori M, Ihara M, Hayasaka D** : Comparative ecotoxicity of imidacloprid and dinotefuran to aquatic insects in rice mesocosms. *Ecotoxicol Environ Saf* 138: 122-129, 2017
- 11) **Moi ML, Ami Y, Muhammad Azami NA, Shirai K, Yoksan S, Suzaki Y, Kitaura K,**

- Lim CK, Saijo M, Suzuki R, Takasaki T, Kurane I** : Marmosets (*Callithrix jacchus*) as a non-human primate model for evaluation of candidate dengue vaccines: induction and maintenance of specific protective immunity against challenges with clinical isolates. *J Gen Virol* 98(12): 2955-2967, 2017
- 12) **Yamanaka A, Moi ML, Takasaki T, Kurane I, Matsuda M, Suzuki R, Konishi E** : Utility of Japanese encephalitis virus subgenomic replicon-based single-round infectious particles as antigens in neutralization tests for Zika virus and three other flaviviruses. *J Virol Methods* 243: 164-171, 2017
- 13) **Yamanaka A, Moi ML, Takasaki T, Kurane I, Konishi E** : Neutralizing and enhancing antibody responses to five genotypes of dengue virus type 1 (DENV-1) in DENV-1 patients. *J Gen Virol* 98(2): 166-172, 2017
- 14) **Tajima S, Nakayama E, Kotaki A, Moi ML, Ikeda M, Yagasaki K, Saito Y, Shibasaki KI, Saijo M, Takasaki T** : Whole Genome Sequencing-Based Molecular Epidemiologic Analysis of Autochthonous Dengue Virus type-1 Strains Circulating in Japan in 2014. *Jpn J Infect Dis* 70(1): 45-49, 2017
- 15) 森田公一：感染症の脅威：エボラ病, MERS, デング熱, ジカ熱など. *日本臨床微生物学雑誌* 27(1):107, 2017
- 16) モイ・メイリン, 森田公一：ジカウイルスの世界的な流行と最近の知見. *医学のあゆみ* Vol. 260: 528-532, 2017
- 17) 鍋島 武, 森田公一：蚊媒介性ウイルスはどうやって世界中に広がっていくのか? . *臨床とウイルス* Vol.44(5):209-215, 2017
- 18) 森田公一：グローバル化時代における One Health と国際協力, *最新医学*, Vol.72(4):584-589, 2017
- 19) 森田公一：デング熱・デング出血熱, *臨床と微生物*, Vol.44:249-252, 2017
- 20) 森田公一：デング熱・ジカ熱, in 別冊・医学のあゆみ「グローバル感染症最前線 NTDs の先へ」, 北潔編集, p39-45, 2017
- 21) 森田公一：デング熱, *小児内科*, Vol.49:1643-1646, 2017
- 22) 森田公一：日本脳炎, *臨床とウイルス*, Vol.45:331-335, 2017
- 23) **Kyaw AK, Ngwe Tun MM, Moi ML, Nabeshima T, Soe KT, Thwe SM, Myint AA, Maung KTT, Aung W, Hayasaka D, Buerano CC, Thant KZ, Morita K** : Clinical virological and epidemiological characterization of dengue outbreak in Myanmar, 2015. *Epidemiol Infect.* Vol.145(9):1886-1897. 2017
- 24) **Mohammad Enamul Hoque Kayesh, Bouchra Kitab, Takahiro Sanada, Daisuke Hayasaka, Kouichi Morita, Michinori Kohara, Kyoko Tsukiyama-Kohara** : Susceptibility and initial immune response of *Tupaia belangeri* cells to dengue virus infection. *Infection, Genetics and Evolution.* Vol.51:203-210, 2017.

新興感染症学分野

- 25) **Kurosaki Y*, Ueda MT, Nakano Y, Yasuda J, Koyanagi Y, Sato K, Nakagawa S*** : Different effects of two mutations on the infectivity of Ebola virus glycoprotein in nine

- mammalian species. *J Gen Virol*, 99(2):181-186, 2018.
- 26) **Kurosaki, Y., Martins, D.B.G., Kimura, M., Catena, A.D.S., Borba, M.A.C.S.M., Mattos, S.D.S., Abe, H., Yoshikawa, R., de Lima Filho, J.L., and *Yasuda, J** : Development and evaluation of a rapid molecular diagnostic test for Zika virus infection by reverse transcription loop-mediated isothermal amplification. *Scientific Reports*, 7(1):13503, 2017.
 - 27) **Howson, E.L.A., Kurosaki, Y., Yasuda, J., Takahashi, M., Goto, H., Gray, A.R., Mioulet, V., King, D.P., and Fowler, V.L** : Defining the relative performance of isothermal assays that can be used for rapid and sensitive detection of foot-and-mouth disease virus. *Journal of Virological Methods*, 249, 102-110, 2017.
 - 28) **Oloniniyi, O.K., Kurosaki, Y., Miyamoto, H., Takada, and *Yasuda, J** : Rapid detection of all known ebolavirus species by reversetranscription-loop-mediated isothermal amplification (RT-LAMP). *Journal of Virological Methods*, 246, 8-14, 2017.
 - 29) **Ueda, M.T., Kurosaki, Y., Izumi, T., Nakano, Y., Oloniniyi, O.K., Yasuda, J., Koyanagi, Y., Sato, K., and Nakagawa, S** : Functional mutations in spike glycoprotein of Zaire ebolavirus associated with an increase in infection efficiency. *Genes to Cells*, 22(2), 148-159, 2017.
 - 30) **Sakurai, T., Nakagawa, S., Bai, H., Bai, R., Kusama, K., Ideta, A., Aoyagi, Y., Kaneko, K., Iga, K., Yasuda, J., Miyazawa, T., and Imakawa, K** : Novel endogenous retrovirus-derived transcript expressed in the bovine placenta is regulated by WNT signaling. *Biochemical Journal*, 474, 3499-3512, 2017.
 - 31) **Watanabe, K., Ishikawa, T., Otaki, H., Mizuta, S., Hamada, T., Nakagaki, T., Ishibashi, D., Urata, S., Yasuda, J., Tanaka, Y., and Nishida, N** : Structure-based drug discovery for combating influenza virus by targeting the PA-PB1 interaction. *Scientific Reports*, 7(1):9500, 2017.
 - 32) **Kusama, K., Bai, R., Nakamura, K., Okada, S., Yasuda, J., and Imakawa, K** : Endometrial factors similarly induced by IFNT2 and IFNTc1 through transcription factor FOXS1. *PLOS One*, 12(2): e0171858, 2017.

原虫学分野

- 33) **Maeno Y, Culleton R, Quang NT, Kawai S, Marchand RP, Nakazawa S** : Plasmodium knowlesi and human malaria parasites in Khan Phu, Vietnam: Gametocyte production in humans and frequent co-infection of mosquitoes. *Parasitology* 144(4): 527-535, 2017
- 34) **Musinguzi SP, Sukanuma K, Asada M, Laohasinnarong D, Sivakumar T, Yokoyama N, Namangala B, Sugimoto C, Suzuki Y, Xuan X, Inoue N** : A PCR-based survey of animal African trypanosomosis and selected piroplasm parasites of cattle and goats in Zambia. *J Vet Med Sci* 78(12):1819-24, 2017

- 35) **Gitaka JN, Takeda M, Kimura M, Idris ZM, Chan CW, Kongere J, Yahata K, Muregi FW, Ichinose Y, Kaneko A, Kaneko O** : Selections, frameshift mutations, and copy number variation detected on the *surf4.1* gene in the western Kenyan *Plasmodium falciparum* population. *Malar J* 16: 98, 2017
- 36) **Zhu X, He Y, Liang Y, Kaneko O, Cui L, Cao Y** : Tryptophan-rich domains of *Plasmodium falciparum* SURFIN_{4.2} and *Plasmodium vivax* PvSTP2 interact with membrane skeleton of red blood cell. *Malar J* 16(1):121, 2017
- 37) **Maeno Y, Quang NT, Culleton R, Kawai S, Masuda G, Hori K, Nakazawa S, Marchand RP** : Detection of the *Plasmodium falciparum* Kelch-13 gene P553L mutation in sporozoites isolated from mosquito salivary glands in South-Central Vietnam. *Parasit Vectors* 10(1):308, 2017
- 38) **Abkallo HM, Martinelli A, Inoue M, Ramaprasad A, Xangsayarath P, Gitaka J, Tang J, Yahata K, Zoungana A, Mitaka H, Acharjee A, Datta PP, Hunt P, Carter R, Kaneko O, Mustonen V, Illingworth CJR, Pain A, Culleton R** : Rapid identification of genes controlling virulence and immunity in malaria parasites. *PLOS Pathog* 13(7):e1006447, 2017.
- 39) 矢幡一英 : マラリア原虫の赤血球侵入と放出の分子メカニズム. *細胞*49(14):40-43, 2017.
- 40) **Masatani T, Hayashi K, Andoh M, Tateno M, Endo Y, Asada M, Kusakisako K, Tanaka T, Gokuden M, Hozumi N, Nakadohzono F, Matsuo T** : Detection and molecular characterization of *Babesia*, *Theileria*, and *Hepatozoon* species in hard ticks collected from Kagoshima, the southern region in Japan. *Ticks Tick Borne Dis.* 8(4):581-587. 2017
- 41) **Liu M, Asada M, Cao S, Moumouni PFA, Vudriko P, Efstratiou A, Hakimi H, Masatani T, Sunaga F, Kawazu SI, Yamagishi J, Xuan X** : Transient transfection of intraerythrocytic *Babesia gibsoni* using elongation factor-1 alpha promoter. *Mol Biochem Parasitol.* 216:56-59, 2017.
- 42) **Yamagishi J, Asada M, Hakimi H, Tanaka TQ, Sugimoto C, Kawazu SI** : Whole-genome assembly of *Babesia ovata* and comparative genomics between closely related pathogens. *BMC Genomics.* 18(1):832, 2017.

寄生虫学分野

- 43) **Bao LQ, Nhi DM, Huy NT, Hamano S, Hirayama K** : Tacrolimus prevents murine cerebral malaria. *Immunology* 2017, 150(2): 155-161.
- 44) **Chadeka EA, Nagi S, Sunahara T, Cheruiyot NB, Bahati F, Ozeki Y, Inoue M, Osada-Oka M, Okabe M, Hirayama Y, Changoma M, Adachi K, Mwendu F, Kikuchi M, Nakamura R, Dan Justin YK, Kaneko S, Hirayama K, Shimada M, Ichinose Y, Njenga SM, Matsumoto S, Hamano S** : Spatial Distribution and Risk Factors of *Schistosoma haematobium* and Hookworm Infections among Schoolchildren in Kwale, Kenya. *PLoS Negl. Trop. Dis.* 2017, 11(9): e0005872
- 45) **Deloer S, Nakamura R, Kikuchi M, Moriyasu T, Kalenda Y.D.J, Mohammed E.S,**

Senba M, Iwakura Y, Yoshida H, Hamano S : IL-17A contributes to reducing IFN- γ / IL-4 ratio and persistence of *Entamoeba histolytica* during intestinal amebiasis. *Parasitol. Int.* 2017; 66(6): 817-823.

- 46) **Shimokawa C, Senba M, Kobayashi S, Kikuchi M, Obi S, Olia A, Hamano S, Hisaeda H** : Intestinal inflammation-mediated clearance of amebic parasites is dependent on IFN- γ . *J. Immunol.* 2017; 200(3): 1101-1109. doi: 10.4049/jimmunol.1700806.

免疫遺伝学分野

- 47) **Bao LQ, Nhi DM, Huy NT, Hamano S, Hirayama K** : Tacrolimus prevents murine cerebral malaria. *Immunology.* 2017 Feb;150(2):155-161. doi: 10.1111/imm.12661. Epub 2016 Sep 29. PMID: 27546479. PMCID: PMC5213038.
- 48) **Huy NT, Chi PL, Nagai J, Dang TN, Mbanefo EC, Ahmed AM, Long NP, Thoa LT, Hung LP, Titouna A, Kamei K, Ueda H, Hirayama K** : Antimicrob Agents Chemother. 2017 Jan 24;61(2). pii: e01607-16. doi: 10.1128/AAC.01607-16. Print 2017 Feb. PMID: 27919903. PMCID: PMC5278743.
- 49) **Vuong HG, Altibi AM, Abdelhamid AH, Ngoc PU, Quan VD, Tantawi MY, Elfil M, Vu TL, Elgebaly A, Oishi N, Nakazawa T, Hirayama K, Katoh R, Huy NT, Kondo T** : The changing characteristics and molecular profiles of papillary thyroid carcinoma over time: a systematic review. *Oncotarget.* 2017 Feb 7;8(6):10637-10649. doi: 10.18632/oncotarget.12885. PMID: 27793009.
- 50) **Ke XD, Shen S, Song LJ, Yu CX, Kikuchi M, Hirayama K, Gao H, Wang J, Yin X, Yao Y, Liu Q, Zhou W** : Characterization of *Schistosoma japonicum* CP1412 protein as a novel member of the ribonuclease T2 molecule family with immune regulatory function. *Parasit Vectors.* 2017 Feb 17;10(1):89. doi: 10.1186/s13071-016-1962-y. PMID: 28212670. PMCID: PMC5316207.
- 51) **Chi PL, Nagai J, Dang TN, Mbanefo EC, Ahmed AM, Long NP, Thoa LT, Hung LP, Tiouna A, Kamei K, Ueda H, Hirayama K** : Desmoteplase for Acute Ischemic Stroke: A Systematic Review and Metaanalysis of Randomized Controlled Trials. *CNS Neurol Disord Drug Targets.* 2017;16(7):789-799
- 52) **Nhi DM, Huy NT, Hamano S, Hirayama K** : Tacrolimus prevents murine cerebral malaria. *Immunology.* 2017 Feb; 150(2):156-161
- 53) **Altibi AM, Abdelhamid AH, Ngoc PU, Quan VD, Tantawi MY, Elfil M, Vu TL, Elgebaly A, Oishi N, Nakazawa T, Hirayama K, Katoh R, Huy NT, Kondo T** : The changing characteristics and molecular profiles of papillary thyroid carcinoma over time: a systematic review. *Oncotarget.* 2017 Feb 7;8(6):10637-10649
- 54) **Shen S, Song LJ, Yu CX, Kikuchi M, Hirayama K, Gao H, Wang J, Yin X, Yao Y, Liu Q, Zhou W** : Characterization of *Schistosoma japonicum* CP1412 protein as a novel member of the ribonuclease T2 molecule family with immune regulatory function. *Parasit Vectors.* 2017 Feb 17;10(1):89
- 55) **Abushouk AI, Saad S, Eltoomy M Mahmoud O, Hassan HM, Aboelmakarem A,**

- Fotoh AA, Althaher F, Huy NT, Hirayama K** : Desmoteplase for Acute Ischemic Stroke: A Systematic Review and Metaanalysis of Randomized Controlled Trials. *CNS Neurol Disord Drug Targets*. 2017;16(7):789-799
- 56) **Koonrungsomboon N, Kasse D, Cisse SD, Diallo SB, Cherif F, Camara F, Kone A Avenido EF, Diakite M, Diallo MP, Le Gall E, Cisse M, Karbwang J, Hirayama K** : Ebola virus disease in children during the 2014-2015 epidemic in Guinea: a nationwide cohort study. *Eur J Pediatr*. 2017 Jun; 176(6):791-796
- 57) **Han NHB, El-Shabouny AE, Makram AM, Abd-Elhay FA, Dang TN, Hiew NLT, Huong VTQ, Tung TH, Hirayama K, Huy NT** : Post-dengue acute disseminated encephalomyelitis: A case report and meta-analysis. *PLoS Negl Trop Dis*. 2017 Jun 30;11(6):e0005715
- 58) **Ahmed AM, Titouna A, Elmaraezy A, Trang NT, Phuc Long N, Hoang Anh N, Diem Nghi T, The Hung B, Van Hieu M, Ky Anh N, Huy NT, Hirayama K** : Association of glucose-6-phosphate dehydrogenase deficiency and malaria: a systematic review and meta-analysis. *Sci Rep*. 2017 Apr 6;7:45963
- 59) **Truong DH, AboElnas MM, Idress H, Metwali HG, Vuong NL, Saad OA, Hirayama K, Huy NT** : The Effect of Endothelin Receptor Antagonists in Patients with Eisenmenger Syndrome: A Systematic Review. *Am J Cardiovasc Drugs*. 2017 Jun 28
- 60) **Ebraheem Morra m, tarek Mohammed A, Al-Habaa A, Elgebaly A, Abdelmotaleb Ghanzy, Khalil AM, Tien Huy N, Hirayama K** : Risk of caract among inventional cardiologists and catheterization lab staff: A systematic review and meta analysis. *Catheter Cardiovasc Interv*. 2017 Jul;90(1):1-9.
- 61) **Bhandari R, Shakya G, Shrestha SK, Cherif MS, Ghimire P, Klungthong C, Yoon IK, Hirayama K, Na-Bangchang K, Fernandez S** : Dengue Virus Serotypes 1 and 2 Responsible for Major Dengue Outbreaks in Nepal: Clinical, Laboratory, and Epidemiological Features. *Am J Trop Med Hyg*. 2017 Jul 31
- 62) **Truong DH, AboAlnas MM, Idress H, Metwali HG, Vuong NL, Saad OA, Hirayama k, Huy NT** : The Effect of Endothelin Receptor Antagonists in Patients with Eisenmenger Syndrome: Systematic Review. *Am J Cardiovasc Drugs*. 2017 Jun 28
- 63) **Doheim MF, Mattar Om, Sherif NA, Truong DH, Hoa PTL, Hirayama K, Huy NT** : Beclabuvir in combination with asunaprevir and daclatasvir for hepatitis C virus genotype 1 infection: A systematic review and meta-analysis. *J Med Virol*. 2017 Sep 11.
- 64) **Nagi S, Sunahara T, Cheruiyot NB, Bahati F, Ozeki Y, Inoue M, Osada-Oka M, Okabe M, Hirayama K, Shimada M, Ichinose Y, Njenga SM, Matsumoto S, Hamano S** : Spatial distribution and risk factors of *Schistosoma haematobium* and hookworm infections among schoolchildren in Kwale, Kenya. *PLoS Negl Trop Dis*. 2017 Sep;11(9):e0005872
- 65) **Thanh LV, Kamel MG, Abdelrahman SAM, El-Mekawy M, Mokhtar MA, Ali AA, Hoang NNN, Vuong NL, Abd-Elhay FA, Omer OA, Mohamed AA, Hirayama K, Huy NT** : Optimal percutaneous coronary intervention in patients with ST-elevation

myocardial infarction and multivessel disease:An updated, large-scale systematic review and meta-analysis.Int J Cardiol.2017 Oct 1;244:67-76

- 66) **Morra ME, Truong ND, Turk T, Elshafie A, Foly A, Hien Tam DN, Iraqi A, Hong Van TT, Elgebaly A, Ngoc TN,Vu TLH, Chu NT, Hirayama K, Karbwang J, Huy NT** : A systematic review finds underreporting of ethics approval, informed consent, and incentives in clinical trials.J Clin Epidemiol.2017 Nov;91:80-86.
- 67) **Elshafay A, Kansakar AR, Mehیار GM, Dang NPH, Mattar PM, Iqtadar S, Mostafa MR, Hai VN, Vu TL, Ghazy AA, Kaboub F, Huy NT, Hirayama K** : Difinition of “persistent vomiting” and meta-analysis of randomized control trials. Clin Rheumatol.2017 Dec;36(12):2697-2707
- 68) **Kien ND, Elmaraezy A, Abdelaziz OAM, Elsayed AL, Halhouli O, Montasr AM, Vu TL, HoC Foly AS, Phi AP, Abdullah WM, Mikhail M, Milne E, Hirayama K, Huy NT** : Early vaccination protests against childhood leukemia: A systematic review and meta-analysus.Sci Rep.2017 Nov 22;7(1):15986
- 69) **Tinh NX, Salman S, Shaheen YS, Othman EB, Elhady MT, Kansakar AR, Tran L, Van L, Hirayama K, Huy NT** : Ginsenoside Rk1 bioactivity: a systematic review. PeerJ.2017 Nov 17;5:e3993
- 70) **Khattab M, Ahmed AM, Turk T, Sakr N, Khalil A, Abdelhalim M, Sawaf B, Hirayama K, Hyu NT** : The therapeutic effect of probiotics on rheumatoid arthritis:a systematic review and meta-analysis of randomized control trials.Clin Rheumatol.2017 Dec;36(12):2697-2707
- 71) **Ahmed AM, Elhady MT, Ngo HT, Vu TL, Sang TK, Campos-Alberto E, Sayed A, Mizukami S, Na-Bangchang K, Huy NT, Hirayama K, Karbwang J** : Medicinal plants for in vitro antiplasmodial activities: A systematic review of literature. Parasitol Int.2017 Dec
- 72) **Nakamura R, kukuchi M, Moriyasu T, Kalenda YDJ, Mohammed ES, Senba M, Iwakura Y, Yoshida H, Hamano S** : IL-17A contributes to reducing IFN- γ /IL-4 ratio and persistence of Entamoeba histolyca during intestinal amebiasis.Parasitol Int.2017 Dec;66(6):817-823

病理学分野

- 73) **Ishikawa C, Senba M, Mori N** : Butein inhibits NF- κ B, AP-1 and Akt activation in adult T-cell leukemia/lymphoma. Int J Oncol, 2017, 51: 633-643.
- 74) **Ishikawa C, Senba M, Hashimoto T, Imaizumi A, Mori N** : Expression and significance of Pim-3 in adult T-cell leukemia. Eur J Hematol, 2017, 99: 495-504.
- 75) **DeLoer S, Nakamura R, Kikuchi M, Moriyasu T, Kalenda YJ, Mohammed ES, Senba M, Iwakura Y, Yoshida H, Hamano S** : Parasitol Int, 2017, 817-823.

生態疫学分野

- 76) **Chadeka EA, Nagi S, Sunahara T, Cheruiyot NB, Bahati F, Ozeki Y, Inoue M, Osada-Oka M, Okabe M, Hirayama Y, Changoma M, Adachi K, Mwende F,**

- Kikuchi M, Nakamura R, Kalenda YDJ, Kaneko S, Hirayama K, Shimada M, Ichinose Y, Njenga SM, Matsumoto S, Hamano S** : (2017). "Spatial distribution and risk factors of *Schistosoma haematobium* and hookworm infections among schoolchildren in Kwale, Kenya." *PLoS Negl Trop Dis* 11(9): e0005872.
- 77) **Kato K, Makiuchi T, Cheng X, Tachibana H** : (2017). "Comparison of hemolytic activity of the intermediate subunit of *Entamoeba histolytica* and *Entamoeba dispar* lectins." *PLoS One* 12(7): e0181864.
- 78) **Ndemwa M, Wanyua S, Kaneko S, Karama M, Anselimo M** : (2017). "Nutritional status and association of demographic characteristics with malnutrition among children less than 24 months in Kwale County, Kenya." *The Pan African Medical Journal* 28(265).

国際保健学分野

- 79) **Junji S, Takayuki W, Yu S, Tatsuya I, Katsumi M, Taro Y, Tadayuki A** : *Mycobacterium tuberculosis* Transmission among Elderly Persons, Yamagata Prefecture, Japan, 2009–2015. *Emerging Infectious Diseases*. Volume 23, Number 3—March 2017.
- 80) **Hiromu I, Yuki K, Eisuke H, Jin Y** : The promotion of cooperation by the poor in dynamic chicken games. *Scientific Reports* 7: 43377, 2017.
- 81) **Li WT, Chang HW, Pang VF, Wang FI, Liu CH, Chen TY, Guo JC, Wada T, Jeng CR** : Mycolactone-producing *Mycobacterium marinum* infection in captive Hong Kong warty newts and pathological evidence of impaired host immune function. *Diseases of Aquatic Organisms*. 2017 Mar 21;123(3):239-249.
- 82) **Yasuo Ohkoshi, Takayuki Wada, Yukari Fukushima, Hiromi Murabayashi, Yasunari Takakuwa, Kaoru Nishiyama, Tsukasa Shiraishi, Chie Nakajima, Yasuhiko Suzuki, and Shin-ichi Yokota** : *Genome Announc*. 2017 Nov; 5(44): e01239-17.
- 83) 小堀栄子, 前田祐子, 山本太郎 : 日本在住外国人の死亡率 : 示唆されたヘルシー・マイグランド効果. *日本公衆衛生雑誌* / 64巻 (2017) 12号.
- 84) **Takayuki Wada, Minako Hijikata, Shinji Maeda, Nguyen Thi Le Hang, Pham Huu Thuong, Nguyen Phuong Hoang, Nguyen Van Hung, Naoto Keicho** : Complete Genome Sequences of Three Representative *Mycobacterium tuberculosis* Beijing Family Strains Belonging to Distinct Genotype Clusters in Hanoi, Vietnam, during 2007 to 2009. *Genome Announcements*. 5(27): e00510-17. 2017.
- 85) **Takayuki Wada, Minako Hijikata, Shinji Maeda, Nguyen Thi Le Hang, Pham Huu Thuong, Nguyen Phuong Hoang, Nguyen Van Hung, Naoto Keicho** : Complete genome sequence of a *Mycobacterium tuberculosis* strain belonging to the East African-Indian family in the Indo-Oceanic lineage, isolated in Hanoi, Vietnam. *Genome Announcement*. 5(24) e00509-17. 2017.
- 86) **Haruno Yoshida, Takayuki Wada, Daisuke Taniyama, and Takashi Takahashi** : Draft genome sequence of clinical strain TANI1 of *Streptococcus suis* serotype 5 isolated from a bacteremia patient in Japan. *Genome Announcement*. 5: e00260-17. 2017.

- 87) **Seto J, Wada T, Suzuki Y, Ikeda T, Mizuta K, Mitarai S, Ahiko T** : Convenient PCR method for variable-number tandem-repeat typing of Mycobacterium tuberculosis clinical isolates. J Microbiol Methods. Aug; 139: 12-14. 2017.
- 88) **Takashi Uehara, Hiromu Ito, Jin Yoshimura, Kei-ichi Tainaka, and Genki Ichinose** : Territory holders and non-territory holders in Ayu fish coexist only in the population growth process due to hysteresis. Scientific Reports. 7: 16777, 2017.

病害動物学分野

- 89) **Kawada H** : Possible New Controlling Measures for the Pyrethroid-Resistant Malaria Vectors. Annals of Community Medicine and Practice, 3 (1), 1019, 2017
- 90) **Kawada H** : Potential control measures for pyrethroid-resistant malaria vectors. Acta Horticulturae, 1169, 59-72, 2017
- 91) **Komagata O, Higa Y, Muto A, Hirabayashi K, Yoshida M, Sato T, Nihei N, Sawabe K, Kobayashi M** : Predicting the Start of the Aedes albopictus (Diptera:Culicidae) Female Adult Biting Season Using the Spring Temperature in Japan. Journal of Medical Entomology, 54 (6), 1519-1524, 2017
- 92) **Oo SZM, Thaung S, Maung YNM, Aye KM, Aung ZZ, Thu HM, Thant KZ, Minakawa N** : Effectiveness of a novel long-lasting pyriproxyfen larvicide (SumiLarv®2MR) against Aedes mosquitoes in schools in Yangon, Myanmar. Parasites & Vectors, 11 (16), 2017
- 93) **Ikeda T, Behera SK, Morioka Y, Minakawa N, Hashizume M, Tsuzuki A, Maharaj R, Kruger P** : Seasonally lagged effects of climatic factors on malaria incidence in South Africa. Scientific Reports, 7 (1) :2458, 2017
- 94) **角田 隆** : 冬季の下北半島におけるカモシカマダニの人体刺症例. 衛生動物68 (3) : 119-120, 2017

臨床感染症学分野

- 95) **Katoh S, Suzuki M, Ariyoshi K, Morimoto K** : Serotype Replacement in Adult Pneumococcal Pneumonia after the Introduction of Seven-Valent Pneumococcal Conjugate Vaccines for Children in Japan: a Systematic Literature Review and Pooled Data Analysis. Jpn J Infect Dis. 2017 Sep 25;70(5):495-501
- 96) **Miyahara R, Takahashi K, Anh NT, Thiem VD, Suzuki M, Yoshino H, Tho LH, Moriuchi H, Cox SE, Yoshida LM, Anh DD, Ariyoshi K, Yasunami M** : Exposure to paternal tobacco smoking increased child hospitalization for lower respiratory infections but not for other diseases in Vietnam. Sci Rep. 2017 Mar 31;7:45481.
- 97) **Suzuki M, Dhoubhadel BG, Ishifuji T, Yasunami M, Yaegashi M, Asoh N, Ishida M, Hamaguchi S, Aoshima M, Ariyoshi K, Morimoto K** : Serotype-specific effectiveness of the 23-valent pneumococcal polysaccharide vaccine against pneumococcal pneumonia among adults aged ≥65 years: a multicenter prospective test-negative design study. Lancet Infect Dis. 2017 Mar;17(3):313-321.

- 98) **Ishifuji T, Sando E, Kaneko N, Suzuki M, Kilgore PE, Ariyoshi K, Morimoto K, Hosokawa N, Yaegashi M, Aoshima M** : Adult Pneumonia Study Group - Japan (APSG-J). Recurrent pneumonia among Japanese adults: disease burden and risk factors. *BMC Pulm Med*. 2017 Jan 11;17(1):12
- 99) **Saito N, Komori K, Suzuki M, Morimoto K, Kishikawa T, Yasaka T, Ariyoshi K** : Negative impact of prior influenza vaccination on current influenza vaccination among people infected and not infected in prior season: A test-negative case-control study in Japan. *Vaccine*. 2017 Jan 23;35(4):687-693. doi: 10.1016/j.vaccine.2016.11.024. Epub 2016 Dec 30.
- 100) **Shrestha D, Shrestha MK, Raya GB, Bhattachan A, Hayashi K, Ariyoshi K** : Parry CM, Dhoubhadel BG. A 14-year-old girl presenting with tuberculous intestinal perforation while in a temporary shelter after the 2015 earthquake in Nepal. *Paediatr Int Child Health*. 2017 Jan 25:1-4.
- 101) **Katsurada N, Suzuki M, Aoshima M, Yaegashi M, Ishifuji T, Asoh N, Hamashige N, Abe M, Ariyoshi K, Morimoto K** : Adult Pneumonia Study Group-Japan. The impact of virus infections on pneumonia mortality is complex in adults: a prospective multicentre observational study. *BMC Infect Dis*. 2017 Dec 6;17(1):755.
- 102) **Zabihullah R, Dhoubhadel BG, Rauf FA, Shafiq SA, Suzuki M, Watanabe K, Yoshida LM, Yasunami M, Zabihullah S, Parry CM, Mirwais R, Ariyoshi K** : Risk for Death among Children with Pneumonia, Afghanistan. *Emerg Infect Dis*. 2017 Aug;23(8):1404-1408.
- 103) **Suzuki M, Dhoubhadel BG, Katoh S, Ariyoshi K, Morimoto K** : 23-valent pneumococcal polysaccharide vaccine against pneumococcal pneumonia. *Lancet Infect Dis*. 2017 Aug;17(8):803-804.
- 104) **Funk S, Ciglenecki I, Tiffany A, Gignoux E, Camacho A, Eggo RM, Kucharski AJ, Edmunds WJ, Bolongei J, Azuma P, Clement P, Alpha TS, Sterk E, Telfer B, Engel G, Parker LA, Suzuki M, Heijnenberg N, Reeder B** : The impact of control strategies and behavioural changes on the elimination of Ebola from Lofa County, Liberia. *Philos Trans R Soc Lond B Biol Sci*. 2017 May 26;372(1721).
- 105) **Darvishian M, van den Heuvel ER, Bissielo A, Castilla J, Cohen C, Englund H, Gefenaite G, Huang WT, la Bastide-van Gemert S, Martinez-Baz I, McAnerney JM, Ntshoe GM, Suzuki M, Turner N, Hak E** : Effectiveness of seasonal influenza vaccination in community-dwelling elderly people: an individual participant data meta-analysis of test-negative design case-control studies. *Lancet Respir Med*. 2017 Mar;5(3):200-211.
- 106) **Ganguanco LMA, Sawada I, Tsuchiya N, Do CD, Pham TTT, Rojanawiwat A, Alejandria M, Leyritana K, Yokomaku Y, Pathipvanich P, Ariyoshi K** : Regional Differences in the Prevalence of Major Opportunistic Infections among Antiretroviral-Naïve Human Immunodeficiency Virus Patients in Japan, Northern Thailand, Northern Vietnam, and the Philippines. *Am J Trop Med Hyg*. 97(1):49-56.2017
- 107) **Shrestha D, Dhoubhadel BG, Parry CM, Prajapati B, Ariyoshi K, Mahaseth C** :

- Predicting deaths in a resource-limited neonatal intensive care unit in Nepal. *Trans R Soc Trop Med Hyg.* 2017 Jul 1;111(7):287-293
- 108) **Do HT, Nguyen DT, Nguyen LAT, Do DH, Le HX, Trinh XMT, Ton HVN, Sawada I, Kitamura N, Le MN, Yoshihara K, Phan THT, Bui CT, Ariyoshi K, Yoshida LM** : An Alarming High Proportion of HIV-1 Isolates Carrying Mutations Corresponding to Resistance to Antiretroviral Drugs among HIV-Positive High-Risk Groups in Central Vietnam: a Substudy of the National Sentinel Survey. *Jpn J Infect Dis.* 2017 Nov 22;70(6):621-627. 2017 Sep 11.
- 109) **Saito N, Komori K, Suzuki M, Kishikawa T, Yasaka T, Ariyoshi K** : Dose-Dependent Negative Effects of Prior Multiple Vaccinations against Influenza A and Influenza B among School Children: A Study of Kamigoto Island in Japan during the 2011/12, 2012/13 and 2013/14 Influenza Seasons. *Clin Infect Dis.* 2018 Mar 8
- 110) **Lee N, Kitashoji E, Koizumi N, Lacuesta TLV, Ribo MR, Dimaano EM, Saito N, Suzuki M, Ariyoshi K** : Parry CM. Building prognostic models for adverse outcomes in a prospective cohort of hospitalised patients with acute leptospirosis infection in the Philippines. *Trans R Soc Trop Med Hyg.* 2017 Dec 1;111(12):531-539

小児感染症学分野

- 111) **Kim SE, Honda Y, Hashizume M, Kan H, Lim YH, Lee H, Kim CT, Yi SM, Kim H** : Seasonal analysis of the short-term effects of air pollution on daily mortality in Northeast Asia. *Sci Total Environ.* 2017;576:850-857.
- 112) **Ishifuji T, Sando E, Kaneko N, Suzuki M, Kilgore PE, Ariyoshi K, Morimoto K, Hosokawa N, Yaegashi M, Aoshima M** : Adult Pneumonia Study Group - Japan (APSG-J). Recurrent pneumonia among Japanese adults: disease burden and risk factors. *BMC Pulm Med.* 2017;11:17(1) 12.
- 113) **Suzuki M, Dhoubhadel BG, Ishifuji T, Yasunami M, Yaegashi M, Asoh N, Ishida M, Hamaguchi S, Aoshima M, Ariyoshi K, Morimoto K** : Adult Pneumonia Study Group-Japan (APSG-J). Serotype-specific effectiveness of 23-valent pneumococcal polysaccharide vaccine against pneumococcal pneumonia in adults aged 65 years or older: a multicentre, prospective, test-negative design study. *Lancet Infect Dis.* 2017 (in press)
- 114) **Kim Y, Gasparrini A, Hashizume M, Honda Y, Ng CFS, Armstrong B** : Heat-related mortality in Japan after the 2011 Fukushima disaster: An analysis of potential influence of reduced electricity consumption. *Environ Health Perspect.* (in press)
- 115) **Toizumi M, Nguyen GTH, Motomura H, Nguyen TH, Pham E, Kaneko K, Uematsu M, Nguyen HA, Dang DA, Hashizume M, Yoshida LM, Moriuchi H** : Sensory defects and developmental delay among children with congenital rubella syndrome. *Scientific Reports.* Scientific Reports 7, Article number: 46483 (2017), doi:10.1038/srep46483
- 116) **Sakata S, Konishi S, Ng CFS, Kishikawa R, Watanabe C** : Association of Asian Dust with daily medical consultations for pollinosis in Fukuoka City, Japan. *Environmental*

- Health and Preventive Medicine. 2017;22:25. doi: 10.1186/s12199-017-0623-x.
- 117) **Stickley A, Ng CFS, Konishi S, Koyanagi A, Watanabe C** : Airborne pollen and suicide mortality in Tokyo, 2001-2011. *Environmental Research*. 2017;155:134-140.
 - 118) 樋泉道子, 小川将人, 神野俊介 : 乳児へのインフルエンザワクチンの是非 (Pros) 小児科臨床 第70巻第3号 日本小児医事出版社 378-381頁 2017年
 - 119) **Miyahara R, Takahashi K, Anh NT, Thiem VD, Suzuki M, Yoshino H, Tho LH, Moriuchi H, Cox SE, Yoshida LM, Anh DD, Ariyoshi K, Yasunami M** : Exposure to paternal tobacco smoking increased child hospitalization for lower respiratory infections but not for other diseases in Vietnam. *Sci Rep*. 2017 Mar 31;7:45481.
 - 120) **Chung Y, Noh H, Honda Y, Hashizume M, Bell ML, Guo YL, Kim H** : Temporal changes in mortality related to extreme temperatures for 15 cities in northeast Asia: adaptation to heat and maladaptation to cold. *Am J Epidemiol*. 2017;21:1-7. doi: 10.1093/aje/kww199.
 - 121) **Ikeda T, Behera SK, Morioka Y, Minakawa N, Hashizume M, Tsuzuki A, Maharaj R, Kruger P** : Seasonally lagged effects of climatic factors on malaria incidence in South Africa. *Sci. Rep*. 2017;7:2458. doi:10.1038/s41598-017-02680-6.
 - 122) **Lal A, Hashizume M, Hales S** : Indian Ocean Dipole and cryptosporidiosis in Australia: short-term and nonlinear associations. *Environ Sci Technol*. 2017 doi: 10.1021/acs.est.6b05146. (in press)
 - 123) **Shi T, McAllister DA, O'Brien KL, Simoes EAF, Madhi SA, Gessner BD, Polack FP, Balsells E, Acacio S, Aguayo C, Alassani I, Ali A, Antonio M, Awasthi S, Awori JO, Azziz-Baumgartner E, Baggett HC, Baillie VL, Balmaseda A, Barahona A, Basnet S, Bassat Q, Basualdo W, Bigogo G, Bont L, Breiman RF, Brooks WA, Broor S, Bruce N, Bruden D, Buchy P, Campbell S, Carosone-Link P, Chadha M, Chipeta J, Chou M, Clara W, Cohen C, Cuellar Ed, Dang DA, Budragchaagiin Dash-yandag , Deloria-Knoll M, Dherani M, Eap T, Ebruke BE, Echavarria M, Emediato CCdFL, Fasce RA, Feikin DR, Luzhao Gentile FA, Gordon A, Goswami D, Goyet S, Groome M, Halasa N, Hirve S, Homaira N, Howie SRC, Jara J, Jroundi J, Kartasasmita CB, Khuri-Bulos N, Kotloff KL, Krishnan A, Libster R, Lopez O, Lucero MG, Lucion F, Lupisan SP, Marccone DN, McCracken JP, Mejia M, Moisi JC, M Montgomery J, Moore DP, Moraleda C, Moyes J, Munywoki P, Mutyara K, Nicol MP, Nokes DJ, Nymadawa P, Oliveira MTdC, Oshitani H, Pandey N, Paranhos-Baccala G, Phillips LN, Picot VS, Rahman M, Rakoto-Andrianarivelo M, Rasmussen ZA, Rath BA, Robinson A, Romero C, Russomando G, Salimi V, Sawatwong P, Scheltema N, Schweiger B, Scott JAG, Seidenberg P, Shen K, Singleton R, Sotomayor V, Strand TA, Sutanto A, Sylla M, Tapia MD, Thamthitiwat S, Thomas ED, Tokarz R, Turner C, Venter M, Waicharoen S, Wang J, Watthanaworawit W, Yoshida LM, Yu H, Zar HJ, Campbell H** : Harish Nair for RSV Global Epidemiology Network. Global, regional, and national disease burden estimates of acute lower respiratory infections due to respiratory syncytial virus in young children in

- 2015: a systematic review and modelling study. *Lancet* (in press)
- 124) **Lee JY, Park EH, Lee S, Ko G, Honda Y, Hashizume M, Deng F, Yi SM, Kim H** : Airborne Bacterial Communities in Three East Asian Cities of China, South Korea, and Japan. *Sci Rep*. 2017 Jul 17;7(1):5545. doi: 10.1038/s41598-017-05862-4.
 - 125) 橋本邦生, 森内浩幸, 中村孝裕, 西脇祐司, 小田嶋博, 富増邦夫, 田代香澄, 小森一広, 北島 翼, 橋爪真弘 : 黄砂による小児呼吸器疾患への影響～長崎での疫学研究から～
日本小児呼吸器学会雑誌 28巻1号 46-51頁 2017年
 - 126) **Zabihullah R, Dhoubhadel BG, Rauf FA, Shafiq SA, Suzuki M, Watanabe K, Yoshida LM, Yasunami M, Zabihullah S, Parry CM, Mirwais R, Ariyoshi K** : Risk for Death among Children with Pneumonia, Afghanistan. *Emerg Infect Dis*. 2017;23(8):1404-1408. doi: 10.3201/eid2308.151550.
 - 127) **Guo Y, Gasparrini A, Armstrong BG, Tawatsupa B, Tobias A, Lavigne E, Stagliorio Coelho MSZ, Pan X, Kim H, Hashizume M, Honda Y, Guo YLL, Wu CF, Zanobetti A, Schwartz JD, Bell ML, Scortichini M, Michelozzi P, Punnasiri K, Li S, Tian L, Osorio Garcia SD, Seposo X, Overcenco A, Zeka A, Goodman P, Dang TN, Dung DV, Mayvaneh F, Saldiva PHN, Williams G, Tong S** : Heatwave and mortality: a multi-country multi-community study. *Environ Health Perspect*. 2017; DOI:10.1289/EHP1026
 - 128) **Armstrong B, Bell ML, Scortichini M, Coelho MS, Guo YL, Guo Y, Goodman P, Hashizume M, Honda Y, Kim H, Lavigne E, Michelozzi P, Saldiva PHN, Schwartz J, Scortichini M, Sera F, Tobias A, Tong S, Wu C, Zanobetti A, Zeka A, Gasparrini A** : Longer term impact of high and low temperature on mortality: an international study to clarify length of mortality displacement. *Environ Health Perspect*. 2017;125(10):107009. doi:10.1289/EHP1756.
 - 129) **Gasparrini A, Guo Y, Sera F, Vicedo-Cabrera MA, Huber V, Tong S, Coelho MS, Saldiva PHN, Lavigne E, Correa PM, Ortega NV, Kan H, Osorio S, Kysely J, Urban A, Jaakkola JJK, Rytö NRI, Pascal M, Goodman PG, Zeka A, Michelozzi P, Scortichini M, Hashizume M, Honda Y, Hurtado-Diaz M, Cruz JC, Seposo X, Kim H, Tobias A, Iniguez C, Forsberg B, Astrom DO, Ragettli MS, Guo YL, Wu C, Zanobetti A, Schwartz J, Bell ML, Dang TN, Van DD, Heaviside C, Vardoulakis S, Hajat S, Haines A, Armstrong B** : Projections of temperature-related excess mortality under climate change scenarios. *Lancet Planetary Health*. 2017;1(9):e360-e367. doi:10.1016/S2542-5196(17)30156-0.
 - 130) **Vicedo-Cabrera AM, Sera F, Guo Y, Chung Y, Arbuthnott K, Tong S, Tobias A, Lavigne E, de Sousa Zanotti Stagliorio Coelho M, Hilario Nascimento Saldiva P, Goodman PG, Zeka A, Hashizume M, Honda Y, Kim H, Ragettli MS, Roosli M, Zanobetti A, Schwartz J, Armstrong B, Gasparrini A** : A multi-country analysis on potential adaptive mechanisms to cold and heat in a changing climate. *Environ Int*. 2017;111:239-246. doi:10.1016/j.envint.2017.11.006.
 - 131) **Do HT, Nguyen DT, Nguyen LAT, Do DH, Le HX, Trinh XMT, Ton HVN, Sawada I, Kitamura N, Le MN, Yoshihara K, Phan THT, Bui CT, Ariyoshi K, Yoshida LM** :

An alarmingly high proportion of anti-retroviral drugs resistant HIV-1 infection among high risk groups in central Vietnam: A sub-study of the national sentinel survey. *Jpn J Infect Dis.* 2017 Nov 22;70(6):621-627. doi: 10.7883/yoken.JJID.2016.512.

- 132) 橋爪真弘：越境汚染物質－黄砂 車谷典男（監修） 環境による健康リスク 日本医師会雑誌 第146巻・特別号(2) S199-S202頁 2017年10月

臨床開発学分野

- 133) **Koonrunsesomboon N, Tharavanij T, Phiphatpatthamaamphan K, Vilaichone RK, Manuwong S, Curry P, Siramolpiwat S, Panchaipornpon T, Kanitnate S, Tammachote N, Yamprasert R, Chanvimalueng W, Kaewkumpai R, Netanong S, Kitipawong P, Sritipsukho P, Karbwang J** : Improved participants' understanding of research information in real settings using the SIDCER informed consent form: a randomized-controlled informed consent study nested with eight clinical trials. *Eur J Clin Pharmacol* 2017 Feb;73(2):141-149. (Impact Factor: 2.710)
- 134) **Lam BQ, Dang NM, Huy NT, Hamano S, Hirayama K.** (2017) : Tacrolimus Prevents Murine Cerebral Malaria. *Immunology.* 150(2):155-161. (Impact Factor: 4.08).
- 135) **Koonrunsesomboon N, Tharavanij T, Phiphatpatthamaamphan K, Vilaichone RK, Manuwong S, Curry P, Siramolpiwat S, Panchaipornpon T, Kanitnate S, Tammachote N, Yamprasert R, Chanvimalueng W, Kaewkumpai R, Netanong S, Kitipawong P, Sritipsukho P, Karbwang J** : Improved participants' understanding of research information in real settings using the SIDCER informed consent form: a randomized-controlled informed consent study nested with eight clinical trials. *Eur J Clin Pharmacol* 2017 Feb;73(2):141-149. (Impact Factor: 2.710)
- 136) **Koonrunsesomboon N, Traivaree C, Chamnanvanakij S, Rungtragoolchai P, Thanapat Y, Karbwang J** : Improved pregnant women's understanding of research information by an enhanced informed consent form: a randomized controlled study nested in neonatal research. *Arch Dis Child Fetal Neonatal Ed* 2017, 0:1-6
- 137) **Na-Bangchang K, Plengsuriyakarn T, Karbwang J** : Research and Development of *Atractylodes lancea* (Thumb) DC as a promising Candidate for Cholangiocarcinoma Chemotherapeutics. *Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine, Volume 2017, Article ID 5929234, 16 pages*
- 138) **Lemma MT, Ahmed AM, Elhady MT, Ngo HT, Vu TL, Sang TK, Campos-Alberto E, Sayed A, Mizukami S, Na-Bangchang K, Huy NT, Hirayama K, Karbwang J** : Medicinal plants for in vitro antiplasmodial activities: A systematic review of literature. *Parasitol Int.* 2017 Dec;66(6):713-720. doi: 10.1016/j.parint.2017.09.002.
- 139) **Mathema VB, Chaijaroenkul W, Karbwang J, Na-Bangchang K** : Growth inhibitory effect of β -eudesmol on cholangiocarcinoma cells and its potential suppressive effect on heme oxygenase-1 production, STAT1/3 activation, and NF- κ B downregulation. *Clin Exp Pharmacol Physiol.* 2017 Nov;44(11):1145-1154. doi: 10.1111/1440-1681.12818. *Epub* 2017 Sep 5.

- 140) **Cherif MS, Dumre SP, Kassé D, Cherif F, Camara F, Koné A, Diakité M, Cisse M, Diallo MP, Le Gall E, Karbwang J, Hirayama K** : Prognostic and Predictive Factors of Ebola Virus Disease Outcome in Elderly People during the 2014 Outbreak in Guinea. *Am J Trop Med Hyg.* 2017 Oct 30. doi: 10.4269/ajtmh.17-0372.
- 141) **Trung LQ, Morra ME, Truong ND, Turk T, Elshafie A, Foly A, Hien Tam DN, Iraqi A, Hong Van TT, Elgebaly A, Ngoc TN, Vu TLH, Chu NT, Hirayama K, Karbwang J, Huy NT** : A systematic review finds underreporting of ethics approval, informed consent, and incentives in clinical trials. *J Clin Epidemiol.* 2017 Nov;91:80-86. doi: 10.1016/j.jclinepi.2017.08.007. Epub 2017 Sep 1.

ケニア拠点

- 142) **Ernest AW, Shah M, John OO, James Y, Taniguchi K and Ichinose Y** : Variation in rotavirus vaccine coverage by sub-counties in Kenya. *Tropical Medicine and Health.* 2017 45:9
DOI: 10.1186/s41182-017-0051-z
- 143) **Shah M, Erick O, Ernest W, Cyrus K, Martin B, Gabriel M, Sora G, Komoto S, James N, Mohamed K, Tsuji K, Taniguchi K, Morita K, Ichinose Y** : Burden of Rotavirus and Enteric Bacterial Pathogens among Children under 5 Years of Age Hospitalized with Diarrhea in Suburban and Rural Areas in Kenya. *Jpn J Infect Dis.* 2017.
- 144) **Hasegawa M, Ernest A W, Inoue Y, Kimura N, Sasaki R, Mizukami T, Shah MM, Shirai N, Take O, Shindo H, Ando Ichinose Y** : Detection of rotavirus in clinical specimens using an immunosensor prototype based on the photon burst counting technique, *Biomedical Optical Express*
- 145) **Ernest AW, Shah M, Martin B, Komoto S, James N, Cyrus K, Erick O, Gabriel M, Taniguchi K, Ichinose Y** : Impact of rotavirus vaccination on rotavirus and all-cause gastroenteritis in peri-urban Kenyan children. *Vaccine* Volume 35, Issue 38, 12 September 2017, Pages 5217-5223
- 146) **Evans AC, Nagi S, Sunahara T, Ngetich BC, Felix B, Ozeki Y, Inoue M, Osada-Oka M, Okabe M, Hirayama Y, Mwatasa C, Adachi K, Faith, Mwendu, Kikuchi M, Nakamura R, Yombo DJK, Kaneoko S, Hirayama K, Shimada M, Ichinose Y, Sammy MN, Matsumoto S, Hamano S** : Spatial distribution and risk factors of *Schistosoma haematobium* and hookworm infections among schoolchildren in Kwale, Kenya.
PLOS Neglected Tropical Diseases, September 1, 2017 DOI: 10.1371/journal.pntd.0005872

ベトナム拠点

- 147) **Tun MMN, Kyaw AK, Hmone SW, Inoue S, Buerano CC, Soe AM, Moi ML, Hayasaka D, Thu HM, Hasebe F, Thant KZ, Morita K** : “Detection of Zika Virus Infection in Myanmar.” *Am J Trop Med Hyg.* 2018 Jan 22. doi: 10.4269/ajtmh.17-0708. [Epub

ahead of print]

- 148) **Ly MHP, Moi ML, Vu TBH, Tun MMN, Saunders T, Nguyen CN, Nguyen AKT, Nguyen HM, Dao TH, Pham DQ, Nguyen TTT, Le TQM, Hasebe F, Morita K** : “Dengue virus infection-enhancement activity in neutralizing antibodies of healthy adults before dengue season as determined by using Fc γ R-expressing cells.” BMC Infect Dis. 2018 Jan 10;18(1):31. doi: 10.1186/s12879-017-2894-7.
- 149) **Moi ML, Nguyen TTT, Nguyen CT, Vu TBH, Tun MMN, Pham TD, Pham NT, Tran T, Morita K, Le TQM, Dang DA, Hasebe F** : “Zikavirus infection and microcephaly in Vietnam.” Lancet Infect Dis 2017 Aug 17(8):805-806. doi: 10.1016/S1473-3099(17)30412-7.

共同研究室

- 150) **Kodama Y, Kuramoto H, Mieda Y, Muro T, Nakagawa H, Kurosaki T, Sakaguchi M, Nakamura T, Kitahara T, Sasaki H** : Application of biodegradable dendrigraft poly-L-lysine to a small interfering RNA delivery system. J Drug Target 25 (1): 49-57, 2017
- 151) **Iyori M, Yamamoto DS, Sakaguchi M, Mizutani M, Ogata S, Nishiura H, Tamura T, Matsuoka H, Yoshida S** : DAF-shielded baculovirus-vectored vaccine enhances protection against malaria sporozoite challenge in mice. Malaria J 16: 390, 2017

10. 2 学会発表演題

- 1) 津山頌章, 高橋健介, 宮原麗子, 山下嘉郎, 高木理博, 田中健之, 望月保志, 古里文吾, 森本浩之輔, 有吉紅也: 両側腎臓摘出術を行った両側腎膿瘍の1例. 日本内科学会九州支部主催第316回九州地方会. 福岡. 2017年1月21日.
- 2) 島守佳菜子, 増田真吾, 北庄司絵美, 山下嘉郎, 高木理博, 田中健之, 森本浩之輔, 有吉紅也, 関野元裕: 重症熱性血小板減少症(SFTS)感染後に播種性トリコスポロン症を来した1例. 日本内科学会九州支部主催第316回九州地方会. 福岡. 2017年1月21日.
- 3) **Risa Nakamura, Sharmina Deloer, Kazuyo Moro, Shinjiro Hamano**: Type 2 innate lymphoid cells exacerbate severe amebic liver abscess in mice. 第10回寄生虫感染免疫研究会. 徳島大学 蔵本キャンパス 藤井節郎記念医科学センター1階 藤井節郎記念ホール. 2017年2月9日~2月10日.
- 4) 永井達也, 額賀正行, 高木 港, 金 秀炫, 矢幡一英, 藤井輝夫, 金子 修, 木村啓志: 赤血球変形能計測データ処理の効率化に向けた画像処理ソフトウェアの開発. 東海大学マイクロ・ナノ啓発会T μ ne第8回学術講演会. 東海大学湘南校舎, 神奈川県平塚市. 2017年2月25日~2月25日.
- 5) **Jusup Marko, Tsuzuki Ataru, Funo Takaaki, Inaba Hisashi, Morioka Yushi, Doi Takeshi, Behera Swadhin, Hashizume Masahiro, Kruger Phillip, Minakawa Noboru, Iwami Shigo**: Wavelet analysis implies a link between climate phenomena and malaria incidence in South Africa. 第64回日本生態学会大会. 東京都, 早稲田大学早稲田キャンパス. 2017年3月14日~3月18日.
- 6) 皆川 昇: Ecology and control of mosquito borne diseases in Africa. 第64回日本生態学会大会. 東京都, 早稲田大学早稲田キャンパス. 2017年3月14日~3月18日.
- 7) 高木 港, 額賀正行, 金 秀炫, 矢幡一英, 藤井輝夫, 金子 修, 木村啓志: 誘電泳動現象を利用した赤血球変形能計測デバイスの開発. 日本機械学会第56回学生員卒業研究発表講演会. 東京理科大学葛飾キャンパス, 東京都葛飾区. 2017年3月16日~3月16日.
- 8) 柳井徳磨, 吉田志緒美, 和田崇之: アジアにおける One Health に基づいた抗酸菌症のサーベイランスネットワークについて. 第90回日本細菌学会総会. 仙台市 仙台国際センター. 2017年3月18日~3月21日.
- 9) **Akihiro Wada, Mohammad Monir Shar, Yoshio Ichinose**: Heat-stable enterotoxin(STp) variants produced by enterotoxigenic Escherichia coli(ETEC). the 90th Annual Meeting of Japanese Society for Bacteriology. Sendai, Miyagi, Japan. 2017年3月19日~3月21日.
- 10) **Masayuki Nakano, Kinnosuke Yahiro**: A new insight into the role of VacA in AZ-521 cells through Rptp α . 第90回日本細菌学会総会. 仙台市 仙台国際センター. 2017年3月19日~3月21日.
- 11) **Mohammad Shah, Martin Bundi, Sora Guyo, Cyrus Kathiiko, Gabriel Miringu, Yoshio Ichinose**: Cholera outbreak caused by drug resistant Vibrio cholerae O1 strains in Kenya. 第90回日本細菌学会. 仙台. 2017年3月19日~3月21日.
- 12) 瀬戸順次, 和田崇之: 結核菌分子疫学の将来展望. 第90回日本細菌学会総会. 仙台市

仙台国際センター. 2017年3月19日～3月21日.

- 13) 瀧井猛将, 御手洗聡, 岩本朋忠, 慶長直人, 吉田志緒美, 土方美奈子, 高木明子, 関航平, 若林靖貴, 近松絹代, 青野昭男, 五十嵐ゆり子, 村瀬良朗, 加藤健吾, 関塚剛史, 山下明史, 黒田 誠, 加藤誠也: アジアの結核菌のゲノムデータベース“GReAT”の構築. 第90回日本細菌学会総会. 仙台市 仙台国際センター. 2017年3月19日～3月21日.
- 14) 田村庄平, 中山真彰, 藤原永年, 和田崇之, 山本三郎, 小崎弘貴, 飯田征二, 大原直也: PDIM/PGLはBCGの胆汁酸に対する抵抗性に関与する. 第90回日本細菌学会. 仙台市 仙台国際センター. 2017年3月19日～3月21日.
- 15) 澤井宏太郎, 菅沼彰太, 松尾加代子, 大津桂子, 野崎恵子, 和田崇之, 丸山史人, 西内由紀子, 福土秀人, 岩本朋忠, 大屋賢司: 東海地方の家畜及び農場内外の環境から分離された非結核性抗酸菌の遺伝子特性. 第90回日本細菌学会総会. 仙台市 仙台国際センター. 2017年3月19日～3月21日.
- 16) 石川岳志, 水田賢志, 金子 修, 矢幡一英: 抗マラリア化合物の開発をめざしたフラグメント分子軌道法によるSERCAとThapsigarginの分子間相互作用解析. 日本薬学会第137年会. 仙台国際センター, 宮城県仙台市. 2017年3月24日～3月27日.
- 17) 都筑隆太, 野間 聖, 鈴木 史, 山脇 聡, 大槻 歩, 中島 啓, 三沢昌史, 金子教宏, 石藤智子, 鈴木 基, 森本浩之輔, 有吉紅也: 細菌性肺炎における胸部CT所見と臨床所見の検討. 第57回日本呼吸器学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
- 18) 加藤隼悟, 濱口杉大, 有吉紅也: 北ベトナムの三次医療機関における感染症課に入院したツツガムシ病奨励の臨床および疫学的特徴. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
- 19) 柿内聡志, 松井昂介, 加藤隼悟, 齊藤信夫, 高木理博, 山下嘉郎, 田中健之, 関野元裕, 森本浩之輔, 有吉紅也: 当院における補助人工心臓 (Ventricular Assist Device; VAD) 症例の周術期抗菌薬と感染性合併症に関する検討. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
- 20) 久保 亨, 松竹豊司, 小野靖彦, 井上幸子, 森田公一, 迎 寛, 河野 茂, 福島喜代康: 遺伝子検査法を用いた薬剤耐性マイコプラズマの検出と病態解析に関する研究. 第91回日本感染症学会総会・学術講演会, 第65回日本化学療法学会総会学術集会 合同学会. 京王プラザホテル (東京都新宿区). 2017年4月6日～4月8日.
- 21) 桂田直子, 鈴木 基, 青島正大, 八重樫牧人, 麻生憲史, 石藤智子, 森本浩之輔, 有吉紅也: 成人市中発生肺炎における呼吸器ウイルスの臨床的役割. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
- 22) 根本祐宗, 野間 聖, 徳本品子, 胡谷俊樹, 都筑隆太, 鈴木 史, 山脇 聡, 大槻 歩, 中島 啓, 三沢昌史, 金子教宏, 青島正大, 石藤智子, 鈴木 基, 森本浩之輔, 有吉紅也: COPD合併肺炎における吸入ステロイド薬の影響についての検討: 単施設後ろ向きコホート研究. 第57回日本呼吸器学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
- 23) 山藤栄一郎, 鈴木 基, 森本浩之輔, 古本朗嗣, 麻生憲史, 八重樫牧人, 石田正之, 濱口杉大, 青島正大, 有吉紅也: 成人市中肺炎における肺炎球菌の血清型分布: J—PAVE study 第一報. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
- 24) 長谷川真也, 八重樫牧人, 石藤智子, 鈴木 基, 森本浩之輔, 有吉紅也: 誤嚥性肺炎患

- 者におけるセフトリアキソンの有効性. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
- 25) 福屋吉史, **Bhim Gopal Dhoubhadel**, 鈴木 基, 有吉紅也: 2015年ネパール大地震が被災者の小児感染症の発生率と疾病構造に及ぼした影響. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
 - 26) 平岡知子, 吉嶺裕之, 田中健之, 鈴木 基, 森本浩之輔, 有吉紅也: 長崎市春回井上病院におけるESBL産生菌保菌者の臨床的特徴. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
 - 27) 鈴木 基, **Bhim Gopal Dhoubhadel**, 桂田直子, 山藤栄一郎, 石藤智子, 金子教宏, 八重樫牧人, 細川直登, 青島正大, 有吉紅也, 森本浩之輔: 高齢者に対する季節性インフルエンザワクチン接種はインフルエンザウイルス性肺炎と肺炎球菌性肺炎を予防するか. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
 - 28) 齊藤信夫, 鈴木 基, 岸川孝之, 森本浩之輔: インフルエンザワクチンの連続接種による減衰効果の検討. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年4月6日～4月8日.
 - 29) **Sai Zaw Min Oo, Noboru Minakawa, Yan Naung Maung Maung, Sein Thaung, Khin Myo Aye, Zar Zar Aung, Hlaing Myat Thu, Khin Yupar Soe And Kyaw Zin Thant**: The effectiveness of newly formulated pyriproxyfen (Sumilarv ? 2 MR) against Aedes mosquitoes found in school compounds in Yangon, Myanmar. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
 - 30) 皆川 昇, **James O Kongere, George O Sonye, Beatrice Awuor**, 胡 錦萍, **Peter A Lutiali, Mercy Mwanja**, 川田 均, 二見恭子, **Sammy M Njenga**: オリセットネットで作った天井式蚊帳の マラリア原虫感染に対する効果のクラスター無作為化比較評価試験. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
 - 31) 角田 隆, **Nguyen Thi Dung, Vi Quynh Trang, Tran Vu Phong**, 皆川 昇: 自滅型オビトラップ開発のための物理的・化学的要因に対するネッタイシマカの誘引性の検討. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
 - 32) 角田 隆: ダニの話. 第69回日本衛生動物学会大会・市民公開講座. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
 - 33) 葛西真治, 角田 隆, 前川芳秀, 糸川健太郎, 室田勝功, 駒形 修, **Tran Chi Cuong, Tran Vu Phong, Nguyen Thi Yen, Vu Sinh Nam**, 皆川 昇, 沢辺京子, 富田隆史: ベトナムで採集されたヤブカ成虫のピレスロイド剤感受性とナトリウムチャネルの変異. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
 - 34) 胡 錦萍, 糸川健太郎, 二見恭子, 比嘉由紀子, 沢辺京子, 皆川 昇: 成田および羽田空港内で発見したネッタイシマカの遺伝構造の解析. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
 - 35) 今西 望, 比嘉由紀子, **Hwa Jen Teng**, 砂原俊彦, 皆川 昇: 日本産ヤマトハマダラカは形態学および分子生物学的に3グループにわかれる. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
 - 36) 砂原俊彦: 大学構内における蚊の防除: 成虫密度が著しく高い地点の周辺の発生みなかわについて. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.

- 37) 砂原俊彦：身近な蚊を減らすには. 第69回日本衛生動物学会大会・市民公開講座. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
- 38) 室田勝功, 小林大介, 藤田龍介, 糸川健太郎, 前川芳秀, 葛西真治, 角田 隆, 皆川 昇, **Tran Chi Cuong, Tran Vu Phong, Nguyen Thi Yen, Vu Sinh Nam**, 伊澤晴彦, 沢辺京子：ベトナムのヤブカより分離されたウイルスに関する解析. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
- 39) 住田雄亮, 川田 均, 皆川 昇：蒸散したノックダウン型ピレスロイドのイエバエ体内への侵入経路. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
- 40) 川田 均, 中澤秀介, 島袋 梢, 大橋和典, **Eggrey Aisha Kambewa, Dylo Foster Pemba**：メトフルトリン製剤を用いたマラウイ共和国におけるマラリアコントロールに関する大規模試験 (1) マラリア媒介蚊個体群に対する密度抑制効果と小児の熱帯熱マラリア陽性率に対する影響. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
- 41) 倉本幹也, 三橋卓也, 高橋佳子, 渡邊明子, 鶴川千秋, 川田 均：吸血忌避試験装置の開発 (1) -ヒトスジシマカの吸血促進因子としての二酸化炭素. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
- 42) 二見恭子, 菊池三穂子, 原 史絵, 胡 錦萍, 皆川 昇, 濱野真二郎：ビクトリア湖浮遊ホテイアオイと住血吸虫中間宿主貝の移動. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
- 43) 比嘉由紀子, 鶴川千秋, 今西 望, 津田良夫, 沢辺京子：長崎市の冬季屋外環境におけるネッタイシマカ卵の越冬について. 第69回日本衛生動物学会大会. 長崎大学. 2017年4月14日～4月16日.
- 44) 樋泉道子, **Giang Thi Huong Nguyen, Thanh Huu Nguyen, Enga Pham**, 金子賢一, 上松聖典, **Duc Anh Dang**, 橋爪真弘, 吉田レイミント, 森内浩幸：ベトナム・カンホア省の先天性風疹症候群の精神運動発達と感覚器障害 — 4年間の追跡調査 —. 第120回日本小児科学会学術集会. 東京都港区. 2017年4月14日～4月16日.
- 45) 石田正之, 廣橋健太郎, 山本 彰, 古屋充子, 森本浩之輔：気胸を契機に発見された Birt-Hogg-Dube(BHD) 症候群の2家系. 第57回日本呼吸器学会. 東京. 2017年4月20日～4月22日.
- 46) **Fredrick Eyase**, 井上真吾, 鍋島 武, **Mya Myat Ngwe Tun, Albert Nyunja, Joel Lutomiah, Allan Ole Kwallah**, 内田玲麻, **Matilu Mwau**, 一瀬休生, 森田公一, **Rosemary Sang**：ケニアにて採集された蚊からのウイルスの分離および同定 (Isolation and identification of mosquito-borne viruses in Kenya). 第52回日本脳炎ウイルス生態学研究会. EM ウェルネスリゾートコスタビスタ沖縄 (沖縄県中頭郡北中城村). 2017年5月19日～5月20日.
- 47) **Mya Myat Ngwe Tun, Yoshihito Muta, Shingo Inoue, Kouichi Morita**：Persistence of Neutralizing Antibody Against Dengue Virus 2 After 70 Years from Infection in Nagasaki. 第52回日本脳炎ウイルス生態学研究会. EM ウェルネスリゾートコスタビスタ沖縄 (沖縄県中頭郡北中城村). 2017年5月19日～5月20日.
- 48) 吉川 亮, 山下綾香, 井上真吾, 松本文昭, 三浦佳奈, 比嘉由紀子, 砂原俊彦, 二見恭子,

- 森田 公一：対馬で続発した日本脳炎患者 (Frequent occurrence case of Japanese encephalitis patients in Tsushima Islands). 52回日本脳炎ウイルス生態学研究会. EM ウェルネスリゾートコスタビスタ沖縄 (沖縄県中頭郡北中城村). 2017年 5月19日～5月20日.
- 49) 佐野正浩, 佐野正浩, 津山頌章, 山下嘉郎, 高木理博, 田中健之, 森本浩之輔, 有吉紅也：Hypermucoviscosity phenotype の *Klebsiella pneumonia* による肝膿瘍・化膿性脊椎炎の一例. 日本内科学会 第317回九州地方会. 沖縄県医師会館. 2017年 5月19日～5月20日.
- 50) 早坂大輔, 内田玲麻, **Mya Myat Ngwe Tun**, 嶋田 聡, 余福 勲, 田口裕香, 佐藤和也, 森田 公一：長崎県のイノシシにおけるダニ媒介性ウイルス感染の血清疫学調査 (Seroepidemiological surveys of tick-borne viruses infections in wild boars in Nagasaki, Japan). 第52回日本脳炎ウイルス生態学研究会. EM ウェルネスリゾートコスタビスタ沖縄 (沖縄県中頭郡北中城村). 2017年 5月19日～5月20日.
- 51) 森田 公一：世界と日本における日本脳炎のリスクと対策. 沖縄感染症シンポジウム (市民公開講座) 「蚊・ダニによってかかる感染症」. EM ウェルネスリゾートコスタビスタ沖縄 (沖縄県中頭郡北中城村). 2017年 5月20日～5月20日.
- 52) **Asada M, Templeton TJ, Montakan J, Ishikawa SA, Tiawsirisup S, Sivakumar T, Namangala B, Takeda M, Mohkaew K, Ngamjituea S, Inoue N, Sugimoto C, Inagaki Y, Suzuki Y, Yokoyama N, Kaewthamasorn M, Kaneko O**：Ungulate malaria parasites. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学 学術交流会館, 北海道札幌市. 2017年 5月28日～5月29日.
- 53) **Awet Alem Teklemichael**, 水上 修作, **Farhana Mosaddeque, Cherif Mahamoud Sama**, 當銘一文, **Nguyen Tien Huy**, 小松かつ子, 平山謙二：Antimalarial activity found in Kampo compounds and extracts. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学 学術交流会館. 2017年 5月28日～5月29日.
- 54) **Basuki S, Fitriah, Risamasu Pm, Kasmijati, Ariami P, Riyanto S, Hidayat A, Susilowati D, Iskandar, Armika B, Budiono, Dchlan Yp**, 神原廣二, 上村春樹：インドネシアの熱帯熱マラリア原虫の薬剤感受性と遺伝子解析. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学 学術交流会館, 北海道札幌市. 2017年 5月28日～5月29日.
- 55) ハキミ ハッサン, 宮崎真也, 坂口美亜子, 金子 修, 麻田正仁：Identification of *Babesia bovis* proteins expressed on the surface of infected erythrocyts. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学 学術交流会館, 北海道札幌市. 2017年 5月28日～5月29日.
- 56) 加藤健太郎, 牧内貴志, **Xunjia Cheng**, 橘 裕司：Entamoeba histolytica と Entamoeba dispar の Ig1 レクチンの溶血活性比較研究. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学 学術交流会館 (札幌市). 2017年 5月28日～5月29日.
- 57) 外川裕人, 麻田正仁, 矢幡一英, 金子 修：Plasmodium yoelii erythrocyte-binding-like (EBL) 遺伝子は赤血球侵入に必須である. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学 学術交流会館, 北海道札幌市. 2017年 5月28日～5月29日.
- 58) 坂口美亜子, **Lucky Ab**, 山岸潤也, 片貝祐子, 川合 覚, 金子 修：Plasmodium knowlesi 感染赤血球のヒト血管内皮細胞への接着能力. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学 学術交流会館, 北海道札幌市. 2017年 5月28日～5月29日.
- 59) 森保妙子, 中村梨沙, **Richard Culleton**, 濱野真二郎：マンソン住血吸虫の先行感染が

マラリア肝臓ステージに及ぼす影響. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学 学術交流会館. 2017年 5月28日～5月29日.

- 60) 中村 梨沙, **Sharmina Deloer**, 茂呂和世, 濱野真二郎: Type 2 innate lymphoid cells exacerbate severe amebic liver abscess in mice. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学学術交流会館. 2017年 5月28日～5月29日.
- 61) 矢幡一英, 麻田正仁, 金子 修: 熱帯熱マラリア原虫のメロゾイト放出における阻害評価法の確立. 第86回日本寄生虫学会大会. 北海道大学 学術交流会館, 北海道札幌市. 2017年 5月28日～5月29日.
- 62) 早坂大輔: 長崎県のイノシシにおけるマダニ媒介ウイルスの血清疫学調査. 第25回ダニと疾患のインターフェースに関するセミナー SADI 2017 伊勢・南伊勢大会. 伊勢赤十字病院多目的ホールやまだ (三重県伊勢市). 2017年 6月9日～6月11日.
- 63) 鈴木 基, 有吉紅也: Experince Vaccination Campaign Against Typhoid:A Public Health Measure afr2015 Earthquake in Neoal. 第91回日本感染症学会. 東京. 2017年 7月6日～7月8日.
- 64) 加藤健太郎, 牧内貴志, **Cheng Xunjia**, 橘 裕司: Entamoeba属のIglレクチンの溶血活性比較研究. 第36回日本糖質学会年会. 旭川市民文化会館 (旭川市). 2017年 7月19日～7月21日.
- 65) 伊東 啓, 小林志穂美, 守田 智: 日本における人口移動を考慮したHTLV-1の拡散モデル. 情報処理学会 第14回ネットワーク生態学シンポジウム. 石川県 JAIST 北陸先端科学技術大学院大学. 2017年 8月20日～8月21日.
- 66) 石崎隆弘, 麻田正仁, 矢幡一英, 金子 修: ネズミマラリア原虫赤血球侵入関連分子分泌動態の解析. 第25回分子寄生虫学ワークショップ&第15回分子寄生虫・マラリア研究フォーラム合同大会. 帯広畜産大学・原虫病研究センター PKホール, 北海道帯広市. 2017年 8月27日～8月30日.
- 67) 麻田正仁, ハキミ ハッサン, 山岸潤也, 坂口美亜子, 矢幡一英, 河津信一郎, 金子 修: Babesia bovis 寄生赤血球のウシ脳毛細血管内皮細胞への接着性に関する ves-1 α 遺伝子配列. 第25回分子寄生虫学ワークショップ&第15回分子寄生虫・マラリア研究フォーラム合同大会. 帯広畜産大学原虫病研究センター PKホール, 北海道帯広市. 2017年 8月27日～8月30日.
- 68) **Mya Myat Ngwe Tun**, 嶋田 聡, **Rohitha Muthugala**, **Aung Kyaw Kyaw**, 森田公一, 早坂大輔: マウスモデルを用いたチクングニヤウイルスの病原性解析. 第70回日本細菌学会九州支部総会 第54回日本ウイルス学会九州支部総会. 那覇市ぶんかテンブス館 (沖縄県那覇市). 2017年 9月8日～9月9日.
- 69) **Nguyen Hai Tuan**, **Pham Duc Tho**, **Naomi Higa**, **Hanako Iwashita**, **Taichiro Takemura**, **Kouichi Morita**, **Tetsu Yamashiro**: Structural analysis of VSP-11 region and relevant genetic islands of a wide variety of Vibrio cholerae strains. 第70回日本細菌学会九州支部総会 第54回日本ウイルス学会九州支部総会. 那覇市ぶんかテンブス館 (沖縄県那覇市). 2017年 9月8日～9月9日.
- 70) 浦田秀造, 安田二郎: L型カルシウムチャネル阻害による重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) ウイルス複製の制御. 第70回日本細菌学会九州支部総会・第54回日本ウイルス学

- 会九州支部総会. 那覇市. 2017年9月8日～9月9日.
- 71) 吉川祿助, 阿部 遙, 末吉真季, オラミデ オロニニィ, 前平由紀, 安田二郎: ラッサウイルス検出のための新規リアルタイム RT-PCR法の開発及び疫学調査. 第54回日本ウイルス学会九州支部総会. 沖縄. 2017年9月8日～9月9日.
 - 72) 黒崎陽平, 上田真保子, 中野雄介, 安田二郎, 小柳義夫, 佐藤 佳, 中川 草: エボラウイルス西アフリカ流行株に見られたアミノ酸変異とその機能的影響. 第70回日本細菌学会九州支部総会・第54回日本ウイルス学会九州支部総会. 沖縄. 2017年9月8日～9月9日.
 - 73) 菊池三穂子, 二見恭子, 風 幸世, **Evans A Chadeka**, 原 史絵, 皆川 昇, 平山謙二, 濱野真二郎: ケニア共和国, ビクトリア湖畔のマンソン住血吸虫症浸淫地における中間宿主 *Biomphalaria* spp のマンソン住血吸虫感染率について. 第11回蠕虫研究会. 長崎 やすらぎ伊王島. 2017年9月9日～9月10日.
 - 74) 長谷川光子, 濱野真二郎, 菊池三穂子: 日本の土壌伝播蠕虫感染率調査 検便回収率と回収率向上要因. 第11回蠕虫研究会. 長崎 やすらぎ伊王島. 2017年9月9日～9月10日.
 - 75) **Moi Meng Ling**: ジカウイルスの世界的な流行と最近の知見. 第160回日本獣医学会学術集会. 鹿児島大学郡元キャンパス (鹿児島県鹿児島市). 2017年9月13日～9月15日.
 - 76) 麻田正仁, **Kaewthamasorn M**, 竹田美香, **Tiawsirisup S**, **Saiwichai T**, **Kaewlamun W**, 金子 修: タイのヤギマラリア原虫. 第160回日本獣医学会学術集会. 鹿児島大学郡元キャンパス, 鹿児島県鹿児島市. 2017年9月13日～9月15日.
 - 77) 安田一行, 山下嘉郎, 池田恵理子, 柿内聡志, 高木理博, 田中健之, 石田佳央理, 安倍邦子, 森本浩之輔, 有吉紅也: Afatinib が奏功した EGFR minor mutation L747P 非小細胞肺癌の一例. 第79回日本呼吸器学会. 日本結核病学会日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会九州支部 秋季学術講演会. 別府. 2017年9月22日～9月23日.
 - 78) 伊藤博之, 山下嘉郎, 泉田真生, 高木理博, 田中健之, 森本浩之輔: 小胞体ストレスは PERK 経路を介して efferocytosis を制御する. 第53回日本肺サーファクタント関連(界面)医学会. 新潟. 2017年9月29日～10月1日.
 - 79) 田中健之, 高木理博, 関野元裕, 森 正彦, 山下嘉郎, 柿内聡志, 田崎 修, 森本浩之輔, 有吉紅也: セロトニンと血管透過性亢進 (Serotonin beyond the brain) 敗血症, ARDS での解析 (中間解析). 第53回日本肺サーファクタント関連(界面)医学会. 新潟. 2017年9月29日～10月1日.
 - 80) 金子 修: マラリア原虫の赤血球侵入. 第73回日本寄生虫学会西日本支部大会. 大阪市立大学, 大阪市. 2017年10月14日～10月15日.
 - 81) 樋泉道子, ドー・ティカムジャン, 本村秀樹, ドー・グエンティン, 森内浩幸, 吉田レイミント: 先天性風疹症候群に伴う動脈管開存症の特徴. 第49回日本小児感染症学会総会・学術集会. 石川県金沢市. 2017年10月21日～10月22日.
 - 82) **Bui Thu Thuy**, **Meng Ling Moi**, **Futoshi Hasebe**, **Kouichi Morita**: Development of a universal and lineage-specific primer sets for Zika virus (ZIKV) detection by using one-step RT-LAMP. 第24回トガ・フラビ・ペスチウイルス研究会. 大阪大学微生物病研究所(大阪府吹田市). 2017年10月23日～10月23日.
 - 83) **Mya Myat Ngwe Tun**, **Aung Kyaw Kyaw**, **Saw Wut Hmone**, **Shingo Inoue**,

- Corazon C Buerano, Aung Min Soe, Meng Ling Moi, Daisuke Hayasaka, Hlaing Myat Thu, Kyaw Zin Thant, Futoshi Hasebe, Kouichi Morita** : Detection of Zika Virus infection in Myanmar. 第24回トガ・フラビ・ペスチウイルス研究会. 大阪大学微生物病研究所 (大阪府吹田市). 2017年10月23日～10月23日.
- 84) **Leo Uchida, Daisuke Hayasaka, Tun Ngwe Mya Myat, Kouichi Morita, Yuko Kato-Mori, Shigefumi Kishida, Yasukazu Muramatsu, Katsuro Hagiwara** : Epidemiological survey of tick-borne viruses in wild deer in Hokkaido, Japan (北海道のエゾシカにおけるマダニ媒介性ウイルスの血清・分子疫学調査). 第67回日本ウイルス学会学術集会. 大阪国際会議場 (大阪府大阪市). 2017年10月24日～10月26日.
- 85) **Makiko Ikeda, Shigeru Tajima, Thi Yhu Nguyen Thuy, Hoai Linh Pham Ly, Thi Hien Le Thu, Nguyen Viet Hoang, Le Thi Quynh Mai, Meng Ling Moi, Koichi Morita, Chang Kweng Lim, Masayuki Saijo, Futoshi Hasebe** : Neutralization potency of the sera from Japanese encephalitis (JE) patients in Vietnam against genotype 1 and V JE viruses (ベトナム人日本脳炎患者血清の日本脳炎ウイルス遺伝子型1型およびV型に対する中和能解析). 第65回日本ウイルス学会学術集会. 大阪国際会議場 (大阪府大阪市). 2017年10月24日～10月26日.
- 86) **Meng Ling Moi, Co Thach Nguyen, Shashika Lavangi Wijesooriya, Thi Thu Thuy Nguyen, Thi Bich Hau Vu, Thi Quynh, Mai Le, Kouichi Morita, Duc Anh Dang, Futoshi Hasebe** : Seroepidemiological surveillance of Zika virus in Vietnam, 2014-2016. 第66回日本ウイルス学会学術集会. 大阪国際会議場 (大阪府大阪市). 2017年10月24日～10月26日.
- 87) **Mya Myat Ngwe Tun, Kodai Nishi, Kouichi Morita, Daisuke Hayasaka** : Molecular imaging of the brain in a mouse model infected with tick-borne encephalitis virus. 第68回日本ウイルス学会学術集会. 大阪国際会議場 (大阪府大阪市). 2017年10月24日～10月26日.
- 88) **Rokusuke Yoshikawa, Jiro Yasuda** : The ability of SFTSV NSs differs between human and mouse. 第65回ウイルス学会. 大阪. 2017年10月24日～10月26日.
- 89) **Shuzo Urata, Jiro Yasuda** : Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome Virus (SFTSV) replication depends on active L-type calcium channel. 第65回日本ウイルス学会学術集会. 大阪. 2017年10月24日～10月26日.
- 90) **Thuy Thu Bui, Moi Ling Meng, Takeshi Nabeshima, Ly Hoailinh Pham, Thuy Thithu Nguyen, Hang Thi Pham, Dinh Thi Dang, Mai Thi Quynh Le, Kouichi Morita, Futoshi Hasebe** : Single amino acid substitution on NS4B protein of dengue virus increases virus fitness in mammalian cell lines. 第69回日本ウイルス学会学術集会. 大阪国際会議場 (大阪府大阪市). 2017年10月24日～10月26日.
- 91) **黒崎陽平, Danyelly Bruneska, Haruka Abe, Rokusuke Yoshikawa, Jos? Luiz De Lima Filho, Jiro Yasuda** : ジカウイルスの迅速分子診断法の開発と臨床評価. 第65回日本ウイルス学会学術集会. 大阪. 2017年10月24日～10月26日.
- 92) **山本香織, 和田崇之, 小向 潤, 宇田瑛子, 清水直子, 松本健二, 下内 昭, 山本太郎** : 大阪市あいりん地域における結核の感染伝播状況 (2006-2015). 第76回日本公衆衛生学

- 会総会. 鹿児島市 宝山ホール. 2017年10月31日～11月2日.
- 93) 市川智生：軍隊胸膜炎問題にみる戦前日本の成人男性の結核罹患. 第76回日本公衆衛生学会総会. 鹿児島市 宝山ホール. 2017年10月31日～11月2日.
- 94) **Taeko Moriyasu, Risa Nakamura, Sharmina Deloer, Richard Culleton, Shinjiro Hamano** : Schistosoma mansoni infection suppresses the growth of Plasmodium yoelii parasites in the liver and reduces gametocyte infectivity to mosquitoes. 第70回日本寄生虫学会南日本支部大会第67回日本衛生動物学会南日本支部大会合同大会 (2017). 奄美市AiAiひろば (2階). 2017年11月4日～11月5日.
- 95) 砂原俊彦：大学構内の蚊対策の試み：雨水ます対策の効果について. 第70回日本寄生虫学会南日本支部大会・第67回日本衛生動物学会南日本支部大会合同大会. 奄美市, 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター. 2017年11月4日～11月5日.
- 96) 二見恭子, **Peter Lutiali, George Sonye, Cassian Mwatele, Sammy Njenga**, 皆川 昇：西ケニアにおけるウイルス感染症媒介蚊の発生源. 第70回日本寄生虫学会南日本支部大会・第67回日本衛生動物学会南日本支部大会合同大会. 奄美市, 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター. 2017年11月4日～11月5日.
- 97) 比嘉由紀子, 二見恭子, **Nguyen Thi Yen**, 沢辺京子：日本型及び大陸型コガタアカイエカの形態変異に関する予備的観察. 第70回日本寄生虫学会南日本支部大会・第67回日本衛生動物学会南日本支部大会合同大会. 奄美市, 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター. 2017年11月4日～11月5日.
- 98) 牧内貴志, 加藤健太郎, **Xunjia Cheng**, 橘 裕司：赤痢アメーバにおけるレクチンサブユニット (Igl) の機能解析. 第50回日本原生生物学会大会 第1回日本共生生物学会大会 合同年会. 筑波大学. 2017年11月17日～11月19日.
- 99) **Basuki S, Fitriah, Habibi M, Budiono, Surya A, Uemura H** : Analysis of Plasmodium falciparum of Kelch 13 and other drug resistant genes after introduction of Artemisinin Combination Therapy in East Kalimantan, Indonesia. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学本郷キャンパス, 東京都文京区. 2017年11月24日～11月26日.
- 100) **Clara Vasquez Velasquez** : Treatment failure suspected by the detection of Trypanosoma cruzi DNA using quantitative Real Time PCR after two months regimen of benznidazole in Chagas disease infected school children in Bolivia. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学 本郷キャンパス. 2017年11月24日～11月26日.
- 101) **Harrell Daniel, Muthiani Yvonne, Muuo Samson, Mwau Matilu, Kaneko Satoshi** : WIRE: a cloud-based civil registration and vital statistics system using a maternal and child healthcare approach during antenatal and postnatal care visits in Kwale County, Kenya. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学 本郷キャンパス. 2017年11月24日～11月26日.
- 102) **Junko Okumura, Futoshi Nishimoto, Tiengkham Pongvogs, Satoshi Kaneko, Miki Miyoshi, Kazuhiko Moji, Sengchanh Kounavong** : Children's health survey for underprivileged population in Lao PDR: A Two-year longitudinal study. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学. 2017年11月24日～11月26日.
- 103) **Kaneko O, Gitaka JN, Takeda M, Kimura M, Idris ZM, Chan CW, Kongere J,**

- Yahata K, Muregi Fw, Ichinose Y, Kaneko A** : Region-specific evolution of SURFIN_{4.1} suggested by the analysis of Kenyan and Thai *Plasmodium falciparum* populations. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学本郷キャンパス内, 東京都文京区. 2017年11月24日～11月26日.
- 104) **Moi Meng Ling** : Utility of conventional laboratory diagnostic tests for differential diagnosis of Zika virus infection by using serum sample. 第58回日本熱帯医学会大会 (グローバルヘルス合同大会2017). 東京大学本郷キャンパス (東京都文京区). 2017年11月24日～11月26日.
- 105) **Ng Cfs, Moriyama M, Oyoshi K, Hashizume M** : Aerosol optical depth and fire data from remote sensing to characterize air particle pollution for epidemiological study in an equatorial city in Southeast Asia. 第58回日本熱帯医学会大会・第32回日本国際保健医療学会学術大会・第21回日本渡航医学会学術集会 合同大会. 東京. 2017年11月24日～11月26日.
- 106) **Phu Ly Minh Huong** : Dengue virus infection-enhancement activity in neutralizing antibodies of healthy adults before dengue season as determined by using FcγR-expressing cells. 第58回日本熱帯医学会大会 (グローバルヘルス合同大会2017). 東京大学本郷キャンパス (東京都文京区). 2017年11月24日～11月26日.
- 107) **Satoshi Shimada** : 蚊と蚊媒介性感染症に関する地域住民の知識とヘルス・リテラシー向上を目的とした『世界モスキートデイ』イベントの活動報告 Activity report on World Mosquito Day in Nagasaki: improving public knowledge and health literacy of mosquito-borne diseases. 第58回日本熱帯医学会大会 (グローバルヘルス合同大会2017). 東京大学本郷キャンパス (東京都文京区). 2017年11月24日～11月26日.
- 108) **Taeko Moriyasu, Risa Nakamura, Sharmina Deloer, Richard Culleton, Shinjiro Hamano** : *Schistosoma mansoni* infection suppresses the growth of *Plasmodium yoelii* parasites in the liver and reduces gametocyte infectivity to mosquitoes. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学本郷キャンパス. 2017年11月24日～11月26日.
- 109) **Yombo Dan Justin Kalenda, Fujii Yoshito, Kayembe Patrick Kalambayi, Kaneko Satoshi** : Current status of filariasis infections in highly endemic areas of the Kongo central province, in the Democratic Republic of the Congo. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学 本郷キャンパス. 2017年11月24日～11月26日.
- 110) **奥村順子** : 途上国におけるUHC達成のための薬剤の課題. グローバルヘルス合同大会2017 シンポジウム10「UHC実現に向けた薬剤に関する諸問題」. 東京大学. 2017年11月24日～11月26日.
- 111) **金子 聡** : 日本のNTD 研究事業—その目的と成果. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学 本郷キャンパス. 2017年11月24日～11月26日.
- 112) **東城文柄, Mwau Matil, Nzou Muuo Samson, 藤井仁人, 濱野真二郎, 平山謙二, 尾崎里恵, Kalenda Justin Yombo, 金子 聡** : Multiplex サーベイランスデータを用いた複数のNTDs の流行分布地図作成可能性の検討. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学 本郷キャンパス. 2017年11月24日～11月26日.
- 113) **東城文柄, Mwau Matil, Nzou Muuo Samson, 藤井仁人, 濱野真二郎, 尾崎里恵,**

- Kalenda Justin Yombo, 金子 聰**：ケニアにおける Multiplex サーベイランスデータの地理解析によるフィラリアの流行分布の推定. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学 本郷キャンパス. 2017年11月24日～11月26日.
- 114) **平山 謙二**：PacELFに対する日本のアカデミアの貢献 (Could Japanese academia contribute more to PacELF?). グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学 本郷キャンパス. 2017年11月24日～11月26日.
- 115) **濱野真二郎**：未来への礎をいかに築くべきか How should we lay the foundation for the future of tropical medicine. グローバルヘルス合同大会2017. 東京大学 本郷キャンパス. 2017年11月24日～11月26日.
- 116) **加藤隼悟**：典型例は氷山の一角に過ぎない—北ベトナムの三次医療機関におけるツツガムシ病症 例の臨床および疫学的特徴 Typical cases are the tip of an iceberg — clinical and epidemiological characteristics of scrub typhus cases in a referral hospital in North Vietnam. グローバルヘルス合同大会2017. 東京. 2017年11月25日～11月26日.
- 117) **山藤栄一郎**：ツツガムシ病の診断に寄与する因子 Factors contributing to the diagnosis of scrub typhus (Tsutsugamushi disease). グローバルヘルス合同大会2017. 東京. 2017年11月25日～11月26日.
- 118) **齊藤信夫**：フィリピン国立感染症病院に入院した狂犬病患者の臨床的特徴の検討 Clinical features of rabies patients admitted in national infectious diseases hospital in the Philippines. グローバルヘルス合同大会2017. 東京. 2017年11月25日～11月26日.
- 119) **齊藤信夫**：多項目自動血球分析装置 XN-30 を用いて測定した熱帯熱マラリアの一例 Case report of Plasmodium falciparum measured by automated hematology analyser (XN-30). グローバルヘルス合同大会2017. 東京. 2017年11月25日～11月26日.
- 120) **齊藤信夫**：フィリピン国立感染症病院に入院し細菌学的検査で確定診断されたジフテリア症例の まとめ Clinical features of laboratory confirmed diphtheria admitted in a national infectious diseases hospital in the Philippines. グローバルヘルス合同大会2017. 東京. 2017年11月25日～11月26日.
- 121) **加藤健太郎, 牧内貴志, Xunjia Cheng, 橋 裕司**：Entamoeba レクチンの Ig1 サブユニットが有する溶血活性に関する研究. 第40回日本分子生物学会年会. 神戸ポートアイランド (神戸市). 2017年12月6日～12月9日.
- 122) **森保妙子, 嶋田 聡, 今西 望**：子ども感染症教室 in 対馬～正しい知識で感染症から身を守ろう！～. 対馬学フォーラム2017. 対馬市. 2017年12月10日～12月10日.
- 123) **Risa Nakamura, Sharmina Deloer, Kazuyo Moro, Shinjiro Hamano**：Type 2 innate lymphoid cells exacerbate severe amebic liver abscess in mice. 第46回日本免疫学会学術集会. 仙台国際センター. 2017年12月12日～12月14日.

10. 3 国際会議における研究発表

- 1) **Hashizume M** : Indian Ocean Dipole and human health. Invited speaker, Workshop on “Application of Ocean and Climate Predictions” Yokohama, Japan. 2017年 1 月25日.
- 2) **Farhana Mosaddeque, Nguyen Tien Huy Shusaku Mizukami Awet Teklemichael Yoshimasa Tanaka Nobuyuki Kobayashi And Kenji Hirayama** : High throughput screening and combinatorial chemistry for the discovery of novel anti-malarial(s). 19th International Conference on Emerging Infectious Diseases in the Pacific Rim. Novotel Ambassador in Seoul Gangnam, Republic of Korea. 2017年 2 月 7 日～ 2 月10日.
- 3) **Lucky AB, Sakaguchi M, Katakai Y, Kawai S, Yahata K, Templeton Tj, Kaneko O** : Plasmodium knowlesi SkeletonBinding Protein 1 Localizes to the ‘Sinton and Mulligan’ Stipplings in the Cytoplasm of Monkey and Human Erythrocytes. US-Japan Cooperative Medical Sciences Program. Novotel Ambassador Seoul Gangnam 130 Bongeunsa ro Gangnam gu Seoul, Seoul, Republic of Korea. 2017年 2 月 7 日～ 2 月 9 日.
- 4) **Hashizume M** : Heath effects of transboundary air pollution. Invited speaker, The 3rd International Symposium on Environmental Health Seoul, South Korea. 2017年 2 月13日.
- 5) **Asada M, Templeton TJ, Jiratanh M, Ishikawa SA, Tiawsirisup S, Sivakumar T, Namangala B, Takeda M, Mohkaew K, Ngamjituea S, Inoue N, Sugimoto C, Inagaki Y, Suzuki Y, Yokoyama N, Kaewthamasorn M, Kaneko O** : Ungulate malaria parasites. Japan-Brazil Malaria Workshop. Sao Paulo, Brazil. 2017年 3 月15日～ 3 月17日.
- 6) **Sunahara T, Odaka M** : Optimum vaccination strategies for malaria elimination. Japan-Brazil Malaria Workshop. Sao Paulo, Brazil. 2017年 3 月15日～ 3 月17日.
- 7) **Yahata K, Pandey K, Ferreira PE, Ishikawa T, Kaneko O** : Ca^{2+} monitoring in Plasmodium falciparum cytosol through yellowameleon-Nano biosensor. Japan-Brazil Malaria Workshop. Sao Paulo, Brazil. 2017年 3 月15日～ 3 月17日.
- 8) **Yasuda J** : Tetherin/BST-2 as a cellular antiviral factor. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium Ryojun Auditorium, Nagasaki University. 2017年 3 月18日.
- 9) 平山謙二 : Search for the effecyive medicine for Chronic Chagas Disease (慢性シャーガス病治療薬の探索). International Course on Advances in Gastroenterolgy and Digestive Endoscopy. ラパス消化器病センター (ボリビア). 2017年 4 月20日～ 4 月20日.
- 10) **Dinesh Mondal, Shinjiro Hamano, Debashis Ghosh, Abdul Alim, MdGolam Hasnain, MMamun Huda, Moshtaq Ahmed Mural, MdShakhawat Hossain, Jorge Alvar, Byron Arana, Jose Postigo, Daniel Argaw, Greg Matlashewski, Be-Nazir Ahmed, Malcolm Duthie, Steve G Reed** : Risk factor for VL and predictors of relapse after treatment in VL. 6th World Congress on Leishmaniasis. Toledo Congress Centre, El Greco. 2017年 5 月16日～ 5 月20日.
- 11) **Md Hasnain Golam, Mohammad Shomik Soheli, Prakash Ghosh, Mamun Rashid Or, Md Hossain Shakhawat, Shinjiro Hamano, Dinesh Mondal** : Post Kala-azar Dermal Leishmaniasis without previous history of visceral leishmaniasis: A case series on identification, confirmation, and treatment. 6th World Congress on Leishmaniasis. Toledo

- Congress Centre, El Greco. 2017年 5 月16日～ 5 月20日.
- 12) **Imai C, Barnett Ag, Hashizume M, Minakawa N, Behera Sk, Kruger P, Tsuzuki A** : Temperature and rainfall as predictors of malaria in Limpopo province, South Africa: application of a switching model. IECID 2017 Impact of Environmental Change on Infectious Diseases. Trieste, Italy. 2017年 5 月17日～ 5 月19日.
 - 13) **Kim Y, Ng Cfs, Chung Y, Imai C, Ratnam J, Morioka Y, Ikeda T, Doi T, Iwami S, Tsuzuki A, Kruger P, Maharaj R, Behera S, Noboru Minakawa N, Hashizume M** : A statistical modelling approach for malaria prediction based on a time-series distributed lag non-linear model. IECID 2017 Impact of Environmental Change on Infectious Diseases. Trieste, Italy. 2017年 5 月17日～ 5 月19日.
 - 14) **Minakawa N, Yoonhee Kim, Chris Fook Sheng Ng, Younseng Chung, Chisato Imai, Jayanthi Ratnam, Yushi Morioka, Takayoshi Ikeda, Takeshi Doi, Shingo Iwami, Ataru Tsuzuki, Philip Kruger, Rajendra Maharaj, Swadhin Behera, Noboru Minakawa, Masahiro Hashizume** : A Statistical Modelling Approach for Malaria Prediction based on a Time-series Distributed Lag Non-linear Model. Impact of Environmental Changes on Infectious Diseases, 2017. Trieste, Italy. 2017年 5 月17日～ 5 月19日.
 - 15) **Asada M, Templeton TJ, Jiratanh M, Ishikawa SA, Tiawsirisup S, Sivakumar T, Namangala B, Takeda M, Mohkaew K, Ngamjituea S, Inoue N, Sugimoto C, Inagaki Y, Suzuki Y, Yokoyama N, Kaewthamasorn M, Kaneko O** : Ungulate malaria parasites. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館, 長崎県長崎市. 2017年 5 月18日～ 5 月19日.
 - 16) **Toizumi M, Suzuki M, Nguyen HAT, Le MN, Ariyoshi K, Moriuchi H, Hashizume M, Dang DA, Yoshida LM** : Respiratory Viruses Increase the Risk of Subsequent Hospitalization for Acute Respiratory Illnesses in Young Children. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium /Leading Program International Symposium 2017. Ryojun Hall, Nagasaki University. 2017年 5 月18日.
 - 17) **Yoshida LM** : Role of viral and bacterial pathogens on pediatric pneumonia in Vietnam. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium /Leading Program International Symposium 2017. Ryojun Hall, Nagasaki University. 2017年 5 月18日.
 - 18) **Yoshihara K, Le MN, Toizumi M, Ariyoshi K, Hashizume M, Dang DA, Yoshida LM** : Difference in Clinical Presentation of Human Metapneumovirus Group-A Lineages Associated with Pediatric ARI Hospitalizations in Central Vietnam. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium /Leading Program International Symposium 2017. Ryojun Hall, Nagasaki University. 2017年 5 月18日.
 - 19) **Asare KK, Lucky AB, Sakaguchi M, Asada M, Miyazaki S, Katakai Y, Kawai S, Song C, Murata K, Yahata K, Kaneko O** : Tether-like structures connect Sinton-Mulligan's clefts and erythrocyte membrane in Plasmodium knowlesi-infected erythrocyte. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International

- Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館, 長崎県長崎市. 2017年5月18日～5月19日.
- 20) **Aung Kyaw Kyaw, Mya Myat Ngwe Tun, Meng Ling, Moi, Takeshi Nabeshima, Kyaw Thu Soe, Saw Myat Thwe, Aye Aye Myint, Kay Thwe Thwe Maung, Win Aung, Daisuke Hayasaka, Corazon CBuerano, Kyaw Zin Thant, Kouichi Morita** : Clinical, virological and epidemiological characterization of dengue outbreak in Myanmar, 2015. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館 (長崎市). 2017年5月18日～5月19日.
 - 21) **Bui Thu Thuy, Meng Ling Moi, Takeshi Nabeshima, Pham Hoai Linh Ly, Pham Thi Hang, Dang Thi Dinh, Nguyen Ngoc Linh, Nguyen Thi Thu Thuy, Le Thi Quynh Mai, Kouichi Morita, Futoshi Hasebe** : Dengue viral genetic diversity in selected dengue patients. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館 (長崎市). 2017年5月18日～5月19日.
 - 22) **Dao Huy Manh, Shusaku Mizukami, Muhareva Raekiansyah, Shyam Prakash Dumre, Satoru Senju, Yasuharu Nishimura, Juntra Karbwang, Kouichi Morita, Kenji Hirayama** : iPS cell derived dendritic cell like cell is infected with dengue virus and acts as antigen presenting cell. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館 (長崎市). 2017年5月18日～5月19日.
 - 23) **Evans Chadeka, Sachiyo Nagi, Toshihiko Sunahara, Ngetich Cheruiyot, Felix Bahati, Shinjiro Hamano** : Spatial Distribution and Risk Factors of Schistosoma haematobium and Hookworm Infections among Schoolchildren in Kwale, Kenya. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学 坂本キャンパス 良順会館. 2017年5月18日～5月19日.
 - 24) **Hakimi H, Miyazaki S, Sakaguchi M, Kaneko O, Asada M** : Identification of Babesia bovis proteins expressed on the surface of infected erythrocytes. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館, 長崎県長崎市. 2017年5月18日～5月19日.
 - 25) **Kegawa Y, Asada M, Yahata K, Kaneko O** : Erythrocyte binding-like protein is essential for the erythrocyte invasion by the rodent malaria parasite Plasmodium yoelii. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館, 長崎県長崎市. 2017年5月18日～5月19日.
 - 26) **Mark Anthony Luz, Meng Ling Moi, Maria Terrese ADimamay, Takeshi Nabeshima, Lady Anne Pangilinan, Mark Pierre Dimamay, Ronald RMatias, Corazon CBuerano, Edith Tria, Filipinas FNatividad, Maria Luisa GDaroy, Futoshi Hasebe, Kouichi Morita** : Virological characterization of DENV circulating in Metro Manila, 2015-2016. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館 (長崎市). 2017年5月18日～5月19日.

- 27) **Meng Ling Moi** : Determination of the role of flavivirus cross-reactive antibodies during Dengue and Zika infection by using common marmosets. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館 (長崎市). 2017年 5 月18日～ 5 月19日.
- 28) **Mitsuko Hasegawa, Shinjiro Hamano, Mihoko Kikuchi** : Sharing the experiences of soil-transmitted helminth elimination in Japan to contribute to developing elimination strategies. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学 坂本キャンパス 良順会館. 2017年 5 月18日～ 5 月19日.
- 29) **Nguyen Co Thach, Meng Ling Moi, Shashika Lavangi Wijesooriya, Mya Myat Tun Ngwe, Nguyen T Thu Thuy, Vu T Bich Hau, Pham T Thu Hang, Le T Quynh Mai, Futoshi Hasebe, Kouichi Morita** : Serological surveillance of Zika virus in Central Vietnam, 2016-2017. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館 (長崎市). 2017年 5 月18日～ 5 月19日.
- 30) **Phu Ly Minh Huong, Meng Ling Moi, Yuki Takamatsu, Takeshi Nabeshima, Pham Hoai Linh Ly, Pham Thi Hang, Dang Thi Dinh, Nguyen Ngoc Linh, Nguyen Thi Thu Thuy, Le Thi Quynh Mai, Corazon C. Buerano, Kouichi Morita, Futoshi Hasebe** : Neurotropic characteristics of dengue serotype 3 virus isolated from a dengue encephalitis patient in Viet Nam. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館 (長崎市). 2017年 5 月18日～ 5 月19日.
- 31) **Risa Nakamura, Sharmina Deloer, Kazuyo Moro, Shinjiro Hamano** : Type 2 innate lymphoid cells exacerbate severe amebic liver abscess in mice. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学 坂本キャンパス 良順会館. 2017年 5 月18日～ 5 月19日.
- 32) **Satoshi Shimada, Guillermo Posadas-Herrera, Kotaro Aoki, Kouichi Morita, Daisuke Hayasaka** : The therapeutic effect of antiserum on severe fever with thrombocytopenia syndrome virus infection in a mouse model. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館 (長崎市). 2017年 5 月18日～ 5 月19日.
- 33) **Sharmina Deloer, Risa Nakamura, Mihoko Kikuchi, Masachika Senba, Taeko Moriyasu, Eman Sayed Mohammed, Shinjiro Hamano** : IL-17A may help to persist of *Entamoeba histolytica* by keeping antagonistic relationship with Th1 response in animal model of intestinal amebiasis. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学 坂本キャンパス 良順会館. 2017年 5 月18日～ 5 月19日.
- 34) **Shashika Lavangi Wijesooriya, Meng Ling Moi, Nguyen Co Thach, Shingo Inoue, Nguyen T Thu Thuy, Vu T Bich Hau, Pham T Thu Hang, Le T Quynh Mai, Kouichi Morita, Futoshi Hasebe** : Seroepidemiological survey for Zika Virus antibodies in febrile

- patients, Central and North Vietnam, 2014-2015. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学医学部良順会館 (長崎市). 2017年5月18日～5月19日.
- 35) **Taeko Moriyasu, Risa Nakamura, Richard Culleton, Shinjiro Hamano** : Pre-existing *Schistosoma mansoni* infection dampened sporozoite-induced malaria liver burden. The 13th Nagasaki-Singapore Medical Symposium / Leading Program International Symposium 2017. 長崎大学 坂本キャンパス 良順会館. 2017年5月18日～5月19日.
 - 36) **Miyazaki S, Zhu X, Kagaya W, Yahata K, Kaneko O** : Characterization of *Plasmodium falciparum* SURFIN_{4.1} N-terminal region for the transport to the Maurer's clefts in the infected red blood cell. BioMalPar XIII: Biology and Pathology of the Malaria Parasite. EMBL Heidelberg, Germany. 2017年5月29日～5月31日.
 - 37) **Yoshihara K** : Difference in Clinical Presentation of Human Metapneumovirus Group-A Lineages Associated with Paediatric ARI Hospitalizations in Central Vietnam during 2007-2015. The 5th ISIRV-AVG Conference. Shanghai, China. 2017年6月14日～6月16日.
 - 38) **Hashizume M** : Time-Series Regression Model for Infectious Disease and Weather. The International Workshop on Environmental Epidemiology Tsukuba, Japan. 2017年6月26日.
 - 39) **Kim Y** : Malaria Prediction Using Weather-Based Time-Series DLNM. The International Workshop on Environmental Epidemiology Tsukuba, Japan. 2017年6月26日.
 - 40) **Ng CFS** : Chemical Constituents and Sources of PM_{2.5} and Lung Function of Asthmatic Adults during Springtime in Nagasaki City. The International Workshop on Environmental Epidemiology Tsukuba, Japan. 2017年6月26日.
 - 41) **Ng CFS** : Assessing the Health Impacts of Haze Pollution in the Southeast Asia Using Remote Sensing and Ground-based Data (JAXA). The International Workshop on Environmental Epidemiology Tsukuba, Japan. 2017年6月26日.
 - 42) **Yasuda J** : Development of rapid and portable diagnostic assays for Ebola and Zika virus diseases. 20th General Meeting, Symposium II, The Korean Society of Clinical Microbiology Lotte Buyeo Resort, Boyeo, South Korea. 2017年7月6日.
 - 43) **Basuki S, Fitriah, Risamasu Pm, Kasmijati, Ariami P, Riyanto S, Hidayat A, Susilowati D, Iskandar, Armika B, Budiono, Dachlan Yp, Kanbara H, Uemura H** : Sulphadoxine-Pyrimethamine Efficiency and *Plasmodium falciparum* dhfr and dhps Genotypes in Indonesia Parasites. 2nd Molecular and Cellular Life Sciences International Conference. Universitas Airlangga, Surabaya, Indonesia. 2017年7月17日～7月18日.
 - 44) **阿部 遥, 牛島由理** : The SYMAV project: Investigation of viral diseases in Gabon. Les promesses de la biomedecine vues d'Afrique. ガボン (ランバレネ). 2017年7月19日～7月26日.
 - 45) **Takagi M, Nukaga M, Kim S-H, Yahata K, Fujii T, Kaneko O, Kimura H** : Estimation of Electrodynamical Forces on Microdevice for Deformability Measurement of Cells. マイクロ・ナノ研究開発センター国際シンポジウム2017 MNTC International Symposium 2017. Tokai University, Shonam Campus Hiratsuka, Kanagawa, Japan. 2017年

8月26日～8月27日.

- 46) **Abkallo HM, Martinelli A, Inoue M, Hayashida K, Sugimoto C, Kaneko O, Illingworth CJR, Pain A, Culleton R** : Rapid identification of genes controlling major phenotypes in malaria parasites using a genomics-driven Linkage Group Selection (LGS) approach. The 16th Awaji International Forum on Infection and Immunity. Awaji Yumebutai International Conference Center, Awaji, Hyogo. 2017年9月5日～9月8日.
- 47) **Awet Alem Teklemichael, Mizukami Shusaku, Toume Kazufumi, Mosaddeque Farhana, Fukuda Michiko, Sama Cherif Mahamoud, Huy Tien Nguyen, Komatsu Katsuko, Hirayama Kenji** : Japanese Traditional (Kampo) Medicine as a Promising Antimalarial Drug. 第16回あわじ感染症フォーラム. あわじ夢舞台. 2017年9月5日～9月8日.
- 48) **Chitama BYA, Miyazaki S, Zhu X, Kagaya W, Yahata K, Kaneko O** : Amino acids in the Plasmodium falciparum SURFIN_{4.1} N-terminal region that affect its export to the infected red blood cell cytosol. The 16th Awaji International Forum on Infection and Immunity. Awaji Yumebutai International Conference Center, Awaji, Hyogo. 2017年9月5日～9月8日.
- 49) **Ernest Medard, Abdulraheem Muhydeen, Ifeoma Ezugbo-Nwobi, Adebola E. Orimadegun, Akira Kaneko, Richard Culleton** : Genetic Analysis of Drug Resistance Genes in Plasmodium falciparum, Plasmodium malariae and Plasmodium ovale Isolated from Asymptomatic individuals in South-East Nigeria. 第16回あわじしま感染症・免疫フォーラム. 兵庫県・淡路市. 2017年9月5日～9月8日.
- 50) **Kegawa Y, Asada M, Yahata K, Kaneko O** : Erythrocyte binding-like protein is essential for the erythrocyte invasion by the rodent malaria parasite Plasmodium yoelii. The 16th Awaji International Forum on Infection and Immunity. Awaji Yumebutai International Conference Center, Awaji, Hyogo. 2017年9月5日～9月8日.
- 51) **Kijogi C, Kimura D, Bao L.Q, Nakamura R, Chadeka E.A, Cheruiyot N.B, Bahati F, Yahata K, Kaneko O, Njenga S.M, Ichinose Y, Hamano S, Yui K** : Modulation of the immune responses by Plasmodium falciparum infection in asymptomatic children living in the endemic region of Mbita, western Kenya. 第16回あわじしま感染症・免疫フォーラム. 淡路夢舞台国際会議場. 2017年9月5日～9月7日.
- 52) **Kijogia C, Kimura D, Bao LQ, Nakamura R, Yahata K, Kaneko O, Ichinose Y, Hamano S, Yui K** : T-cell responses to Plasmodium falciparum and Schistosoma mansoni infections in asymptomatic children living in the endemic region of Mbita, western Kenya. The 16th Awaji International Forum on Infection and Immunity. Awaji Yumebutai International Conference Center, Awaji, Hyogo. 2017年9月5日～9月8日.
- 53) **Meng Ling Moi, Shashika Lavangi Wejesooriya, Co Thach Nguyen, Thi Thu Thuy Nguyen, Thi Bich Hau Vu, Mya Myat Tun Ngwe, Tho Duoc Pham, Ngoc Thanh Pham, Thuan Tran, Thi Quynh Mai Le, Duc Anh Dang, Futoshi Hasebe, Morita Kouichi** : Zika virus infection and microencephaly in Vietnam, 2014-2016. 第16回あわじしま感染症・免疫フォーラム. 淡路夢舞台国際会議場 (兵庫県淡路市). 2017年9月5日～

9月8日.

- 54) **Richard Culleton, Abhinay Ramaprasad, Arnab Pain** : Phenotypic, Genotypic, and Transcriptomic Characterisation of the *Plasmodium vinckei* clade of Rodent Malaria Parasites. 第16回あわじしま感染症・免疫フォーラム. 兵庫県・淡路市. 2017年9月5日～9月8日.
- 55) **Thawnashom K, Kaneko M, Xangsayarath P, Yahata K, Asada M, Adams JH, Kaneko O** : Stable maintenance of a plasmid containing the *Plasmodium vivax* centromere in *Plasmodium yoelii* throughout its life cycle. The 16th Awaji International Forum on Infection and Immunity. Awaji Yumebutai International Conference Center, Awaji, Hyogo. 2017年9月5日～9月8日.
- 56) **Minh Huong Phu Ly, Meng Ling Moi, Hau Vu Thi Bich, May Myat Ngwe Tun, Todd Saunders, Cam Nguyen Nhat, Anh Nguyen Thi Kieu, Hung Nguyen Manh, Than Dao Huu, Quyen Pham Do, Thuy Nguyen Thi Thu, Mai Le Thi Quynh, Futoshi Hasebe, Kouichi Morita** : Absence of Dengue virus infection-enhancement activity in neutralizing antibodies of healthy adults before dengue season as determined by using Fc γ R-expressing cells. 第70回日本細菌学会九州支部総会 第54回日本ウイルス学会九州支部総会. 那覇市ぶんかテンブス館(沖縄県那覇市). 2017年9月8日～9月9日.
- 57) **Hakimi H, Yamagishi J, Sakaguchi M, Kaneko O, Asada M** : *ves1* a genes expression is correlated with cytoadhesion of *Babesia bovis* to endothelial cell. The 28th Molecular Parasitology Meeting. Marine Biological Laboratory, Woods Hole, MA, USA. 2017年9月10日～9月14日.
- 58) **Ishizaki T, Sivakumar T, Hayashida K, Igarashi I, Yokoyama N** : *Babesia bovis* BOV57, a *Theileria parva* P67 homolog, is an invasion-related, neutralization-sensitive antigen. The 28th Molecular Parasitology Meeting. Marine Biological Laboratory, Woods Hole, MA, USA. 2017年9月10日～9月14日.
- 59) **Kegawa Y, Asada M, Yahata K, Kaneko O** : Erythrocyte binding-like protein is essential for the erythrocyte invasion by the rodent malaria parasite *Plasmodium yoelii*. The 28th Molecular Parasitology Meeting. Marine Biological Laboratory, Woods Hole, MA, USA. 2017年9月10日～9月14日.
- 60) **Kurosaki Y, Mahoko T, Ueda, Taisuke Izumi, Yusuke Nakano, Olamide K. Oloniniyi, Jiro Yasuda, Yoshio Koyanagi, Kei Sato, So Nakagawa** : Functional mutations in spike glycoprotein of ebolaviruses associated with alterations in infection efficiency. 9th International Filovirus Symposium 2017. ドイツ. 2017年9月13日～9月16日.
- 61) **O Oloniniyi, Y. Kurosaki, S. Urata, J. Yasuda** : Discovery of anti-Ebolavirus drugs using an optimized minigenome system for high-throughput screening. 9th International Filovirus Symposium 2017. ドイツ. 2017年9月13日～9月16日.
- 62) **Hashizume M** : Climate, climate change and health. Faculty of Public Health Universitas Indonesia Science Festival. The 3rd International Meeting of Public Health (IMOPH) Jakarta, Indonesia. 2017年9月17日.

- 63) **Chung Ys, Yang Dw, Gasparrini A, Vicedo-Cabrera A, Ng Cfs, Kim Y, Honda Y, Hashizume M** : Temporal variation in susceptibility to temperature and the associated climate, demographic and socio-economic factors from 1972 to 2012 in Japan. 29th Annual Conference of the International Society for Environmental Epidemiology. Sydney, Australia. 2017年 9 月25日～ 9 月28日.
- 64) **Kim Y, Chung Ys, Ng Cfs, Kim H, Honda Y, Guo Yl, Chen By, Hashizume M** : Seasonal changes in suicide risk in unadjusted and adjusted models for weather factors. 29th Annual Conference of the International Society for Environmental Epidemiology. Sydney, Australia. 2017年 9 月25日～ 9 月28日.
- 65) **Ng Cfs, Doi M, Tamura K, Kim Y, Chung Ys, Kunimitsu K, Hashizume M, Obase Y, Kohno S, Mukae H** : Chemical composition and sources of fine particle air pollution and lung function of adults with severe asthma in urban Nagasaki, Japan. 29th Annual Conference of the International Society for Environmental Epidemiology. Sydney, Australia. 2017年 9 月25日～ 9 月28日.
- 66) **Eiichiro Sando, Motoi Suzuki, Makito Yaegashi, Masakatsu Taira, Tomoko Ogawa, And Koya Ariyoshi** : Clinical and Epidemiological Characteristics of Japanese Spotted Fever and Scrub Typhus in Central Japan, 2004-2015. IDWeek2017. SanDiego. 2017年10月 4 日～10月 8 日.
- 67) **Konosuke Morimoto, Motoi Suzuki, Lay-Mint Yoshida, Le Nhat Minh, Koya Ariyoshi, And Adult Pneumonia Study Group - Japan** : High prevalence of macrolide resistant Mycoplasma pneumoniae among middle age pneumonia in Japan. IDWeek2017. SanDiego. 2017年10月 4 日～10月 8 日.
- 68) **Motoi Suzuki, Bhim Gopal Dhoubhadel, Naoko Katsurada, Eiichiro Sando, Tomoko Ishifuji, Norihiro Kaneko, Makito Yaegashi, Naoto Hosokawa, Masahiro Aoshima, Koya Ariyoshi, Konosuke Morimoto, And Adult Pneumonia Study Group - Japan** : Influenza Vaccine Effectiveness Against Influenza-Associated Pneumonia and Pneumococcal Pneumonia in Older Adults: A Prospective Test-Negative Design Study. IDWeek2017. SanDiego. 2017年10月 4 日～10月 8 日.
- 69) **Toizumi M** : Characteristics Of Patent Ductus Arteriosus In Congenital Rubella Syndrome. The 13th Congress of Asian Society for Pediatric Research. Hong Kong, China. 2017年10月 6 日～10月 8 日.
- 70) **Yoshida Lm** : The 13th Congress of Asian Society for Pediatric Research /Japan Pediatric Society Symposium Fight against Pneumonia in Asian Children. The 13th Congress of Asian Society for Pediatric Research /Japan Pediatric Society Symposium. Hong Kong, China. 2017年10月 6 日～10月 8 日.
- 71) **Satoshi Ishikawa, Shiomi Yoshida, Takayuki Wada, Sarad Paudel, Satomi Suga, Yasuhiko Mukai** : Tuberculosis in a captive Asian elephant: the first treatment in Japan. 10th International Meeting of Asian Society of Conservation Medicine (ASCM). マレーシア. 2017年10月20日～10月23日.
- 72) **Shiomi Yoshida, Katsuki Matsubara, Atsushi Kojima, Takayuki Wada** :

Mycobacterium marinum infection in scheltopusiks (*ophisaurus apodus*). 10th International Meeting of Asian Society of Conservation Medicine (ASCM). マレーシア. 2017年10月20日～10月23日.

- 73) **Takayuki Wada, Shiomi Yoshida, Kaori Yamamoto, Taro Yamamoto, Satoshi Ishikawa, Satomi Suga, Yasuhiko Mukai** : Genomic monitoring of clinical strains of *Mycobacterium tuberculosis* isolated from a captive Asian elephant. 10th International Meeting of Asian Society of Conservation Medicine (ASCM). マレーシア. 2017年10月20日～10月23日.
- 74) **Risa Nakamura, Sharmina Deloer, Kazuyo Moro, Shinjiro Hamano** : Type 2 innate lymphoid cells exacerbate severe amebic liver abscess in mice. The 5th Annual Meeting of the International Cytokine and Interferon Society. ISHIKAWA ONGAKUDO, ANA CROWNE PLAZA KANAZAWA. 2017年10月29日～11月 2 日.
- 75) **Minakawa N, Yamaguchi M, Sonye G, Awuor B, Tamari N, Minakawa N** : Covering house eave gaps and ceilings with insecticide treated nets may reduce the risk of *Plasmodium* infection among children in Siaya Sub-County, Kenya. American Society of Tropical Medicine & Hygiene (ASTMH), 66th Annual Meeting. Baltimore, Maryland USA. 2017年11月 5 日～11月 9 日.
- 76) **Tamari N, Kongrere J.O, Sonye G. O, Awuor B, Oketch L, Gunga C.O, Sonye F.O, Larson P.S, Minakawa N** : Number of persons sharing a bed net is positively associated with the risk of *Plasmodium* infection in western Kenya. American Society of Tropical Medicine & Hygiene (ASTMH), 66th Annual Meeting. Baltimore, Maryland USA. 2017年 11月 5 日～11月 9 日.
- 77) **Kouichi Morita, Muhareva Raekiansyah, Mihoko Mori, Kenichi Nonaka, Masanobu Agoh, Kazuro Shiomi, Atsuko Matsumoto. Ninh Binh, Viet Nam. 28-29 November 2017** : Screening of dengue virus inhibitors from fungus-derived molecules. Symposium for project“Research in infectious diseases in Viet Nam and development of application in diagnosis, prevention and treatment”. EMERALDA RESORT NINH BINH (VietnamNinh Binh). 2017年11月28日～11月29日.

10. 4 報告書等印刷物

- 1) **Obana S, Simizu K, Yoshimatsu K, Hasebe F, Hotta K, Isozumi R, Nguyen HT, Le MQ, Yamashiro T, Tsuda Y, Arikawa J** : Epizootiological study of rodent-borne hepatitis E virus HEV-C1 in small mammals in Hanoi, Vietnam., J Vet Med Sci. 2017 Jan 20;79(1):76-81. Doi: 10.1292/jvms.16-0355., 2017年 1 月20日.
- 2) 平山謙二： Dengueウイルス感染：軽くて済む人, 重症化する人, 何が違うのか?, 臨床とウイルス 第44巻第 5 号 日本臨床ウイルス学会, 2017年 1 月31日. pp.235~242
- 3) 平山謙二： Dengueウイルス感染：軽くて済む人, 重症化するヒト, 何が違うのか?, 臨床とウイルス, 2017年 1 月31日. pp.235~242
- 4) 濱野真二郎：リーシュマニア症, 今日の治療指針 2017, 2017年 1 月. pp.241~243
- 5) 山本太郎：歴史に学ぶ現代の諸課題-人類が直面する新たな感染症の脅威-, 世界史のしおり 2016年度 3 学期号, 2017年 2 月 2 日. pp.9~11
- 6) **Hang L.K. Nguyen, Hang T.T. Pham, Tinh V. Nguyen, Phuong VM Hoang, Mai T.Q. Le, Taichiro Takemura, Futoshi Hasebe, Daisuke Hayasaka, Akio Yamada, Kozue Hotta** : The genotypes of Orientia tsutsugamushi, identified in scrub typhus patients in northern Vietnam., Trans R Soc Trop Med Hyg 2017 Mar 1;111(3):137-139. doi:10.1093/trstmh/trx022, 2017年 3 月 1 日.
- 7) 川田 均：12章 蚊の行動を制御する現象 誘引と忌避, 招かれない虫たちの話: 虫がもたらす健康被害と害虫管理 , 2017年 3 月 7 日. pp.163~178
- 8) 濱野真二郎：吸虫症, 内科学 第11版, 朝倉書店, 2017年 3 月 8 日. pp.354~360
- 9) 山本太郎：『附論 5 狩猟採集民・農耕民・文明人における病気と病』, 「狩猟採集民からみた地球環境史 自然・隣人・文明との共生」, 2017年 3 月20日. pp.285~296
- 10) 山本太郎：第 6 章 保健衛生問題から見る SDGs -新たな非感染症疾患としての肥満問題と, 処方箋としてのヘルスリテラシー, 「持続可能な開発目標とは何か-2030年へ向けた変革のアジェンダ」, 2017年 3 月30日. pp.128~136
- 11) 有吉紅也：『熱帯地での臨床ウイルス学研究と海外医療協力〜グローバルヘルス時代の医療協力とは〜』, 臨床とウイルス p5-13 45巻 1 号, 2017年 3 月31日. pp.5~13
- 12) 永島 剛, 市川智生, 飯島 渉：第 4 章 神戸：1899 年 開港場の防疫と外国人社会, 衛生と近代：ペスト流行にみる東アジアの統治・医療・社会 (法政大学出版局), 2017年 4 月. pp.97~126
- 13) **Hamano S** : Protozoan Diseases: Amebiasis. In: Quah, S.R. and Cockerham, W.C. (eds.) , The International Encyclopedia of Public Health, 2nd edition. Oxford: Academic Press. 2017. vol. 6, 2017年 5 月. pp.64~69
- 14) 山本太郎：SDGs 高校生自分ごと化プロジェクトページ内『2. 飢餓をゼロに』『3. すべての人に健康と福祉を』について当分野山本太郎が解説。 , 廣角社ウェブサイト「逆引き大辞典」 <https://www.gyakubiki.net/sdgs/>, 2017年 5 月.
- 15) 和田崇之：ヒト, 動物, 環境をとりまく非結核性 抗酸菌の浸淫状況と宿主適応。 , 日本臨床微生物学雑誌. 27(3): 1-10. 2017. , 2017年 6 月25日. pp.1~10
- 16) 比嘉由紀子, 二見恭子：アルボウイルス媒介蚊の生態とその防除法。 , 化学療法の領域

Vol33. No.8, 2017年 7 月25日. pp.144～148

- 17) 比嘉由紀子：第 9 章 蚊の調査法, 蚊のはなし – 病気との関わり – (上村清 編), 2017年 8 月20日. pp.119～128
- 18) 森本浩之輔：「高齢者肺炎予防におけるワクチン接種の重要性」, *Pharma Medica* 2017年 8 月号 Vol.35 No.8, 37-40 , 2017年 8 月. pp.37～40
- 19) 田中美緒, 濱野真二郎：アメーバ赤痢, 医学と薬学「特集 寄生虫症」, 2017, 74(11), 2017年10月27日. p.1399
- 20) 田中美緒, 中村梨沙, 濱野真二郎：住血吸虫症, 小児科臨床〔月刊〕第70巻増刊号, 2017年12月20日. p.2289
- 21) **Hamano S. and William A Petri Jr** : Chapter 209: Amoebiasis in “Feigin, Cherry, Demmler, Kaplan: Textbook of Pediatric Infectious Disease, 8th edition” Elsevier, London, 2017, 2017年 7 月 1 日.
- 22) 森本浩之輔：『抗寄生虫薬』, 今日の治療薬 p122-129 南江堂 2017, 2017年. pp.122～129

11 講演会

11. 1 熱帯医学研究所における所外講師による講演

- 1) Adaptation and multiplication rate variation of *Plasmodium falciparum*

David Conway

医歯薬学総合研究科 大学院セミナー グローバルヘルス総合研究棟1F大セミナー室

2017年9月4日

11. 2 熱帯医学研究所教員による講演

- 1) 「A voyage into the discovery of the genetic mechanisms for malaria parasite resistance to hosts」

Richard Culleton

セミナー 大阪府吹田市大阪大学免疫学フロンティアセンター：iFReC

2017年1月13日

- 2) 「Climate Change and Infectious Diseases」

山本太郎

外務省主催 The Roundtable Seminar on “Climate Change and Fragility Implications on International Security”? 外務省

2017年1月19日

- 3) 「Working opportunities in Japan」

Richard Culleton

講演 東京都千代田区ホテルモントレー半蔵門

2017年1月23日

- 4) 「ケニアで感染症封じ込めシステム開発 女性研究者の挑戦」

戸田みつる

講演 富士見ヶ丘中学校, 同高等学校

2017年1月23日

- 5) 「長崎大学病院でのHIV診療の現状と課題について」

田中健之

長崎県医師会・HIV医療講習会 長崎県医師会館

2017年1月28日

- 6) 「HIV感染症の基礎知識と最近の話題」

有吉紅也

長崎県医師会・HIV医療講習会 長崎県医師会館

2017年1月28日

- 7) 「地球温暖化と熱帯感染症」

橋爪真弘

特別講演 第14回東京小児感染免疫懇話会 東京都文京区, 東京ドームホテル

2017年2月9日

- 8) 「熱帯感染症に効く薬用植物の探索」

平山謙二

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター市民公開講座 北海道大学学術交流会館

2017年2月12日

- 9) 「Working opportunities in Japan」

Richard Culleton

講演 東京都千代田区ホテルモントレー半蔵門

2017年2月27日

- 10) 「Contribution to countermeasures against Ebola virus disease in West Africa by Japan-France partnership, The 4th Nikkei Asian Conference on Communicable Diseases 2017」
Yasuda J
The 4th Nikkei Asian Conference on Communicable Diseases 2017 Naha, Okinawa
2017年3月3日
- 11) 「感染症研究のためのBSL-4施設の必要性」
安田二郎
内閣官房主催公開シンポジウム「新興感染症と向き合う最新の研究と市民の対策」後援：
文部科学省, 厚生労働省 TOKYO FM ホール
2017年3月10日
- 12) 「環境疫学：気温と死亡者数の時系列回帰分析」
橋爪真弘, Chris Fook Sheng Ng
2017年度 日本計量生物学会年会 特別セッション 「疫学と生物統計学との協働」 東京
都文京区, 中央大学後楽園キャンパス
2017年3月16日
- 13) 「グローバル化時代の大学に必要な新興感染症の知識」
安田二郎
フィジカルヘルス委員会 第19回 フィジカルヘルスフォーラム 長崎大学良順会館
2017年3月16日
- 14) 「バイオテロからエボラ出血熱 これまでの産官学連携による研究成果」
安田二郎
東芝メディカルシステムズ株式会社・慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所
(G-SEC) ジョイントシンポジウム「近未来のわが国における科学政策の基本」～パブリック・プライベート・パートナーシップ (PPP) の新たな展開～
2017年3月18日
- 15) 「ウイルス感染症検査システムの開発と長崎大学のBSL-4施設設置計画」
安田二郎
BIKEN セミナー 阪大微研観音寺研究所瀬戸センター
2017年4月24日
- 16) 「疾病媒介蚊と殺虫剤抵抗性」
川田 均
招待講演 公益財団法人大下財団公開シンポジウム, 広島市
2017年5月23日
- 17) 「疾病媒介蚊と殺虫剤抵抗性」
川田 均
招待講演 第31回繊維学会所長会議, 広島市
2017年5月26日
- 18) 「エボラウイルスの謎」
安田二郎
第58回日本臨床ウイルス学会シンポジウム「種を超えるウイルス」 長崎大学医学部記

念講堂

2017年 5 月28日

- 19) 「Update on Efforts with the Construction of a State-of-Art BSL-4 Research laboratory Facility in Japan」

Yasuda J

10th US-Japan Annual Medical Biodefense Research Symposium “Research on Infectious Diseases with High Public Health Consequences” NIAID, NIH, Rockville, MD, USA

2017年 6 月 8 日

- 20) 「成人肺炎球菌性肺炎の疫学とワクチン」

森本浩之輔

呼吸器感染症ワクチン研究会2017 東京ミッドタウン・ホール

2017年 6 月24日

- 21) 「熱帯医学・グローバルヘルスと地域医療」

有吉紅也

長崎大学関連病院長会 ベストウェスタンプレミアホテル長崎

2017年 7 月14日

- 22) 「リーシュマニア症のコントロールを目指して～ラボ・フィールド双方向からのアプローチ Towards the control of leishmaniasis: From the laboratory to the field」

濱野真二郎

招待講演 大阪大学 融合棟 1 階・谷口記念講堂

2017年 7 月21日

- 23) 「アニサキスを探せ！」

奥村順子

子供科学体験型イベント 長崎大学ポンペ会館

2017年 8 月 2 日

- 24) 「エボラウイルスを安全に取り扱える施設のお話」

安田二郎

京大学医科学研究所公開セミナー ラブラボ2017 東京大学医科学研究所

2017年 8 月 2 日

- 25) 「「昼の蚊と夜の蚊」の一環で「蚊, マラリア, フィラリア」について」

奥村順子

子供科学体験型イベント 熱帯医学ミュージアム

2017年 8 月 4 日

- 26) 「エボラ出血熱, ラッサ熱の流行発生地を経てシュバイツァー博士ゆかりの地へ」

安田二郎

日本学術会議第二部会公開学術講演会「アフリカ研究50年－日本の国際貢献」 長崎大学良順会館

2017年 8 月 5 日

- 27) 「Working opportunities in Japan」

Richard Culleton

講演 東京都千代田区ホテルモントレー半蔵門

2017年9月5日

- 28) 「発展途上国における新興ウイルス感染症の診断」

安田二郎

2017電気化学会秋季大会 特別企画シンポジウム「生物機能を利用した医療技術の最先端」 長崎大学

2017年9月10日

- 29) 「高齢化社会における肺炎の疫学とワクチン」

森本浩之輔

成人用肺炎球菌ワクチンセミナー KIT STUDIO 東京第二スタジオ

2017年9月14日

- 30) 「アフリカにおけるマラリア流行予測のための衛生データの活用：警戒システム構築へ向」

皆川 昇

第一回公衆衛生分野での地球観測衛星利用検討会 リモート・センシング技術センター 本社2階 コンファレンスルーム（東京都）

2017年10月12日

- 31) 「2014年－2015年の西アフリカにおけるエボラは何故拡がり、簡単に収束できなかったのか？」

奥村順子

国立大学法人大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎生徒のための科学講座 長崎大学グローバルヘルス研究棟大セミナー室

2017年10月18日

- 32) 「UHC時代の結核検査マネジメント強化－世界的脅威の疾患対策への応用－ Quality Laboratory Management for Tuberculosis in UHC – Appried for Global Threatening Disease Control –」

山本太郎

JICA国際集団研修コース 東京都 結核研究所

2017年10月20日

- 33) 「危険なウイルスから身を守る」

安田二郎

第65回日本ウイルス学会学術集会市民公開講座「ウイルスと生きる」 梅田グランフロントナレッジキャピタル, 大阪

2017年10月22日

- 34) 「熱研の研究者って何する人？」

奥村順子

長崎県立長崎東中学校生徒のための科学講座 長崎大学グローバルヘルス研究棟大セミナー室

2017年10月26日

- 35) 「医学が社会に及ぼす影響」
奥村順子
洗足学園中学校生徒のための科学講座 長崎大学グローバルヘルス研究棟 4 階講義室
2017年10月31日
- 36) 「東アフリカの高地マラリアとインド洋ダイポールモード現象」
橋爪真弘
日本気象学会2017年度秋季大会 専門分科会 気象や気候の変化は人の健康にどのような影響を及ぼすか - 生気象学の知見を共有する - 北海道札幌市
2017年11月 2 日
- 37) 「ヒトは一人では生きていけない」
山本太郎
共同通信社【きさらぎ会】 東京都 新阪急ホテル
2017年11月14日
- 38) 「Working opportunities in Japan」
Richard Culleton
講演 東京都千代田区ホテルモントレイ半蔵門
2017年11月15日
- 39) 「長崎大学熱帯医学研究所附属熱帯医学ミュージアム所蔵フィラリア関係資料の歴史資料としての活用」
市川智生
グローバルヘルス合同大会2017 シンポジウム「感染症アーカイブス」の構築に向けて：
熱帯感染症をめぐる研究情報の整理と歴史化の試み 東京大学本郷キャンパス内
2017年11月26日
- 40) 「ベトナムで発生した先天性風疹症候群の臨床的特徴」
樋泉道子
第21回日本ワクチン学会学術集会 教育セミナー 2 福岡県福岡市
2017年12月 2 日
- 41) 「新興ウイルス感染症に対する創薬」
安田二郎
富山大学和漢医薬学総合研究所・長崎大学熱帯医学研究所第 7 回交流セミナー “熱帯医学と和漢薬研究の新展開—新しい医療体系の構築を目指して—” 長崎大学グローバルヘルス総合研究棟
2017年12月 4 日
- 42) 「BSL-4 facility construction plan of Nagasaki University」
Yasuda J
WHO CONSULTATIVE MEETING ON HIGH/MAXIMUM CONTAINMENT
(BIOSAFETY LEVEL 4) LABORATORIES NETWORKING International Agency for
Research on Cancer (IARC), Lyon, France
2017年12月13日

- 43) 「Seasonal changes in suicide and environmental factors.」

Kim Y

Seoul National University The 36th Colloquium. Seoul, South Korea

2017年12月14日

- 44) 「Heat-related mortality in Japan after the 2011 Fukushima disaster.」

Kim Y

2017 筑波大学ヒューマン・ケア科学専攻学位プログラム国際交流セミナー 茨城県つくば市

2017年12月20日

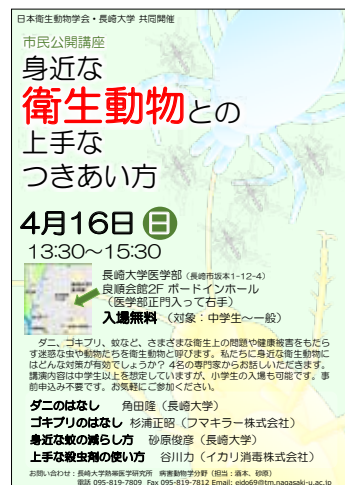
- 45) 「アーカイブと展示の関わり」

奥村順子

長崎大学多文化社会学部選択必修科目 熱帯医学ミュージアム

2017年12月27日

11. 3 熱帯医学研究所主催・共催の市民公開講座(平成29年度)



1. 2017年 4月16日(日) 開催
『身近な衛生動物との上手なつきあい方』
講演者：
角田 隆 (長崎大学),
杉浦 正昭 (フマキラー株式会社),
砂原 俊彦 (長崎大学),
谷川 力 (イカリ消毒株式会社)
会場：
長崎大学医学部
良順会館2F ボードインホール



2. 2017年 6月10日(土) 開催
『大人の蚊学講座
私の“蚊のはなし”』
講演者：
嘉糠 洋陸 (東京慈恵会医科大学),
沢辺 京子 (国立感染症研究所),
椎名 誠 (作家)
会場：
長崎大学坂本キャンパス
医学部記念講堂



3. 2017年 7月28日(金) 開催
『親子蚊学入門 昼の蚊と夜の蚊の話 蚊の運ぶ病気』
講演者：
砂原 俊彦 (熱帯医学研究所),
嶋田 聡 (長崎大学 医歯薬学総合研究科)
会場：
長崎大学坂本キャンパス
良順会館



4. 2017年 8月4日(金) 開催
『子ども蚊学教室』
講演者：
「世界モスキートデイ」
イベント運営委員会
会場：
長崎大学坂本キャンパス
ポンペ会館



5. 2018年 3月25日(日) 開催
『様々な病原体とのお付き合い』
講演者：
金子 修 (長崎大学教授),
飯田 哲也 (大阪大学教授),
川口 寧 (東京大学教授),
喜田 宏 (北海道大学ユニバーシティー
プロフェッサー・特別招聘教授)

12 主要な研究設備

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| 1 反射型蛍光顕微鏡 | 21 液体クロマトグラフ質量分析計 |
| 2 ウルトラミクロトーム | 22 自動焦点維持装置付長時間観察システム |
| 3 落射蛍光位相差顕微鏡 | 23 高感度ノンラベル・ゲノム定量解析システム |
| 4 万能倒立顕微鏡 | 24 デジタルセルソーターシステム |
| 5 走査電子顕微鏡装置 | 25 透過及び操作電子顕微鏡用デジタル画像出力装置 |
| 6 病理組織標本作製システム | 26 多機能超遠心機 |
| 7 原虫遺伝子DNA解析システム | 27 マイクロ流路を応用した遺伝子発現解析装置 |
| 8 宿主・寄生体相互作用解析システム | 28 遺伝子解析システム |
| 9 感染症病原性解析システム | 29 共焦点レーザー顕微鏡システム |
| 10 熱帯性病原体成分機能解析システム | 30 超解像顕微鏡システム |
| 11 多機能ぜん虫行動解析システム | 31 高圧凍結装置 |
| 12 熱帯性ウイルス感染症診断試薬作成システム | 32 自動細胞解析装置 |
| 13 超遠心機 | 33 DNAアナライザ |
| 14 核酸オリゴマー感染症治療薬開発システム | 34 生物用ハイグレード正立顕微鏡 |
| 15 生物顕微鏡 | 35 遺伝子解析システム一式 |
| 16 細菌毒素活性測定解析システム | 36 病原性ウイルス遺伝子及び蛋白質機能解析システム |
| 17 DNAシーケンサー | 37 バイオハザード対策用ラボシステム |
| 18 デジタル画像電子顕微鏡システム | 38 次世代シーケンサーシステム |
| 19 耐腐食構造棚式真空凍結乾燥装置 | |
| 20 リアルタイム定量PCRシステム | |

13 刊行物

1) Tropical Medicine

当研究所が発行した機関誌で、熱帯医学の原著論文のほかに短報や総説などが掲載される。本誌は長崎大学風土病紀要として昭和34年に創刊されたものであるが、昭和42年に研究所名が改められたときにTropical Medicine（熱帯医学）と変更され、さらに平成元年からは英文のみの雑誌となった。毎年4号分を1巻として平成12年度には第42巻が発行されたが、平成13年度から休刊中である。

2) 長崎大学熱帯医学研究所年次要覧

昭和39年3月、当研究所の沿革および研究活動をまとめた最初の「長崎大学風土病研究所年次要覧、昭和38年度」が刊行された。その後、昭和42年の研究所名改称に伴う標記表題への変更はあったが、昭和45年度まで毎年刊行された。昭和46年度から54年度までの分はまとめて昭和56年3月に発行された。昭和55年度から再び毎年発行されることになり現在に至っている。平成28年度年次要覧は平成29年12月に発行された。

3) 長崎大学熱帯医学研究所概要 Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University

国内及び外国からの来訪者に対する当研究所の紹介パンフレットとして、長崎大学熱帯医学研究所案内（A Guide to the Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University）が昭和55年12月に最初に発行された。その後一部改訂されたものが随時発行されてきた。平成元年10月には、当研究所が共同利用研究所に改組されたのを機会に、標記のように表題を改めカラー印刷として発行され、その後は毎年発行されることになった。平成6年度に研究所の機構が大部門制に改組されたのを機に、このパンフレットはB5判からA4判に改められ、また和文版と英語版を別々に作成することになった。

4) 長崎大学熱帯医学研究所共同研究報告集

この報告集は、当研究所が平成元年に全国共同利用研究所に改組されたのに伴い、毎年実施される共同研究と研究集会の概要をまとめたものである。平成29年度の報告集は、平成30年7月に発行された。

長崎大学熱帯医学研究所年報
平成29年度（2017）

平成31年 3 月発行

編集者：長崎大学熱帯医学研究所

発行者：長崎大学熱帯医学研究所

〒852-8523 長崎市坂本 1 丁目12-4

☎(095)819-7800（総合案内）

印刷所：株式会社 インテックス

〒850-0046 長崎市幸町 6 番 3 号

☎(095)826-2200（代）